

UFOと宇宙哲学の研究誌

GAPニュースレター

55



UFOの秘密 (2).....	フランク・スカリー	1
宮内温夫氏、アダムスキーの墓を訪れる.....		13
真の教育とは何か.....	ジッドウー・クリシュナムルティ	14
真我を知るために.....	アリス・ウェルズ	23
聖書・ノストラダムス・アダムスキー.....	堀 公明	24
私の想念観察記録.....	片 京	26
UFO研究とは人間研究.....	久保田八郎	28
日本GAP総会、盛況.....		37
空飛ぶ円盤同乗記 (8) <改訳>.....	ジョージ・アダムスキー	40
声.....		52
月例研究会案内.....		59
編集後記.....		60

★本誌掲載記事の内、海外関係のものは翻訳転載権取得済。
写真共禁無断転載。



GAPとは

GAPは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々が空飛ぶ円盤の真相について「知る」機会を与えられるべきであるという見地に基ずいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて「コズミック・パワー」の御子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界(惑星)から来る友好的な訪問者からもたらされた「生命の科学」の研究と理解を通じて体得できるものです。

日本GAPの目的は円盤とスペースブラザーズ問題に関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1. この太陽系の他の惑星群から偉大な発達をとげた人類が地球を訪問しつつある。
2. 他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト(接触)しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペースブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3. ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の起源と未来の運命の真実を知るのに有益である。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。

◎GAP参加グループを有する国は次のとおりです。

アメリカ、オーストラリア、ベルギー、ブラジル、カナダ、デンマーク、イングランド、フィンランド、ドイツ、オランダ、インドネシア、日本、メキシコ、ノルウェー、スウェーデン、スイス(ABC)の順。1971年6月現在)

イラスト 木村善彦

★表紙写真は一九五六年十一月八日影にベルギー、ランダ、ウツク、ローラ、ランダ、す

連載ノンフィクション

UFOの秘密

フランク・スカリー

前号のあらすじ

●1950年3月8日、米コロラド州デンバー市のデンバー大学で、正体不明の1科学者が円盤問題に関する講演を行なったが、その内容はデンバーから500マイル以内の地点に円盤が着陸したという驚異的な事実で、このため大学を中心に大騒動となった。一方、米空軍は円盤騒ぎをしずめようと躍起になるが、効果はない。ところが、ロサンゼルスของบริษัท員ロイ・ディミックがメキシコ市付近で円盤の残骸と小人のパイロットの死体が発見されたという報告を出して、また大センセーションをひき起こした。〈これは24年前に刊行されて、まもなく大反響を蒙って姿を消した幻の書であるが、消息筋によれば、まぎれもない事実を伝えた貴重な文献であるという〉

「アメリカの軍人たちが不思議な物体を見たんだが、軍部の治安上の理由で、この事件全体が完全に極秘にされてしまったんだ」

翌日デイミックは軍部が「あらかじめ準備された事件」と言っている或る出来事について話した。彼は個人的に円盤を見たことはないが、二人の重要な人物と話し合ったという。一人はメキシコ人で、もう一人はエクアドル人だが、この二人は円盤を見たのである。前者は円盤の一部分だという金属のかたまりを彼にくれた。それはアルミニウムのように見えたが、この地球で知られている金属ではなかったとデイミックはつけ加えた。よくある話である。私もこれに似たような話を扱ったことがある。

「政府は態度をはっきりさせるべきだ。治安という理由でこうした問題を論じたくないというのなら、なぜそのように言明しないのだろうか？」とデイミックはほやく。

だが空軍は何も言わなかった。空軍によれば円盤は「群集ヒステリー」の一種であるのだ。メキシコ航空兵団長ロドリゲス・カルデネスは否定的な言葉をつけ加えて、この種の新聞記事に対する相互の同意ということになれば「良き隣人」的やり方はまだ生きていと言う（注：米空軍が否定すればメキシコ側も同調して否定するの意。実際そのようになつていたので、空中に物体を観測するように訓練されたパイロット、ナビゲーター、その他の要員たちは、もはや空軍情報部へ観測結果を報告することに熱心でなくなつてしまった。荒っぽい返事が多すぎたのだ。観測することは疑いをかけられることであり、知ることは罪であった。アメリカという国がみずからそんな状態にあるということは狂った状態だけれども、やはりそうなのである。

責任ある地位についているほとんどの人が、まるで自分が指導者とし

ての力を持っているかのように、公的な態度をとるようになったのである。もし米国防省がそんなふうによつてゆくとすれば、読者は肯定的な面を強調するような人を頼りにするとよいだろう。

あちこちから出てくる肯定的な報告類のさなかにあつて、シカゴ大学の天文学教授、ジェラルド・P・カイパー博士は、メキシコで報告された円盤の乗員が小人であつたという説を一笑に付したけれども、いわゆる空飛ぶ円盤のパイロットなるものは利口な虫か、または小さな植物かもしれないとほめかした。これは火星で現在生きているものはその程度だろうという理由のためである。

この種の否定は当時その筋から否定されることはないだろう。それが「正しい」方向にそつているからだ。しかもこの考え方は他の天文学者のそれと同じなのである。

ところがカイパー博士と同じほどの高い地位にある天文学者連は、これとは異なる意見を持つているのである。多数の学者はこの問題に関してオーブン・マインドを維持してきた。あの物体（複数）は空飛ぶ円盤だと信じていた人々もあるが、それがどこから来るかは不可解であつた。少数の人はたぶんどこかの惑星から来るのではないかと考えていた。しかしカイパーの気まぐれな発言に乗せられて、大抵の人は円盤が火星から来ると考えていたと読者は思うだろう。一体円盤が火星から来るとしたら火星人が地球を侵略したというSFを書いて米国にセンセーションをまき起こした男）。とつくの昔に死んだR・A・ロックの亡霊か？ それとも軍部の策略なのか？

空軍の将官がこの円盤問題について何かを書いたことは知られていないが、トゥルー誌は何とかして当時の家畜囲いから二人の海軍軍人を脱

出せしめた。元海兵隊パイロットのドナルド・E・キーホー、それにまだ現役の司令官ロバート・E・マックローリンは、みずから見聞した空飛ぶ円盤について記事を書いたのである。それは冗長な、くだらないものだった。それらの記事は意味のないものだったと言えば酷に聞こえるかもしれないが、貧弱な材料だったというよりもむしろ拙い文章だったために、よけいにそうだったのである。とにかくトゥルー誌は円盤分野では最初のものではなく、私はバラエティー誌に書いた記事によってトゥルー誌よりも十週間ほど先を行っていたが、フェート誌は更に私を一年も引き離していた。しかし私の記事は何かの焼直しではない。それまでだれも書いたことのない材料を用いたのである。

その記事の大部分はボストン、バッファロー、カンザス・シティー、ロサンゼルスに及ぶ広範囲の各種新聞に転載されたし、一、二のラジオ局からも放送された。

こうしたすっぱ抜きが続いているあいだ、空軍情報部は空中の観測物を前にして不気味な沈黙を保っていた。だがこの出現物のために全世界の人々は冷戦の議論から空飛ぶ円盤に関する熱心な推測へと方向を変えたのである。

ところでデンバーといえば、一九五〇年三月八日のあのナゾの講演者についての騒ぎが広がっていった。あの科学者の講演がテープに録音されたことや、それがキーラーの働いていたKMYR局で隠されたらしいということなどをだれかがおぼえていた。そしてキーラーの部下がデンバー市の実業家たちにそのテープを聞かせたために、デンバー大学のスパイ行為や逆スパイ行為説のバカらしさをよく理解できたのである。

その頃までには、講演が行なわれたとき町にいなかった学長がいや味たっぷりに発言し始めていて、教授団に指令を発した。これからはもつ

と慎重に講演者を選べというのである。デンバー・ポスト紙関係の匿名の一筆者がこの問題を取り上げようとした。そして論評の中で、訪れて来る講演者のなかで匿名を用いる者を拒絶せよと書きたてたが、これは自分のことを棚に上げて他人を批判するものであった。

ラジオ放送を聞いた市民たちのなかに、同じデンバー・ポスト紙の一記者がいた。彼は大学事件をあらためて日曜版に載せたが、これは陸軍航空隊情報部をふたたび刺激することになった。そこでキーラーはたまりかねて、これ以上拷問の材料を受け入れるわけにはゆかないと言った。「あのナゾの科学者の名前はエドガー・B・デービスだ」と叫んだのである。

これを聞いた人はみな、どうやらほんとうらしいと思った。しかしエドガー・B・デービスとはだれなのか？

ここで新たにその探索が始まったのである。

デンバー市民が講演のテープ録音を聞いていた、ちょうどその時間に、ハリウッドで数名の人が同じ講演のテープ録音を聞いていた。これはオリジナル録音をコピーしたものである。これはハリウッドの或る医師の自宅で聞かれた。その夫人は大学卒の看護婦で、以前は旅客機のホステスであった。この録音テープは或る地球物理学者が保管していたもので、私はこの人を長く知っていた。

このテープを聞いた人たちは驚いてしまった。しかもテープの声と地球物理学者の声がほぼ同一であるという事実によけいに驚いたのである。もちろんデンバーとロサンゼルス間の飛行時間はわずか六時間だから、同じ日に両方の場所にいることは無理なことではない。

ところが三月十七日にデンバー大学教授団、学生たち、新聞社、空軍情報将校連は、廊下の壁に「初心者のための空飛ぶ円盤講座」と題する

ポスターを貼らせた例の科学者の正体をつきとめたのである。

四名の学生とタイムライフ社デンバー支局長バロン・ベシヤ（この男は招待状なしに講演会場に押し入った）は、デンバーのポスト紙に掲載された写真類から判断して、その科学者はサイラス・メーソン・ニュートンだと確信したのである。この人はニュートン・オイル・カンパニーの社長で、一九四二年度コロラド州アマチュア・ゴルフ選手権保持者、ベイラー大学とエール大学卒、ベルリン大学大学院修了、レンジリー油田の再発見者、美術界の後援者、そして大体に世事にたけた人で、いかなれば科学者で資産家であり、どこにもいるような典型的アメリカ人なのである。

一学生がこの講演者をおぼえていると言い出した。この学生はレークウッドのゴルフ場で何度も彼のキャディーをつとめたことがあったために以前からずっとその正体を知っていたのである。だが評判にはならないことがわかっていたので、それまでは話さなかったのだ。この問題は秘密だということになっていなかったのだろうか。

控え目に行なわれたことをスキヤンタラスに見えるようにゆがめられたしまった一大学内のコップの嵐は、三月十七日の午後、ニューメキシコ州ファームントンから出た大事件によって影が薄れてしまった。その町の空が三日間空飛ぶ円盤の乱舞場となったのである。特にセント・パトリック・デーの朝は、その町の半数の人が円盤を見たと報告した。数百機見たという人もあるし、最少九機は見られている。

ファームントンは人口五千のオイルの町である。住民は空を見上げることよりも下を見る方に縁が深かった。彼らの生活区域はニューメキシコ州北部のサンホアン盆地の地の底である。意味ありそうなことだが、これはあの講演者の述べた「デンバーから五〇〇マイル以内」になる。

この町にはただ一種類の新聞、ファームントン・デーリー・タイムズがある。その第一面の上部の片側に「われらの使命——真実。われらの信義——ニューメキシコ」と書いてある。創刊は一八八四年、空軍情報部の開設よりもはるか以前のことで、社会の真実を報道するという点で評判はよい。

三月十八日の朝、この新聞は「円盤の大船隊、ファームントンをゆるがす」という大見出しとともに、同新聞社のスタッフ全員や住民の大半が目撃したという記事を掲げた。これには同社の営業部長クレイトン・J・ボディーと副主筆のオーヴィル・リケッツも名をつらねたが、実際に記事を書いたのは主筆のウォルター・ローガルである。

住民の半分は数百機の不思議な飛行体が前日に空中を飛ぶのを見たという報道され、その数は数機から五百機以上にも及んだという。「その物体が何であるにしても、とにかくこの町で大センセーションをまき起こした」と書いてある。

物体群は空中で鬼ごっこをしているように見えた。ときには信じられないようなスピードで矢のように飛んだりする。三角測量によればそのスピードは時速一千マイルに及び、円盤の大きさはB—二九（注II第二次大戦で活躍した米空軍の爆撃機）の約二倍くらいだったという。

新聞社のデスクは物体を見た人たちの電話が殺到し、どこから来たのか教えてくれとせきたてた。目撃者のほとんどは物体群が銀色の円盤型のもので、一機だけは赤色であったと言っている。

イタリアに駐屯していた米陸軍の元工兵大尉であるクレイトン・J・ボディーが目撃者の一人であった。彼は約五百機いたと考えている人たちの一人である。この推定はコロラド州アントニオから来ていた食料品店経営者ジョーゼフ・C・キャリオフとフランセス・C・キャリオフが

確証した。この二人は新しいチェーン店の敷地を見るためにファーマーミントンに来ていたのである。二人の意見によると、円盤群は編隊を組んで飛んでいるように見えたという。

円盤のスピードの三角測定をやったのは米国土地保護局ファーマーミントン支局長ハロルド・F・サッチャーである。彼は技術屋ではなかったが、部下に技術陣をかかえていたので、大ざっぱな三角測量法を心得ていた。空中に沢山の綿毛がただよつていたのではないかという説を笑いとばして彼は言った。「おれは綿を見たんじゃないよ」。綿説はアンディー・アンドリューズという州のパトロールマンが出したものである。

空飛ぶ円盤が現われたという最初の報告は午前十時十五分に出た。それから一時間のあいだに報告が殺到し続けたのである。

二度目の大規模な目撃は午後三時に発生した。円盤の一機が赤く見ると最初に言い出したのは不動産業のセールスマン、ジョン・イートンと、ガレージの使用人エドワード・ブルックスである。ブルックスはB—二九の後尾銃手だったことがあり、物体群が最新式飛行機であるという説を否定した最初の人である。「あまりにも機動性がすぎた」と言う。別なガレージ使用人のジョン・ブルームフィールドの言うところによれば、物体群はジェット機の約十倍の速度で飛び、ときには直角のターンをやったという。「互いに衝突しそうになったこともある。最後の瞬間に一機は直角で急上昇し、他の一機は直角で急降下した」と言った。「地上から見るとそれらは食事用の皿ぐらいの大きさに見えたよ」と、もう一人の使用人マロー・ウェップが言う。「縦になったり、あらゆる角度で飛んでいたな。だからそれらが皿型だったことが容易にわかったんだ」

飛行雲を吐いているのを見た者はいないし、エンジンの音を聞いた者

もない。全体的には町中がこの現象を冷静に受けとめていた。二、三の特殊な報告を除いては、空軍特有の三種類の宣伝文句——幻覚、大衆ヒステリー、インチキ——の形跡もなかった。この物体群が別な惑星から来たものか、それともアメリカ製の新型航空機なのかについては、町の意見が分かれた。

午前十一時十五分には最多数の円盤群が出現したという報告がファーマーミントン・タイムズにはいったが、十一時三十分にはすべて消えてしまった。十一時三十五分には近くのラスベガスで円盤群を見たという報告が出た。十二名の郵便局員が正午まで飛んでいた一機の円盤を目撃し、海軍予備役中尉の局員ロバート・ヒルガーズは、その物体がすごく高く飛んでいたと述べた。二十マイルはあつたろうという。ラスベガス・デイリー・オブティックは八段抜き大見出しでファーマーミントン事件の記事を掲げた。

こうした物体はタコ、気球、光の反射、近くのアラマゴルドの原爆実験による破片、渦巻き、暗示感応、幻覚、蜃気楼、戦争ボケなどによるものだという空軍のあらゆるごまかしも、このファーマーミントン事件にはあてはまらなかったようだ。町全体が幻を見るはずがないのだ。

ところがいつのまにかこのファーマーミントンの小さな騒ぎはバカでかい話になってしまつていた。というのはこれが一九四八年の春に起こつた円盤着陸騒動と大体に同じ方面にあつたからだ。この年の春にテンパー大学の講演者の一同僚がニューメキシコへ飛ぶようにと緊急の要請を受けたのである。この同僚（私はこの人を「ジー博士」と呼ぶことにしよう）は政府の極秘防衛計画に七年間参画しており、陸海空に関して千七百人の科学者を含む三万五千回の実験に一役割を果たしていた。彼はまだそれに関係していたが、仕事にはかなりうんざりしていた。政府の給

料が安いからだ。

しかし今度はスリルを感じていやにはならなかった。デンバーから目的地へ飛ぶのに三時間しか必要としない。現地へ行ってから、見たところかすり傷もなく、そつと地面に着陸したかのような一機の円盤を見たが、これがこの地球上に最初に着陸した円盤と思われるものであった！

その後まもなく私はこの事を最初はあのデンバー大学の講演者から、次にジーン博士自身の口から聞いたのである。

「そんなことは全然信じられません。だがもつとくわしく話して下さいよ。どんな物体でした？ どこで見つかったのですか？」

その科学者は話してくれたが、更に他の多くの事柄も話したので、私はその町の名前を忘れてしまった。彼はオレゴン州とモハーベ砂漠の地磁気の断層について説明し、円盤のパイロットたちがそれに関心を持っていたらしいと語り、この関心が円盤の推進力と何かの関係があるかどうかを調べているところだと言う。円盤パイロットたちは地球人の知らないような飛行の秘密をすでにマスターしているのではないかとも言った。私は数ヶ月間この話を秘密にしたが、円盤問題をよく知らない連中が円盤についてあちこちで話し始めるや、今が世間に洩らすシオ時だと思つた。新聞で読んだ以上にくわしい真相を私が知っているという証拠はないのだ。

デンバー・ポスト紙が科学者X氏のことを報道し、ファーマントンの市民たちがハッシュハッシュ作戦のことを話していた夜、私はデンバー中の人が探していたあの「人」と一緒にハリウッドで食事していた。相手はちょうど長距離電話でデンバーのジョージ・キラーと話し終わつたところであった。キラーは彼のために働いており、彼の姪と結婚していた。ファーマントンの円盤出現事件の報道はデンバーをわかせてい

るとキラーが伝えたと言う。

「君に話したことをおぼえているかね？」とX氏は受話器をおいてから話す。「最初の空飛ぶ円盤がアズテクから二十一キロの牧場で発見されたということをして——」

私は忘れていたが、思い出した。「ええ、思い出しました」

「ファーマントンはその牧場から三十八キロしかない。彼らは（あの円盤の大群は）一年前に仲間の一機が落ちた場所の上空を飛んだのだ」

「なぜその地域の偵察を続けるのでしょうか？ 故郷へ帰りそこなつた円盤に対する弔いなのでしょうか、それとも円盤を墜落させた特殊な地磁気の断層を克服したことを示すためでしょうか？」と私は尋ねた。

「そのことはデンバー大学の私の講演の中で話したよ。君は注意を払わなかつたのかね？」

（以上は久保田八郎訳）

第二章

「その科学者は何を言つたか」

「教会に近づくほど神からは遠くなる」ということわざは、あまり深く考えて言ったものではないだろうが（でなかったら、修道僧たちの信仰の深いことなど説明がつかないだろう）、それにしても、遠くの岡の上に住む世捨て人のほうが隣りの人よりもあなたの家の内部がよく見えるということはあるだろう。科学者X氏がデンバー大学の学生たちに何を話したかをもっとも正確に伝えたのがデンバーの新聞ではなかったことも、右のような理由によるものだろう。報道賞はサマーサイド・ジャーナル紙に与えられるべきである。これは、カナダのニュー・ファウンドランドとセント・ローレンス河口のニュー・ブランズウィックの中間にあるプリンス・エドワード島に本社のある、あまり大きくない新聞社である。この新聞がデンバー駐在員からその記事を手入れたのであることは、ほぼ間違いないが、講演の内容はまことによくまとめであり、三月の午後に何が起こったかを読者に理解させるにはこの上ない読物となっていた。

講演の紹介記事が常にその内容を十分に読者に伝えていたとは限らない。その理由は、人が話をするとき本人は第一に聴衆の耳に訴えるのであるということだ。文章を書く人は読者の目に訴えるのである。だから、ニューヨーク・タイムズがよくやる講演の全文報道が、必ずしも真実をあまり所なく伝えていたとは限らないのである。記事には、講演者が特に声を強くして話したことも、彼の身振りも、（この場合は）黒板にチョークで彼が画いたスケッチもふくまれていないのだから――。

この謎の講演者がデンバー大学で提起した問題は、根本的には次の三つである。(1)空飛ぶ円盤が実在することを科学は本当に認めたのか。(2)円盤は何で出来ているのか。(3)彼らはどこから来るのか。

講師は円盤が地球で建造されたものと考えているのかどうかは、聴衆

も知りたいところだろう。また逆に他の惑星から来るのであれば、どの星か？ 円盤には操縦者が乗っているのだろうか？ もし乗っているとすれば、その外観、背の高さ、皮膚の色、年齢、身につけている衣服、その他調査の対象になりそうな点はどうかだろう？

彼らの航空力学に関する知識がわれわれのそれよりはるかに深いものではないかということも当然問題となるだろう。

たった五十分間の講演でこれらの問題を十分に説明することは、どんな科学者にも無理な話だろう。円盤の実在を信じる組と信じていない組の二派にすでにわかれている聴衆をさらにこまかく分けるのがせいぜいといったところである。この人は知識人ですぐれた人物であり、科学者であると同時に資産家でもありそうだという一般の印象を立証するような話をしながら、途中でちよつとした情報をも洩らしてくれることもあるだろう。

それはさておき、円盤は実在する、というのが彼の話である。そのうえ、空軍はプロジェクト・ソーサーを解散したと発表しながら、実際は解散どころか、おそらく名称を変えていつそう強力に調査を続行している、とも話した。円盤のうち四機はこの地球に実際に着陸した、とも語ったのである。

この四機のうち三機は捕獲され、現在彼と共に地球物理学の研究を行なっている人々の手によって調査された、と彼はつけ加えた。三機の円盤が発見されたとき、その内部には、身長九十センチから一米ートルばかりの乗員が三十四名、死亡して横たわっていた。

地球にはじめて着陸した円盤は、この講演に先立つことわずかに二年足らず前、デンバーから五百マイルも離れていない地点に着陸したのである。

空飛ぶ円盤は地球上のどこかの地点からやって来るとはとても思えないが、さりとて、どこから来るのかという疑問はまだ解決されてはいない。金星からという線が非常に強いと彼はつけ加えたが、同時に、これは依然として大きな疑問のままであることも強調した。

円盤に使用された金属を研究した結果、地球上では未知の二種類の金属が発見されたと彼は言う。このことから彼もその同僚の科学者たちも円盤が米国やその対抗国で建造されたものではないという確信を深めたのである。

最初の宇宙船の内部からは、磁力線を測定するのではないかと思われる計器が発見された。これらの計器こそは、彼とその仲間たちが、解決のあかつきには円盤の推進力という問題はすべて解決されると信じ、今なお研究を続けている或るものへの手がかりとなるものだった。光速で飛行の可能なこのような宇宙船なら、最も接近したときでも地球から一六一、〇〇〇、〇〇〇マイルもはなれた金星でも一時間足らずで往復できると彼は言った。

サマーサイド・ジャーナル紙の記者によれば、講演者は前置きの中でも自己紹介はしなかった。彼の話はよくねれており十分に整理されたもので、その話し方も頭のにぶい学生さえ理解し、ノートを取ることができるといふくらいゆっくりとしていた。

記者が気づくほどの特に変わった訛りも言葉使いもなかった。講師は科学用語を駆使して、いかにも種々の科学に精通しているらしい話し方をした。宇宙船に関して行なった実験の話をするときには、「われわれ」という言葉をさかんに繰り返したが、特にどの実験に関係したという話もしなかった。政府は今でこそ空飛ぶ円盤などに関心はないと公式に言明しているが実際は充分関心を持っているのであって、そのことは遠か

らず明らかになるだろうと彼は語った。最初に着陸した円盤の直径は三十メートルで船室の高さは一・八メートルであった。二番機の直径は二十一メートル、三番機は十一メートルである。これらの数字は(インチ、フットにすれば)すべて九で割切れるが、このことは彼らが地球の度量法を使用したことを示しているのかもしれない。

彼の説明によると、円盤の周囲には回転する金属環があり、その中心に船室がある。静止した船室と円盤とは歯車で連結されているが、その歯車比は地球では知られていない数値だったし、潤滑装置はいっさいない。太陽系の惑星をとりまく磁力線を利用して飛行するのではなからうかと彼は考えている。

一番機の外観から見ても、この機体はいかなる方向にでも飛行できるらしいと研究者たちは推定した。ヘリコプターではないが、どこへでも着陸できる。最も小さい機体には、着陸装置として、どの方向にでも回転する金属球が三個、まるで三輪車のようについていた。

磁力線を利用して飛行するのではないかという説を受け入れるなら、これらの円盤は大気中でもほとんど無限に近い高速——すくなくとも秒速一八六、〇〇〇マイル——で航行できるし、重力や風による抵抗のない場所ならどのくらい速く飛べるか見当もつかないと彼は語る。

一番機からは、十六名の乗員の死体が発見された。その年齢は、地球ふうに計算して、若そうな乗員が三十五歳、最年長者が四十歳くらいと推定された。死体はみな黒褐色に焦っていた。

二番機からも十六名の死者が発見された。しかし彼らには明らかに焼け焦げはなく、皮膚の色はみな白人と同様だった。他の点では一番機の宇宙飛行士たちと同じで——背はやはり低かった。身長以外はわれわれと異なっただけは全くないし、ヒゲものばしてはいなかったが、ある者に

は桃の実のようなきめのこまかいふ毛が生えていた。

三番機にも乗員がいたが、やはり死亡していた。これは直径十一メートルの小型機で、乗員はわずかに二名である。着陸したときには二人ともまだ生きていた、というのは、二人は船室から脱出しようとして死んでいたからである。

乗員は死亡したが、これらの宇宙船はすべて自己の計器に頼って着陸したのであり、墜落したのではないと研究関係者は信じている。計器飛行で着陸したのかもしれないし、全行程を遠隔操縦されて飛んできたのかもしれない。しかし何らかの故障らしい点が発見されたのは一機だけだし、決して墜落はしなかった。

構造は、地球上で建造された乗物とは全くちがう。どの機体にも、ビヨウもボルトもネジも使用されていない。飛行制御盤には押ボタンがズラリとならんでいる。外皮はアルミニウムのような金属で出来ているけれども、きわめて固いもので、加熱してもビクともしなかった。

たぶん磁力線を利用して航行するのだろうが、これらの宇宙船の設計者たちは、たがいに反撥する金星（正の電荷をもつ）と地球（やはり正の電荷をもつ）の間を安全に航行するという問題を解決したものと思われる、という以外には、推進法に関する説明はなかった。

船内には武器らしいものはなかった。講師の話では、彼らは自分たちを追跡したりおびやかしたりする物体を分解させる方法を知っていたものと思われる。

講師は船内に積載されていた水と食糧についてはくわしく説明した。一機には休息・睡眠のための設備があった。壁にかこまれた造りつけの寝台で、ドアを閉じると見えなくなるし、開いたときはカーテンのかけにうまくかくれるようになっていた。

講演の終わり近く、彼は四機目の円盤の話にふれた。彼の研究グループが政府の実験場の近くで偶然見つけたものである。発見されたとき、乗員の姿は見えなかった。

科学者たちはカメラや測定器具をとりて車までもどったが、ふたたび宇宙船に近づくと、数人の小人が円盤にかけこみ、機はまるでまぼろしのように消えさってしまった。

講演者は円盤が研究のため分解された後どうなったかについては全然ふれなかったし、三機の円盤が発見された三十四体の死体の行方についても手がかりとなりそうな話はしなかった。「彼はただ『円盤は実在します』と述べただけであった」と、サマーサイド・ジャーナル紙の記者は話を結んでいる。

どこかで盗み聞きをしていたかもしれない空軍のスパイのために講師は、宇宙船は真珠湾上空を乱舞した日本機（これだつて空軍当局は実際に目撃してはいないのだ）と同じように実在するのだ、とつけ加えてもよかつたのだが、彼はそこまではしなかった。

サマーサイド・ジャーナル紙のこの講演要約記事と実際の講演全文とを比較すると、記者は大成をおさめたといわなければなるまい。講演者は言及したが記者が省略した個所もある。たとえば、磁力の父ウィリアム・ギルバート（一五四四—一六〇三）、ニューメキシコ州アラマゴルドで原子力時代の幕が開いた一九四五年七月十六日、マックス・プランクがベルリン大学の教授をしていた一九〇三年に発展させた学説などは、科学史上の画期的な事件がそうだ。しかしそれらは講演の重要部分ではない。これらの出来事を円盤の時代に結びつけることは、講師の前置きの一部だったのである。

講演者は黒板に四種の図を描いた。一つは円盤の建造に使用されたと思われる「9の組織」である。他の二つは、円盤の側面図と平面図だった。全体の直径は九九・九九フィート、船室の直径は一八フィート、外縁の上部には操縦者が周囲を見るための隙間があった。外観は、オレゴン州マクミンウィルのポール・トレントが撮影してライフの一九五〇年六月二十六日号に発表された写真によく似ていた。四番目の図は、太陽から発する磁力線がどんなふうに各惑星——特に地球と金星——を結んでいるかを示すものだった。

この講演が大変な騒ぎをひきおこしたので、チョークで描かれたこれらの解説図はラッカーをかけて保存されることになった。ラッカーが除去されていないなら、今でも残っているはずである。

記者は、宇宙船には見たところドアも出入口もなかったということも書き忘れている。しかし、丸窓はたしかにあった。一個は破損していて鉛筆ほどの大きさの穴があいていた。この穴からガスか空気がが激しい勢いで噴出したため、内部の十六人は黒褐色に焼け焦げてしまったのであろう。

乗員たちは身長こそメートルくらいしかなかったが、決して一寸法師ではなかった。このことは講演者が原稿の中でも私の家での雑談の中でも特に強調した点である。彼らの歯に虫歯はなかったし、充填物も見られなかった。一種の制服を着ていたが、衿にも帽子にも記章のようなものはついていなかった。

計器のなかには、科学者たちが時計だろうと判断したものが二、三個あった。この計器が一回転するには二十九日を要した。このことが、円盤の推進法と磁力との間に何か関係がありそうだと推定する最初の手がかりとなった。というわけは、磁気日は二十三時間五十八分であり、磁

気月は二十九日であるからである。

もう一つ、記者が書き落としたことがある。これは重要な問題だった。トーマス・F・マンテル大尉に何が起こったのかという説明である。この事件は色々あれこれと議論の種になってきたが、マンテル大尉とその愛機にいったい何が起こったのか、納得できそうな説明をした人はだれもいなかったのである。

一九四八年一月七日、ケンタッキー州フォート・ノックスのゴッドマン空軍基地の上空に正体不明の物体が出現して、軍・市民の両方に目撃者があったという点では、すべての報告が一致している。ゴッドマン基地の管制塔では、付近を飛行中の州航空隊のF51四機にこの物体の調査を命じた。そのうちの三機がまず接近して、金属製で途方もない大きさだと報告してきた。操縦士の一人は「涙のしずくのように丸くて液体のようだ」と語った。

マンテル大尉はゴッドマン管制塔に、物体は彼の機の半分くらいの速度で前上方を飛行していると報告してきた。「もっとよく見えるように接近中」と彼は送信した。「前方を本機の半分の速度で飛行している。金属製らしくてすごい大きさだ。本機と同じ速度で上昇を開始。時速三百六十マイル……二万フィートまで上昇しても接近できないようなら、追跡をあきらめます」

マンテル大尉がゴッドマン管制塔と交信したのはこれが最後だった。一九四八年一月七日午後三時十五分のことである。

マンテル機の姿が編隊から消えて五分後、残った二機はゴッドマン飛行場にもどってきた。その一機は燃料を補給して酸素を積み込むとふたたび付近百マイル四方を飛びまわり、三万フィートまで上昇したが、何も発見できなかった。

その日もおそくなってマンテルの遺体は、フォート・ノックス近くで愛機の残骸の中から発見された。

これが空軍当局の公式見解である。その発表によれば、マンテル大尉は高度二万フットでたぶん酸素不足のため失神したものであり、彼が追跡して死をまねいた正体不明の物体は、金星であった、というのだ。

「しかしながら」とその発表は続く。「その後の調査によると、金星と当該物体の高度と方位が時間的に一致しないことが明らかになった」

実際のところこの物体は今だに『正体不明』と考えられているし、知りうる限りでは現在まで空軍から解決したという発表はない。

だが、デンバー大学の講演者はこの問題に多くの人が満足するような解決を与えたのである。彼はまず、彼のグループのメンバーは一九四二年以来政府の研究に従事していることを説明して、聴衆を納得させた。すくなくとも一、七〇〇名の科学者が極秘の計画に関係している。彼らはこの五年間共同研究を続け、磁気に関しては全世界が過去数百年間に知りえたよりもっと多くのことを発表したのである。

彼らが到達した結論は、万物が現在の外形をもつようになったのは磁力線のためであるというのだ。一平方センチあたり一、二五七本の磁力線が存在する、と彼は語った。地球のある地域には磁力の極端に弱い地点がある。ハッテラス岬の周囲では潮が永遠に引き続けているのと同じように、ここでは噴出が起こっているのである。オレゴン州とニューメキシコ州の周辺ではこのような磁気の欠除した地域があることがわかっている。

もし円盤がこれらの磁力波にそって飛行し、われわれと同様（いやわれわれよりはるかに）磁気を制御する方法を心得ているとすれば、そのような変動のある地域に彼らが関心を示すということは当然ありう

るだろう。原爆実験もかなり磁力波を乱したにちがいないし、それが彼らの計器に探知されないはずはないのである。

彼らがホワイト・サンズ実験場などの上空にしばしば姿をあらわすのは、たぶんそのためだろう。そして、ワイオミング州、コロラド州、アリゾナ州、ニューメキシコ州、それにテキサス州などでは空気がどこよりも澄んでいるので、地上から目撃される機会も多いわけである。

彼によれば、訓練された目撃者さえ自分の眼を疑うあの魔法のような離れわざは決して魔法でも何でもないのである。飛行中の宇宙船がやつのけたといわれるいろいろなこと、たとえば分裂したとか、しばらくの間空中に停止していたとかいうことは、実験室でも再現できる。マンテル機は、エンジンから翼端まで磁力により外形を保っているのだ。いや、マンテル大尉自身の肉体からしてそうなのである。だから、円盤がマンテル機を空中分解させるにはただ機体の磁気を消去してしまうだけで事足りた、と講師は説明した。

二本の磁力線が自然に交叉することはない。しいて、または思いがけなく交叉させられれば、分解と発火が起こる。そのような磁気の乱れを人工的に作りだすことができれば、地上の生物を一瞬のうちに消滅させることも可能である。

これが、マンテル機に何が起こったのかについての専門家の説明である。磁気を制御して飛行している円盤にとって、追跡してくる大尉は障害の種となりそうだった。ボタンをひと押しし、それでマンテルと愛機は存在を停止したのである。

その他講師が指摘したことで特に興味深いのは、円盤に積まっていた水は地上の飲料水のほとんど二倍の重量があったということである。これは二個の小さな容器に納められていたが、原爆製造第一号となるため

ナチがあれほどノールウェーから欲しがっていた重水とよく似たものだ
 った。

明らかに食糧と思われる小さいウエハースのようなものがあつたが、
 強く圧縮されていて、一ガロンの水でもどすとあふれるほどふくれあが
 った。飼料としてモルモットに与えたところ、丸々と肥ってよく育つた
 という。

外部から調べたところでは、船室はきわめてよく密封されており、前
 述の丸窓の穴がなかったら、科学者たちが船内に入るには何カ月もかか
 ったことだろう。しかし、内部から見ると壁にはよく見えるノブがあつ
 て、そのノブの上にはもう一つ小さいノブがあつて、この小さいノ
 ブを押すとパツクリとドアが開いた。だが、いったんドアがしまると、
 外部からは全く見分けがつかなかった。

船内で発見された二種類の物質が何であるかは今のところまだわから
 ない。非常に強くて軽いが、一万度まで加熱しても熔けなかった。大人
 が十二人その上に乗っても曲がらない。円盤は二人がかりなら一方の端
 を持ち上げることができた。そのくらい軽いのである。

宇宙船の歯車を破壊するため百五十種以上の実験を試みたが不成功に
 終わった。この歯車はきわめて固いうえに、ギア比もわれわれが使つて
 いるスエーデン法とはちがう。三対五でなくて三対六であり、潤滑、熱
 による膨脹、遊び、摩滅などに対する余裕の空隙がない。講師の言葉に
 よると、ある円盤は、三万五千ドル相当のダイヤモンド・ドリルを使用
 したにもかかわらず、内部に入ろうとする努力を頑として受け付けよう
 としなかった。

七十二フィートのほうの宇宙船には寝室はおろか化粧室までつしてい
 たが、三番目の円盤にはそのどちらもなかった。後者には小人が二人、

押しボタンばかりで操作される制御盤の前の折りたたみシートにすわつ
 ていたらしい。発見されたとき一人は船室から体を半分のみだし、他の
 一人はすわったまま頭をガツクリとたれていて、二人とも死んでいた。

三個の着陸装置をそなえていたのはこの小型機である。移動には車輪
 でなく、鋼鉄製のように見える球を使用する。全部の球が同じ方向に回
 転していれば、何人かかっても円盤をかたむけることはできない。しか
 し、鋼鉄球が静止しているときは、子供でも機をかたむけることができ
 る。このことから研究者たちは、磁力の法則が何らかの関係ありとい
 う確信を深めた。講演者の推測では、この複座機はおそらく新型で、彼
 らの故郷からの往復飛行をした経験に基づいて建造されたものであり、
 寝室も化粧室もついでないのは地上の自動車同様、必要がなかったか
 らであろうという。

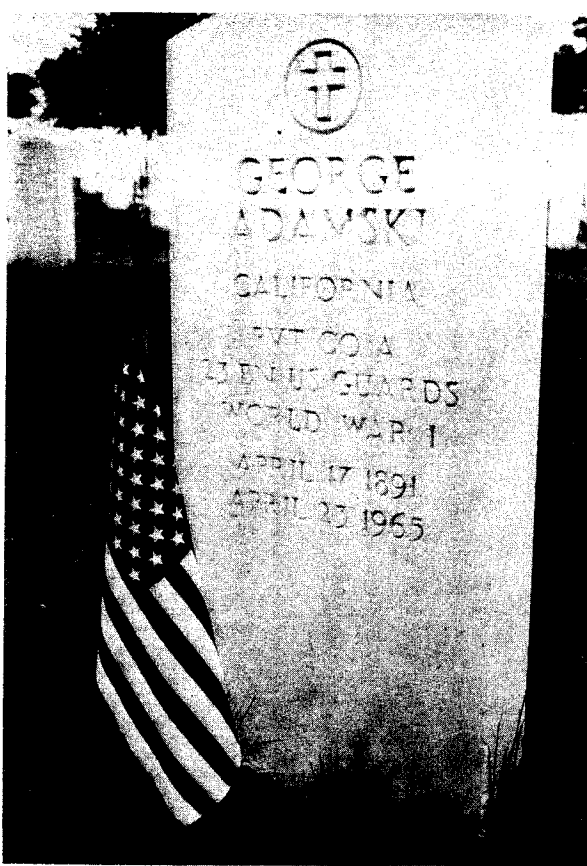
なるほど一時間で金星・地球間を往復できる円盤に、寝袋は必要ない
 にちがいない。

彼らの上衣にボタンを縫いつけた糸も調査されたが、この糸を切断す
 るには四百五十ポンドの重量を要した、と講師は語った。

以上が講演者の話である。ジー博士自身による物語はあとで紹介す
 る。しかし、私にも話したいことがあるし、私のあとは空軍にも登場し
 てもらふことにする。公聴会が開かれるのは空軍の法廷だからである。

(以上は増野一郎訳)





宮内温夫氏

お姉さんと二人でアーリントンへ墓参!

アダムスキーの墓を訪れる

日本GAP幹部で在ニューヨークの宮内温夫氏(31歳)は去る6月26日にお姉さんの啓子さんと共にワシントン市のアダムスキーの墓を訪れた。以下は同氏が同日付で編者宛に送られた報告。なお同氏はニューヨークの名門商業美術センターであるブッシュビンのスタジオで、世界一流のグラフィック・デザイナー、ミルトン・グレーサー氏の唯一人の日本人アシスタントとして各種の有名雑誌や教科書などのイラストを担当し、また英国の国際版画展その他の美術展にも入選するという国際的な活躍を続けているイラストレーター。お姉さんはニューヨークのエド・ガーデンのマネージャーで、姉弟ともアダムスキー哲学の熱心な実践家である。

それは実に気持のよい初夏の光のやわらかな日でした。ニューヨークのペン・ステーションからメトロラインで3時間、国会議事堂を横に見て、まっすぐタクシーでアーリントン墓地へ。ワシントン記念碑、リンカーン記念館などを見ながら、桜で有名なポトマック川を越えれば、そこはアーリントン墓地。戦没者記念日とあってアーリントン墓地はそれこそ全国からの墓参者でいっぱいでした。私達はアダムスキーのお墓がわかるかどうかちょっと心配でした。

その心配は無用。「私達はジョージ・アダムスキーの墓参にきました」と係の人に言うや否や、5秒とたたぬ内にコンピューターで43-295というアダムスキーの墓石ナンバーがはじき出され、姉と私は宙を飛ぶ思いで示された地図のとおりその方向へ——。アダムスキーのお墓は向かって右方のやや奥まった静かな美しい丘陵の一角にありました。163,000以上もあるまったく同じ形の驚くほど平凡な、しかし美しい白い大理石の墓石の一つにくっきりと「George Adamski」の名をみつけた時は、待望のアダムスキー氏自身に会えたかのような感激がこみあげてきました。もう夢中で姉と二人で写真の撮りっこをして、姉が心をこめて作ってくれたオニギリをアダムスキーの墓の前で開きました。

ここは私達のために小さなリンゴの木が涼しい木陰をつくってくれていました。もとより今回のワシントン行きはア氏の墓参だけが目的だったため、帰りの列車までゆっくり時間があつたので、お弁当のあとは姉に「宇宙哲学」の「リンゴの木の寓話」を読んでもらいながら、リンゴの木の下で昼寝! 本当にこれ以上はない気持ちでした。姉と「本当に来てよかったね」と何度も話し合いました。そして決意を新たにしたのでした。



●宮内温夫氏とお姉さん

真の教育とは何か

ジッドウー・クリシユナムライター

未来を夢見る若き人々のために

真の自由を得るためのアドバイス

あなたがたは今までになぜ自分が教育を受け、なぜ歴史や数学や地理やその他の教課を学ぶのか考えたことがありますか？ あなたがたはなぜ学校や大学へ行くのか考えたことがありますか？ あなたがたが情報や知識をつめ込まれる理由を考えるのは大して重要なことではないのでしょうか？

いったい、いわゆる教育というのは何なのでしょう？ たぶんあなたがたの両親は自分たちが試験にパスし、いろいろな資格を取得したがゆえにあなたがたを学校へと送り込むのです。あなたがたは自分自身に対してなぜ自分が学校にいるのかを問うてみたことがありますか？ あるいは先生たちがあなたがたに、なぜあなたがたが学校に来るのかを尋ねたことがありますか？ 先生たちはなぜ自分たちがここにいてのか知っているのでしょうか？ あなたがたは、勉強をしなくてはならないとか、試験にパスするべきだとか、家から離れてある場所で生活しなくてはならないとか、こわがってはいけないとか、ゲームをうまく行なわねばならないとか、その他もろもろのあがきがあったい何であるか考えるべきではないのでしょうか？ 先生はあなたがたがこれらすべてを調べるのを援助したり、あなたがたが試験にパスするよう準備してやるべきではないのでしょうか？ 少年たちは大きくなったら仕事につかねばならないとか、生活のかてを得なくてはならないことを知っているがゆえに試験

にパスするのです。それならば少女たちはなぜ試験にパスするのでしょうか？ 良き夫を得るために教育を受けるのでしょうか？ 笑わないでこれらの事柄を真剣に考えてごらん下さい。あなたがたの両親はあなたがたが家にいると迷惑なので遠く離れた学校へあなたがたを入れるのでしょうか？ あなたがたは試験にパスすることで人生の意義全体を理解しようというのでしょうか？ ある人々は試験にパスするのがとても上手ですが、だからといってそれは必ずしも彼らが知性的であるということではありません。試験にパスする方法を知らない他の人々の方がずっと知的性なのかもしれません。彼らの方がずっと有能であり、ただ試験にパスするために詰め込み式な勉強をしている人よりもっと深く物事を考えるかもしれないのです。

多くの少年たちは、単に仕事を得るために勉強しており、それが彼らの人生における究極的な目的となっています。しかし仕事を得了後、何が起るのでしょうか？ 結婚して、子供をもうけて、そして残りの人生を機械につかまって生活するだけではありませんか？ そうでしょう？ 彼らは事務員や、弁護士や、警察官になって、妻や子供たちと果てしなく争うのです。彼らの人生は死ぬまで争いが絶えないのです。それではあなたがた少女の場合はどうなのでしょう？ あなたがたは結婚し——これはあなたがたの両親にとつての関心事でもあり、あなたがたの目的でもあるわけですが——それから子供を生みます。もし多少のお

金があれば、あなたがたは自分の着る物に関心を寄せ、また自分の容貌を気にし、夫との言い争いを心配し、他人の噂話を気にします。あなたがたはこのような事を理解していますか？ また家庭の中や近所にそのとがどのように展開していくか気づいていますか？ あなたがたはこのこととは何なのか、なぜ自分たちは教育を受けたいのか、あなたがたの両親がなぜ自分の子供たちに教育を受けさせようとするかが、また、この世界において教育は何をなし得るかにしてなぜ彼らが苦心しながらもあなたがたに話すのか気づく必要がないのでしょうか？ あなたがたは恐らくバーナード・ショーの劇を読めるかもしれないし、シエークスピアやウォルテールや他の幾人かの哲学者たちの言葉を引用できるかもしれませんが。しかし、もしあなたがたが自分自身を理解していなければ、あるいはあなたがたが創造的でなければ、教育のポイントとは何になるのでしょうか？

そこで生徒同様先生が知性的になる方法を考えようとするのは重要ではないのでしょうか？ 教育は単に読めたり、試験にパスしたりすることだけから形成されているわけではありません。そんなことは頭のいい人なら誰にでもできることなのです。教育は知性的なことを身につけるということから成り立っているのです。そうでしょうか？ 知性的ということはずるがしこくなったり、他人をやっつけるために知性的なふりをすることを意味するものではありません。知性というのは明らかに何かちがったものなのです。あなたがたが恐れないときに知性は存在します。それなら恐れたときは？ 恐怖というのは、他人が自分のことをどう言っているのだろうと考えた時や、あなたがたの両親が、批判を恐れてはだめだとか、罰せられることを恐れてはだめだとか、試験にパスできないこ

とを恐れてはだめだとか言うときに起こってくるものです。先生があなたがたを叱るときとか、あなたがクラスや学校や、仲間うちで人気のないときに恐怖はじわじわと襲ってくるのです。

恐怖はあきらかに知性にとって障害になります。そうでしょうか？ 教育の根本は、あなたや私が子供のときから恐怖から解放された状態で生活できるように、恐怖に気づき、それを理解することを手助けすることです。あなたがたは自分が恐怖することを知っていますか？ あなたがたはまちがいに恐怖します。そうでしょうか？ それとも恐怖から解放されていますか？ あなたがたは両親を、先生を、あるいは他人が考えていることを恐れませんか？ たとえばあなたがたの両親やあるいは社会が認めないことをあなたがたが行なったとしたら？ あなたは恐れませんか？ 仮にあなたがたが自分の社会的地位とか階級とかにふさわしくない人と結婚したいと願っていたとした場合、あなたがたは他人が何と言おうと恐れませんか？ もしあなたがたの夫となる人が充分な金もうけができなかったり、地位や特権を手に入れることができなくても、あなたがたは恥ずかしくはありませんか？ あなたがたの友人があなたがたのことを良く思っていないことを恐れませんか？ またあなたがたは病氣や死を恐れませんか？

人間のほとんどが恐怖しています。「そんなことはない」などと言わないで下さい。われわれは恐怖について考えたこともないのかもしれない。しかし仮にわれわれが恐怖について考えなくても、この世界の大部分の人々は—子供同様大人も—必を悩ますある種の恐怖を抱いているのです。個人が知性的になれるように個人を恐怖から解放する手助けをするのが教育の役目ではないのでしょうか？ われわれが学校へ行く目的はそこにあり、従って先生自身も真に恐怖から解放されていないければ

ならないのです。もし先生たちが、周囲の人々の言っていることや、妻や夫のことを恐れているなら、彼らの言う恐怖心のないということは何を意味しているのでしょうか？ 恐怖心を抱いていけば、その人の言葉の創造的感覚のなかに積極性が存在するはずがありません。この感覚の中に積極性を持つということは、創造力に富んだことを行なうということです。つまり物事を自発的に、自然に行なうということであり、指示されたり、強制されたり、統制されたりすることなく物事を行なうということなのです。あなたがたがやりたいと思つたことをやることです。あなたがたはよく道路のまん中に落ちてゐる石を見たことがあるでしょう？ そして車はその上をドンと音をたてて通ります。あなたがたは一度でもその石を移動させたことがありますか？ 外をあるいているとき、貧しい人々やお百姓や村人たちを見て、何か親切なことを自発的に、自然に心の底から、何をすべきかわれる前に行なつたことがありますか？ 知つての通り、もしあなたが恐怖するなら、これらのことは皆さんの生活から閉め出されます。つまりあなたがたは無感覚になつて、身のまわりを起こつてゐることを観察しようとはしなくなります。もし恐怖すれば慣習にしばられ、ある種の指導者や教師に従ふことになります。慣習にしばられれば、また夫や妻を恐れれば、あなたがたは独立した一人の人間としての威厳を失ふことになります。ところで、確かに必要とはいへ、単に試験にパスするための準備をするためばかりではなく、恐怖からの解放が教育の根本ではないでしょうか？ 基本的かつ根本的にもこのことは教育やすべての教師にとつて大きな目的であるべきです。皆さんが社会へ巣立つていくとき真の積極性にあふれ、知性ある人間となれるように子供のころから完全に恐怖から解放されるよう手助けするのが教育の目的なのです。あなたがたが単にまねるだけでは積極性は崩壊し

ます。また慣習にしばられ、政治的指導者や宗教的偶像に従ふと積極性は崩壊してしまいます。誰かに服従するということは確かに知性にとつて有害です。服従する過程で恐怖心を生み出すからです。恐怖は、異常な複雑化、かつとう、悲しみ、貧しき、富や美などで人生の理解をシャットアウトしてしまいます。あなたがたが恐れるとき、これらすべてに對し無感覚になるのです。

あなたがたが先生に對し、私が何について話してきたかを説明してくれるよう頼んでごらん下さい。あなたはそうしますか？ 先生がこのことを理解しているなら、自身で見出しなさい。そうすればあなたがたもつと知的になり、恐れなくなれるように先生がしてくれるでしょう。この種のことに關してわれわれはすぐれた知的な教師を必要とするのです。正しい意味における知的であり、M・AやB・Aの試験にパスする意味での知的であるという意味ではありません。

もし興味があれば、皆さんが一日のうちでこれらすべてのことについて先生と話し合える時間をもてるかどうか考えてごらん下さい。なぜなら、あなたがたは成長して行き、夫や妻や子供たちを持つとしていきます。として人生のすべてについて、たとえば生活のためのお金を得なければならぬというあがき、人生の悲哀、人生の狂気じみた美しさなどについて知る必要が起るでしょう。このことは皆さんが知らねばならず、また理解しなくてはならないすべてのことなのです。そして学校とつてはこれらの事柄について学ぶ場所なのです。もし先生が単に数学や、地理や、歴史や、科学を教えるだけならば、それだけでは確かに不十分なのです。あなたがたにとつて重要なことは、あなたがた自身の積極性が目覚めるように変わることであり、疑問を起こして試みることであり、発見して試みることなのです。

恐怖と盲従が最大の敵

われわれは恐怖についての問題を考えてきましたし、われわれのほとんどが恐怖することを見してきました。つる植物が木に密着するように、恐怖はわれわれを人々や物事に執着させようとするために、積極性の障害となるのです。われわれは、両親や、夫や、息子や、娘や、妻や、われわれの所有物に執着します。これは恐怖の外面的形式なのです。内面的に恐れれば、孤独になることを非常に恐れます。われわれはたくさんの着物や、宝石や、他の所有物を持っていますが、内面的に、あるいは精神的にはとても貧しいのです。われわれが内面的に貧しくなればなる程、われわれは、人々や、地位や、所有物に固執することによって、外面的に富もうとするのです。

われわれが恐怖するとき、外面的な物事に固執するばかりでなく、慣習のような内面的なものにも固執するようになりがちです。多くの古い人々にとって、また内面的に不十分で空っぽな人々にとって慣習は大きな関心事なのです。あなたがたはこれらのことを友人たちや、両親や教師の間で気づいたことはありませんか？ またあなたがた自身の中でこのようなことに気づいたことはありませんか？ 恐怖や内面的な恐れが存在する瞬間、皆さんは体面を気にしながら慣習に従うことによって、それをカバーしようとしています。その結果、あなたがたは積極性を失うことになりがちです。なぜなら、あなたがたは何の積極性も持たず、ただ盲従的になるからです。そこで慣習——一般に人々が慣習といっているもの——過去

から安易に受け入れられてきた慣習、生き生きとしたところのない慣習、無意味に繰り返されてきたため人生に何の熱意もないといった慣習——は非常に重要なものになります。

恐れるとき、常に模倣しようとする傾向が起ってきます。それに気づいたことがありますか？ 恐れる人々は他人を模倣します。

彼らは慣習や、両親や、妻や、兄弟や、夫に固執します。そして模倣は積極性を崩壊させます。知つての通り、あなたがたが木や花や夕日を描くとき、木をまねしたり、写真のように全く同じように複製したりはしません。大切なことは、自由に木や、花や、夕日を描くことであり、それがもたらす意義とか、意味を感じとらねばなりません。自分の見たものを単にまねるだけでなく、その意義を伝えることが重要です。そうすれば自分でその創造的過程に気づき始めます。このためには、自由な心、つまり、慣習や模倣にとらわれない心を持たねばなりません。しかしあなたがたの生活をこらんなさい。何と慣習的で、何と模倣的でしょう。

着ているものや、読む本や、話す言葉にもあらわれているように、ある分野では模倣せざるを得なくなりました。これらはみな模倣の型なのです。しかしこのレベルを越える必要があります。自分自射が他人の言うことを無分別に受け入れられないように、物事を自由に考える必要があります。この際、他人というのは別に「誰々」ということの問題ではなく、学校の先生、両親、あるいは偉大な宗教的指導者の一人であつてもいいのです。自分自身をよく考え、盲従しないことこそが重要です。というのは盲従は恐怖のあらわれだからです。そうではありませんか？ 他人があるあなたがたの欲しているもの——楽園、天国あるいは良い仕事など——を提供しようとする瞬間、（もしこのチャンスのをがせば二度と）それを得ら

れないのではないかと、恐れが出て、そのためそれを受け入れ、盲従し始めるのです。自分が何かを欲する限り、恐怖に束縛され、恐怖は自由になれないように心を片わにしています。

あなたがたは自由な心とは何か知っていますか？ 自分の心を観察したことがありますか？ それは自由ではありませんね？ あなたがたはいつも、友人たちが自分について話していることを知ろうと警戒しています。あなたがたの心は、まるで罫や鉄条網でかこまれた家のようなものです。そのような状態では創造的なことは起こりません。創造的なことは恐怖のないときにこそ起こってくるからです。確かに心を恐怖から解放することは極端に困難なことです。それは、模倣したり、盲従したり、何かやりたいと望むことから真に自由になることであり、富を集めたり、慣習にとらわれたりすることではなく、欲望から自由になることを意味するからです。しかしこのことは、皆さんが法外なことをしでかすことを意味するわけではありません。

心の自由は、恐怖がないとき、心が何かをみせびらかしたいという欲望を持たないとき、また、地位や特権を得ようと企てないときにやって来ます。そのときは模倣のセンスがありません。心の慣習形成メカニズムである習慣に対し、真に自由な心を持つことが大切なのです。

このようなことは非常に困難なことでしょうか？ 私は、あなたがたがいま勉強している地理や数学ほどむずかしいとは思いません。実際はもっと簡単なことなのです。あなたがたがそれについて一度も真剣に考えたことがないだけです。あなたがたは単に情報としての知識を得るために、学校で十年ないし十五年を過ごしますが、自由な心について一週間、いや一日さえも十分に考える時間を見つけないでしまいません。だからすべてをむつかしいように思えるのであって、その実は決して困難な

ことではありません。逆に、もしあなたがそれに時間をかけるなら、あなた自身の心がどのように働き、作用し、反応するかを知ることができます。

あなたがたが若いうちから自分自身の心を理解し始めることはとても大切なことです。さもないとほとんど意味のない慣習に従って成長することになり、かつ模倣することになり、恐怖をかり立て続けることになり、結局自由にはなれないのです。

ここインドで、いかにあなたがたが慣習にしばられているか気づいたことがありますか？ あなたがたはある慣習に従って結婚せねばならず、まず両親が夫や妻となる人を選びます。あなたがたは何の意味もない宗教的儀式を、望むと望まざるとにかかわらず行なわねばなりません。指導者たちに従わねばなりません。あなたがたが自分の身の廻りのことについてよく観察してみれば、いかに權威的なものが確立された中で生活しているかがわかるでしょう。そこには精神的指導者の權威があり、政治グループの權威があり、両親の權威、そして人々の見解の權威があります。文明が老朽化すればする程、一連の模倣を主体にした慣習の重みが増します。そしてこの重みに圧せられれば、あなたがたの心は自由にはなれません。あなたがたは政治的あるいはその他の自由について話すかもしませんが、個人としてのあなたがたは自分の実体を見出すのに真に自由であるとはいえません。あなたがたは常に理想を追い、指導者や先生に従い、あるいはつまらない迷信にとらわれているのです。

したがって、あなたがたの生活全体は束縛され、制限され、思想も限られてしまうのです。自分自身を深く掘り下げてごらんさない。恐怖があります。恐怖があるとすれば、いかにしてあなたがたは物事を自由に考えられますか？ だから、これらすべてのことに気づくことは重要な

のです。もしヘビを見てそれが毒を持っていることを知っていれば、近づかないで遠くへ離れるでしょう。しかしあなたがたは積極性を邪魔する一連の模倣にとらわれていることを知りません。知らず知らずそれにとらわれてしまっているからです。もし自分が他人の言うことを恐れ、両親や先生を恐れているがゆえに、模倣したいと考えている事実に基づけば、これらの模倣を探り出し、それらを分析し、数学や他の課目を勉強するのと同様にそれを学ぶことができます。

たとえば、なぜ女性を男性とちがったふうに取り扱うのか気づいたことがありますか？ なぜ女性を軽々しく扱うのでしょうか？ 少なくとも男性はしばしばそうします。なぜあなたがたは寺へ行くのでしょうか？ なぜあなたがたは宗教的儀式を行なうのでしょうか？ なぜあなたがたは精神的指導者に従うのでしょうか？

ご存知のように、あなたがたはまっ先にこれやすべてのことに気づかねばなりません。それからそれらの中にはいつて質問し、学ぶのです。しかしもしあなたがたがすべてを盲目的に受け入れるなら、何の意味もなさなくなります。そうでしょう？ 確かにこの世の中でわれわれが必要としているものは「ものまね師」でも、指導者でも、盲従者でもありません。今われわれが必要としているのは、心が自由に創造し、考え、愛することができるよう、これらすべての問題を、表面的や気まぐれに調べるのではなく、もつともつと深く追求し始めているあなたがたや私のような個人なのです。

教育とは、物事や、他の人類や、大自然とわれわれとの真のつながりなどを探り出す方法なのです。しかし心は理想をつくり出し、その理想があまりにも強く、あまりにも支配的になるので、われわれが広く考えようとするのをさまたげます。恐怖がある限り慣習への服従があり、恐

怖がある限り模倣があります。単に模倣するだけの心は機械と同じです。そうでしょう？ そのような心は創造的ではなく、物事を深く考えようとはしません。たぶんそれはある行動を起こし、ある結果を生み出すかもしれないませんが、創造的ではないのです。

さて、われわれのなすべきことは、教師や経営者や権威者同様、あなたがたや私が、物事を自分自身で充分考えることができ、ある慣習的愚かさに頼らない人間になるように、これらの問題の中に一緒にはいって行くことです。そうすればあなたがたは真に自由人としての威厳を持つことになります。これが教育の全目的なのです。あなたがたが恐れることなく自由に考えられるよう勇気づける教育や、あなたがたが疑問を持つたり、理解したりするのに役立つような教育を主張すべきなのです。

あなたがたはそれを先生に要求すべきです。さもないと人生はムダになります。そうでしょう？ あなたがたは教育を受け、B・Aや M・Aの試験にパスし、あまり好きではないがお金を得るためにやむなく仕事につきます。あなたがたは結婚し、子供をつくり、残りの人生を送ります。それをみじめで、不幸で、わずらわしく思っています。こんなことを教育の目的と思いませんか？ 確かに、教育はあなたがたが鋭く知性的になるよう援助するので、自分のやりたいことをやり、自分の人生をみじめなものにするつまらない物事にとらわれません。だから、自分の若いうちに内部に燃えている不満の炎に気づくべきなのです。つまりあなたがたは改革の状態にあるべきなのです。したがって、両親や先生に、あなたがたを正しく教育するよう主張しなさい。ただ教室にすわっていただけとか、この王様とかあの戦争とかいうつまらない情報に満足してはなりません。不満でいて、先生のところへ行き、質問し、発見しなさい。もし先生たちが知的でなければ、質問することによって、先生たち

が知的になれるよう手助けできるはずです。あなたがたが学校を去るとき、成熟して真の自由を理解できます。そうすればあなたは死ぬまで人生を通じて正しいことを学び続けることになります。そしてあなたがたは幸福になり、知性的な人間になるでしょう。

問 「恐怖を起こさない習慣を身につけるにはどうしたらいいでしょう？」

答 まずあなたが使った言葉に注意してごらん下さい。「習慣」というのは、同じことを何度も何度も繰り返す行為を意味します。もしあなたが或ることを何度も何度も行なうなら、それは単調さ以外の何物でもありません。恐怖を起こさないというのは習慣でしょうか？確かに、恐怖のないということは、あなたが人生において事件に出くわし、それを克服したとき、それを知るとき、そして調べてみるときにのみ現われてくるものです。しかし習慣にとらわれた、疲れ切った心では決してありません。

もしあなたが物事を習慣的に行なうなら、もしあなたが習慣的に生きるなら、あなたは単なる模倣機械と同じです。習慣とは繰り返してあり、考えもなしに同じことを何度も行なうことです。それはあなた自身の回りに壁を築く過程と同じなのです。もしあなたが同じ習慣を通じて自分自身のまわりに壁を築くなら、あなたは恐怖から解放されません。それがあなたを恐れさせる壁の中の生活なのです。あなたが、人生において起こるすべてのことを観察する知性をお待ちなら、それは、すべての問題、出来事、思考、感情、反応を調べることを意味し、そのときにのみ、恐怖から解放されるのです。

自分の心で権威を創り出している

私は恐怖の問題とそれを取り除く方法とについて話してきました。いかに恐怖が心を自由や創造的なものから遠ざけてきたか、そしてそれゆえにわれわれが非常に重要な積極性を持っていないことを認識してきました。私は同時に権威の問題をも考慮すべきであると思います。あなたがたは権威とは何かを知っているでしょうか、それなら権威がどのような受け継がれてきたか知っていますか？ 政府は権威を持っていますね？ 一口に権威といっても、州の権威、法律の権威、警官の権威、そして兵隊の権威といろいろあります。皆さんの両親や学校の先生は皆さんに対してある権威を持っています。彼らは自分たちが考えている通りのことをあなたがたに押しつけようとします。たとえば、「きまった時間に寝なくてはだめですよ」とか、「ちゃんとした食物を食べなさい」とか、「素性のわからないような人と会ってはいけませんよ」などと言います。彼らは何かにつけて口うるさく説教しますね？ なぜでしょう？ 彼らはあなたがたのためを思ってこそうるさく説教するのだと言います。そうでしょうか？ われわれはこの問題から取り組むことにしましょう。その前にまず、強圧政治の権威、強制的権威、一人の人間のもう一人の人間に対する権威、少数者の多数者に対する権威、多数者の少数者に対する権威、このような一連の権威がどのようにして起こってきたのかを理解しなければなりません。

誰かが他人をあたかもゴミでも扱うかのように扱う権利とはどんなものでしょう？ 権威の形成をどう考えますか？

第一番目として、確かにわれわれは危険をおかさずに行動したいと望んでいます。混乱し、心配し、かつ何をしたいのかわからないため、神父や、教師や、両親やまたは自分の混乱を取り除いてくれそうな人のところへ行くのです。彼らの方が自分よりもより多くのことを知っていると思うからこそ、師や教養ある人のところへ出かけて行き、自分は何をすべきなのかを尋ねるのです。われわれの内部には、特別な生活方法や、権威を生みだすような方法をみつけたという欲望があるのです。そうではありませんか？ たとえば、私が師のところへ行くとします。私なぜ彼のところへ行くのかというと、彼は真理や神を理解している偉大な人間であり、したがって彼に教えを乞うとても安楽になると思うからです。私は自分が真理や神について何も知らないのだから、彼のところへ行くのです。ところで私はひれ伏し、花を捧げ、そして献身を約束するのです。私には楽になりたいとか、何をすべきなのか教えてもらいたいという欲望があるために、権威を生み出しているのです。権威は私の内部に存在するものなのです。

あなたが若いうちに、あなたがたの知らないことを教師が指摘するかもしれません。しかし、いやしくも彼が知性的な人間なら、あなたがたもまた知性的な人間になるよう指導するはずで、彼はあなたがたが権威を求めたりしないように、あなたがたの混乱を自分で理解するよう指導するはずで、

国家の権威、法の権威、警察の権威といった外面的な権威が存在します。われわれは守らなければならない所有物を持っているが故に、この種の権威を外面的に作り上げてしまいます。自分の所有物はあくまでも自分のものであり、他人がそれを持つことをきらいます。そこでわれわれは自分の所有物を保護してくれる政府を作り上げました。政府はわれ

われの権威となり、それはいわばわれわれ自身や生活や思想を守ってくれる発明品のようなものなのです。何世紀もかかってわれわれは徐々に、われわれ自身とその所有物を保護してくれる法律や権威、すなわち、国家、政府、警察、軍隊といったものを確立してきたのです。

次には、理想の権威という内面的なものがあります。たとえば、われわれが「自分は善良であらねばならない。自分はねたんだりしてはならない。自分は誰にでも親しみを感じなくてはならない。」と言う場合など、われわれは理想の権威を心の中につくり出していることとなります。

次には、理想の権威という内面的なものがあります。たとえば、われわれが「自分は善良であらねばならない。自分はねたんだりしてはならない。自分は誰にでも親しみを感じなくてはならない。」と言う場合など、われわれは理想の権威を心の中につくり出していることとなります。そうでしょうか？ 仮に私が陰謀好きであったり、愚鈍で残忍だとしたら、自分の欲求を満たさうと欲しがったり、権力を手に入れたいと願うでしょう。実際に私がそうであることは事実です。しかし私は親密な人間であらねばならないと思います。信仰心の厚い人々がそうあるべきだと言うし、そうすることが便利でもあるし、また、そう言う方が得でもあるからです。したがって私は理想として同胞愛を創り出すのです。私は親密な温い人間ではないけれども、いろいろな理由からそうありたいと願っているし、だからこそ理想が私の権威になるのです。

さて、その理想に従って生きるためには、自分に対して厳格にならざるを得ません。私はあなたがたが私のコートより良いコートを持っているし、すてきな服や、沢山の資格を持っているがゆえに、とても皆さんをねたましく思います。したがって私はこう言います。「自分はねたみを感じてはならない。自分は温い人間であるべきだ」。理想は私の権威と

なり、その理想に従って私は生きることとなります。だからどうだというのでしょうか？ 私の生活は常に現在の自分と、こうあるべきだと言う自分との間に巻き込まれることとなります。私は自分に対して厳格ですし、同時に国家も私に対して厳格です。私が共産主義者であろうと、資本主義者であろうと、社会主義者であろうと、国家は国家として、私の行動に対する考えを持っていて諷です。国家は最も重要なものなのだという人々がいます。もし私がそのような国家の中で生活し、おおよしのイデオロギーに反する行為を行なえば、私は国家によって抑圧されます。国家によって抑圧されるということは、国家をコントロールしている少数者によって抑圧されるということになります。

われわれは二つの面を持っています。すなわち意識する部分と無意識的な部分です。これがどんな意味なのか知っていますか？ 仮に皆さんが道路を歩いていたり、友人と話をしたりしているとしましょう。皆さんの表面の心は会話に夢中になっていますが、意識されないもうひとつの部分は、木々や葉や、鳥や、水面に映った太陽の光など数え切れない程の印象を受けているのです。外部からの無意識的衝動は、皆さんの表面の心が他の事に占有されていても常に続いているのです。そして無意識的衝動が吸収することは、意識的なものが吸収することよりはるかに重要なのです。表面の心は比較的わずかなことしか吸収しません。たとえば、あなたがたは学校で学んだことを意識的に吸収しますが、実際問題として多くはありません。しかし無意識的な心は、自分や先生との間の反応、自分や友人との間の反応を継続的に吸収し続けます。これらすべては意識されずに続いているのです。このことは単に表面的に吸収される事柄よりはるかに重要な問題です。同様に、毎朝交わされる会話の間無意識的な心は継続的に何が話されているかを吸収し、あとになって

一日や一週の間には自分が突然それを思い出すのです。このことは、自分が意識的に聞いたことよりはるかに重要な影響を自分に及ぼします。話をともにもどしましょう。われわれは国家の権威とか、警察の権力とか、理想の権威とか、伝統の権威とかを創り出します。あなたが何かをしたくても、父親が「そんなことはするな」と言います。

そんな場合、自分が言う通りにしなければ父親は腹を立てるでしょうし、また衣食住を父親に依存している手前、彼に従わねばなりません。父親はあなたがたの恐怖心を利用してコントロールしているのです。そうですね？ だから彼はあなたがたにとって権威となるのです。同様に、あなたがたは、これはしてもいいとかあれはしてはいけないとか、服はきちんと着なければならぬとか、男の子やあるいは女の子を見てはいけないとか言う慣習にも束縛されています。慣習はあなたがたの行動を規定します。結局慣習は知識なのです。そうですね？ あなたがたの行動を規定する本があり、国家が存在し、両親がおり、社会や宗教が存在します。とすればあなたがたに何が起るでしょう？ あなたがたは圧搾され、粉砕されてしまいます。あなたがたはすべての物事に恐怖心を抱いているため、考えたり、行動したり、生き生きと生活することは決してできません。あなたがたはこう言うでしょう。「私たちはすべてに従わねばならないのよ。でなければどうしようもないわ」この言葉の中に皆さんはすでに権威を創り出しているのです。というのはあなたがたはいつもあたりさわりのない行動や生活を探し求めているからです。単にあたりさわりのない物事だけを追い求めていけば、権威を生み出すだけです。あなたがたが単に奴隷のように生活したり、機械の一部品のような生活をしたり、考えず、創造的にならずに生活したりするのはそこに理由があるのです。(以下次号)



真我を知るために

ジョージ・アダムスキー 財団理事長

アリス・ウエルズ



昔の哲学者のなかには次のように教えた人があります。つまり、人間は目覚めているときは愛憎や偏愛などの分裂感情に満ちた夢を追求して生きており、理想を失って暴力行為にかりたてられているということです。

これは現代の人間世界をあらわしているのでしょうか。だれしも「そうだ」と答えるでしょう。テレビやラジオなどは人間の意見を伝えていますが、同胞愛の要素は見あたりません。その結果は混乱でしょう。たぶんそうかもしれません。しかし迷いのモヤをすかして、被創造物全体の生命表現による「一体化」を見ようという個人の欲求から出てくる一糸の希望は残されています。特に人間界という一大家

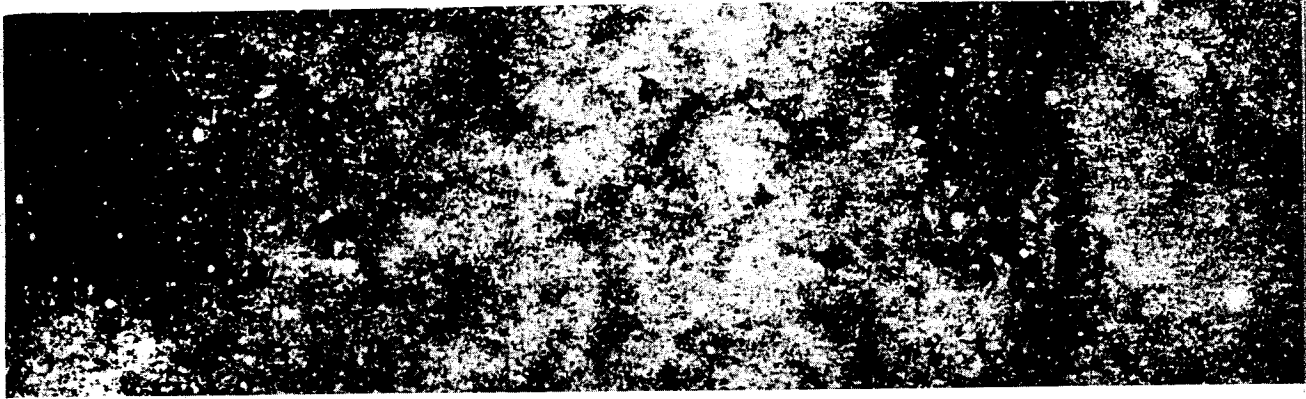
族を導くようとするれば

自分愛するようには他人を愛せよ。こんなことは不可能だと普通の人は言うかも知れません。生命に対するこのような態度が何を意味するかを考えてみましょう。「平和」「健康」「幸福」「豊かさ」そんなものはユートピアと言う人があるかも知れません。しかし自身の考えてもつてやってみる価値はありません。なぜなら人間は「活動する想念」であり、「人間は自分が考えたとおりの者になる」からです。そこでひとつ「楽しい想念」という回転木馬に乗ってみようではありませんか。たぶん何回もぐるぐる回って、どこで止まるかはわかりませんが、とにかく気軽にどっぴり乗って楽しんでみることにしましょう。そして恐怖や不安から解放されると、進んだ考え方に對して受容的になってきます。

こうした想念傾向を保ちながらジョージ・アダムスキーの生活態度や教訓をのぞいて見ることにしましょう。プラザーズはアダムスキーに「現代のような諸状況はいずれ起ってくる。人間の想念傾向と行為により、そうなることがわかる」と語っています。この予言は耳を傾けた人たちに与えられ、無数の人々が永遠の「真我」を知ろうとして熱心に研究しました。そして万人の内にひそむ神を認めようとしたのです。この研究により理解と英知が与えられました。アダムスキーは非常に多くの生まれ変わりを経て学習・指導・奉仕を続けた人ですから、別な惑星から来たプラザーズは彼を通じて容易に活動ができたのです。そしてむかしイエスが愛の法則を教え、いろいろな救世主が大衆の必要とする宇宙の法

則の一面を伝えたように、ジョージ・アダムスキーも法則研究の常識的なハタインを私たちに伝えました。これをまじめに応用すれば「真我」という未知の領域に入れるのです。また未開発の能力も出てきます。「真我」を深く理解していた彼は、それによって、宇宙の法則について彼に尋ねた人々の必要とする事柄を教えることができました。人間の普通的心をもつては必ずしも彼の知識や知恵の深さを理解できませんでした。これは自己欺瞞という暗い土牢の中で個人的意見によって宇宙の法則を審いている人々にとつては今でも理解できないことです。強い言い方もしませんが、ほんとうなのです。これはなにも英雄崇拜を意味するものではありませんし、アダムスキーを他の人々の上位に置くものでもありません。私が三十年以上も彼のために働いたあいだに観察した事実なのです。ある人々の主張は私の心を淋しくさせます。その人々は真理と財産とを交換したがっているらしい。しかし、いつかは彼らも自己流の価値判断の愚かさ気づいて、もつと価値のある奉仕の道を進むようになるでしょう。

私はたびたび次のような質問を受けてきました。「アダムスキー氏の地上での仕事は成就しなかったのに、なぜプラザーズは彼の死を防がなかったのか」と。私の答は次のとおりです。「高度な知識の伝達のための道具である彼の仕事は成就した。彼の著書『テレバシー』、生命の科学』などにこのレッスンを私たちは記録した。まじめな研究者が研究し、理解し、生きるには、これで充分である」と。



聖書 ノストラダムス アダムスキー

スペース・プログラムの成就

埴 公明



●埴氏製作のペンダント



私は「大予言(ノストラダムス)」を読んでみて、読む者によつては、恐怖それ自身の目で読めば大予言は恐怖であろうと思ひました。そこで私が感じた事を述べてみます。(私の解釈は誤りであるかも知れませんが)

一九九九の年、七月の月

空から恐怖の大王が降ってくるだろう
アンゴルモワ大王を復活させるために

その前後の期間、マルスは幸福の名のもとに支配するだろう

〈以下その解釈〉

一九九九年の七月おそれ多い(センスマインドを持った地球人にとつては頭が上がらない)偉大な大王が降りて来るだろう。アンゴルモワの大王の復活(それは聖書にあるイエス・キリストの再来)が成就される為に、そしてマルス(軍神)は宇宙の神に変えられ、スペースプラザーズによって統治されるだろう。

逃げよ、逃げよ、すべてのジュネーブから逃げだせ

黄金のサチユルヌは鉄に変わるだろう

巨大な光の反対のものがすべてを絶滅する

その前に大いなる空は前兆を示すだろうけれども

〈以下その解釈〉

世界の資本主義のメッカ(ア氏の言うサイレンス・グループの本部)であるジュネーブ(チューリッヒ

を含めて世界中の金融市場へ、すなわち世界の財産という財産は意味がなくなろう。だから財産を捨てて宇宙意識の中へ帰りなさい。金銀財宝の価値はただの鉄という物質それだけの姿に変わるだろう。巨大な恐ろしい核爆発の光は、天空から来る大天使たちによる大自然の宇宙の法則を利用した科学力によって、地球上で開発された兵器など、悪のもろもろと共に絶滅する。その前に大いなる空には大円盤群が大挙飛来するだろうけれども。

魂のない肉体はもう犠牲にされることはない

死の日は本来の自然のなかにとけこみ

み心は幸福な魂をつくるだろう

み言葉は永遠のものとして仰ぎみながら

〈以下その解釈〉

宇宙の意識と一体化できなかった哀れなセンスマインドを持った人間はいなくなり、無残な死体となるような事はない。そして死すなわち生まれるという宇宙の生命の法則のなかに生きるだろう。宇宙の意識と心は一体となるだろう。それは万物の魂である永遠の宇宙の神を仰ぎみながら。

約四百年前のこの大予言は、スペース・プログラムの一部分ではないだろうか？そして、それが成就されようとする半世紀前、アダムスキー氏があの限りない無限の栄光を現わしたブラザーズとコンタクトしたという事を考えると、GAPの目的は深遠

な意味と責任を持つていっているのではなからうかと考えてみたくなる。江戸時代の鎖国がペリーの黒船によって開国した時、多くの先駆者の働きがあった事は想像できると思う。それはGAPが混乱の地球（一九九九年人類の滅亡いわゆるセンスマインドの滅亡）において、ささやかな奉仕でも良いが、人々の心の支えとなるかも知れない。そういう事は今、GAP会員が想念観察をする事によって、まず自分自身を宇宙意識と一体になる事を心がける事を意味する。もちろん他への奉仕の為ばかりでなく、その人自身の為になる事はいうまでもない。以上は心のおこりだろうか。むしろ私は大いなるスペース・プログラムの一部に加わり、大衆への奉仕ができるならば大きな歓喜である。そしていかに不動の信念と、強固な意志力と、すさまじい忍耐力による想念観察が大切であるか。まず自分自身を！

空飛ぶ円盤

この言葉の響にはなんと多くの驚くべき真実が隠されているのだろうか！

まさに、この地球の姿を映し出す万華鏡である。

私たちがこの意味ある時代に生かされたとはなんとすばらしいのだろうか！

その時はまもないではないか。

そして GAP (Get acquainted program) とは

GAP (Get acquainted space program)



●筆者片氏は大阪工大出身の電子工学関係の技術者。かねてから内省訓練を続けて、すさまじい忍耐力により、克明な集計をグラフで表わされた。技術者らしく、努力の跡がきわめて科学的に記録されている。

私の想念観察記録

片 京

私の想念観察の一年間の集計を御目にかけます。

今からの人たちに少しでも役立てばと存じ、恥を發表したいと考えました。

内容は表だけではちよつと不明な点がありますので、注釈を加えますと、「嫌悪感」と「イライラ」

「性感」「傲慢」の四種に分類してありますが、嫌悪感孤独・逃避・ジェラシー・利己心・虚栄・慢

心・憎悪・不満・非難等を総括したものです。ただし性感については途中で考えがあり、中止しました。

最初は大阪大会で先生に質問しましたように、どのようなチェックが最良か不明でしたので、迷った

あげく、四種に分類してチェックを行なつたわけです。左右両端の数字は回数をあらわし、上部の数字

は年月日を入れました。一ミリを一日として表にしてありますが、これを更に十日ぐらゐの合計であら

わせばもつとはつきりしたかもしれませんが。別に特別の意識をしたわけではないのですが、順々と減少

する様子がわかつて面白いと思います。なおこれには宇宙意識のチェックがありません。その分類がわ

からないので、とにかくエゴだけでも征伐してやれというのが本音でした。

今年七月からはあらためて宇宙意識のチェックがやつとできるようになりましたので、また一年間の結果は来年お知らせできると存じます。後進の人々の参考になればと存じます。

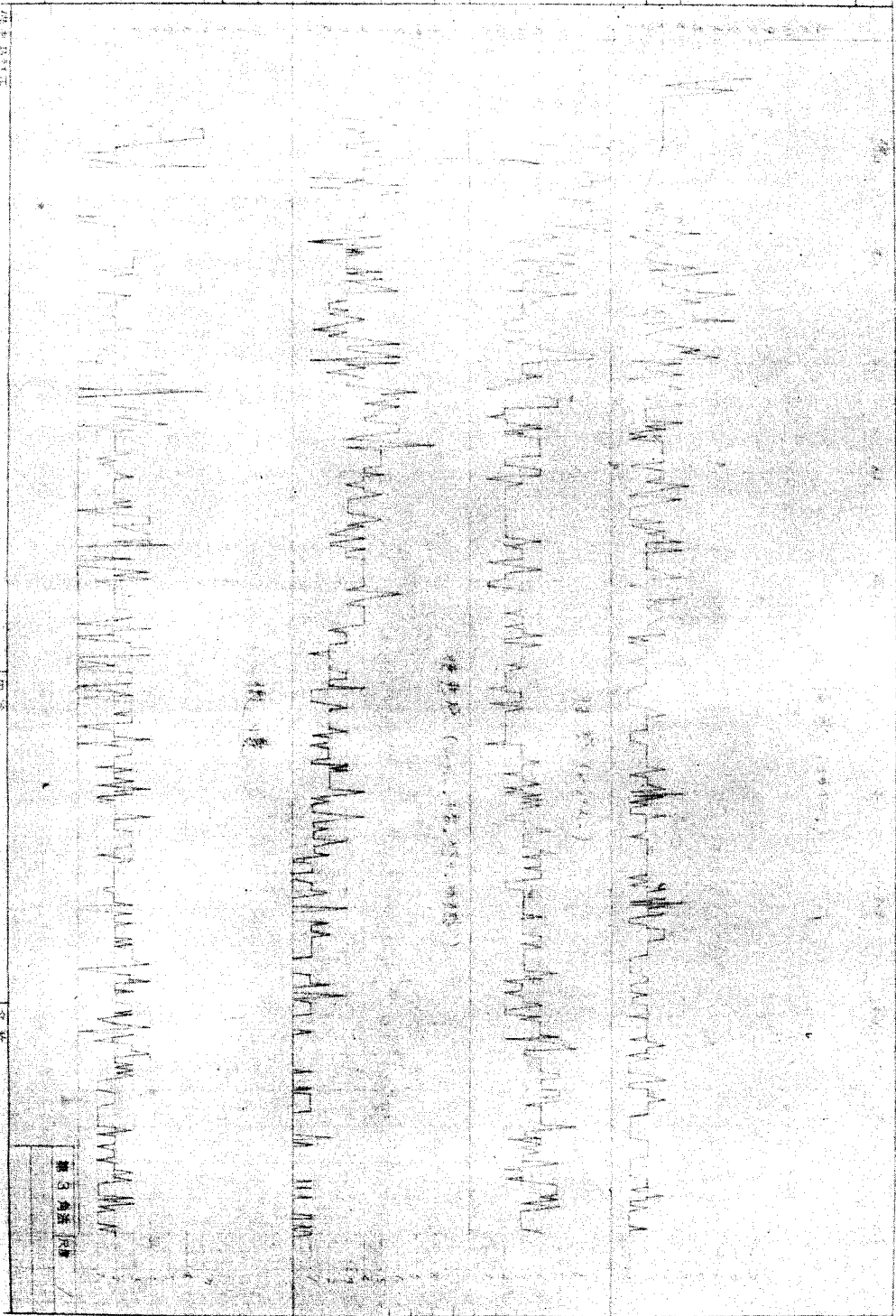
私共も四、五人で小さい会合を開いていますが、GAPの会員のなかには情報だけの方も相当おおいので、個人的な訓練を望む方は少ないようです。しかしその少ない人々と共に進む必要を感じていきます。またもう一つの疑問はGAPの先輩の方がどうして後進の人たちのアドバイザーとして顔を見せてくれないのか不思議です。想念観察をし、宇宙との一体化もできて「チャクラ」と呼ばれるスパーク現象を体験された方も多々おおいのことと想像していただきますの……。そのような方に御指導を受けたいと考えるのは私だけのエゴでしょうか。この一年間の観察で暗闇を手探りで進む感じの想念観察を考えると、単なる情報（それでも一般マスコミよりずっと良いのですが）だけではこの迷いは解決できません。現在実行中の方、これから実行される方などは非常に難儀なことと思います。やり方でなしに、やる心の持ち方のほうがよほど重要です。それをどのようにしたらと、迷う人が大半ではないでしょうか。

私のこの表はそのような人々に少しは役立つと考えます。今ではくせとなり、なんらいとわしいことではないのです。それと、自分の心を別な位置から眺めるくせをつけることが非常に重要です。

片氏の想念観察表

左右両端の数字は件数

上端の数字は年月日、
方眼の 1mm は 1 日分をあらわす。



焦燥感

性感

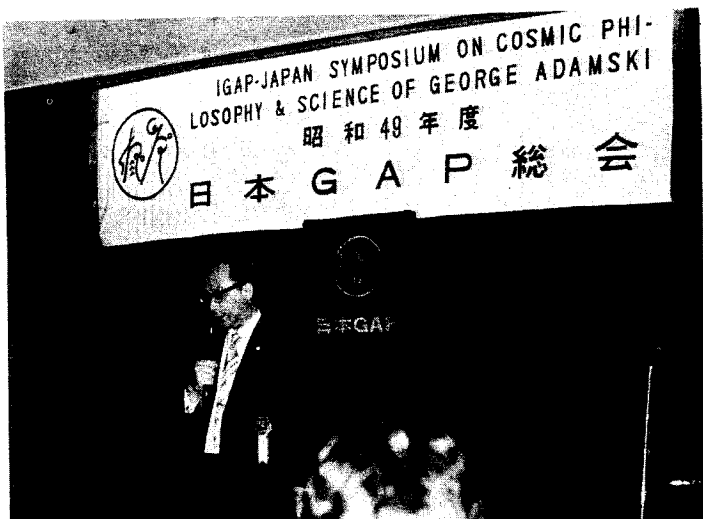
嫌悪感

傲慢

UFO研究とは人間研究

久保田八郎

本稿は本年度日本GAP総会における講演要旨に加筆したものである。



十数年前に私はアダムスキーと親友であった米国のある会社の社長、アグニュー・パンスン氏と京都で会ったことがあります。当時、ア氏がしきりとけなされるために意気消沈していた私は、このときパンスン氏が重大な情報を洩らしてくれたため、非常な勇気を与えられ、欣喜雀躍して、以後活動が続けることになるのですが、この会見時のことを回想しますと、妙な光景が浮かんできます。その日はヨーロッパからある王女が来日して京都の町には外人記者が群らがついていましたが、パンスン

氏と話し合った席に（スエヒロの階上）一人の外人が同席していました。バ氏が紹介してくれたので、その人が海外の特派員だということがわかりましたが、あとでバ氏に聞くと、実際には知人でも何でもなく、どうやらバ氏につきまとはって来た得体の知れぬ人物らしく、そのことが脳裏に残っていましたけれども、後年バ氏が自家用機で飛行中に墜死したという報告をア氏から受けとったとき、妙な気分になったことを記憶しています。とにかくアダムスキーが生前米政府と重要な関係を持っていたことは間違いありません。山師どころか世界平和のために大変な役割を演じた人物だと私は信じています。バ氏が亡くなられたのは残念でしたが、この人もアダムスキーを心から尊敬して、その活動を援助していました。ただア氏のスペース・プログラム協力活動にはあまりにも秘密が多すぎたために、むしろ誤解を受けやすかったと言えるでしょう。コンタクティイとして活動中の人は、世界中に相当数いると思われるので（ただし表面には出ないでしょう）、スペース・プログラムの壮大な計画活動を想像すれば、ア氏問題の真偽にこだわることはなく、もっと高次元でUFO問題を考える必要があります。なぜなら世界中にUFOが出現し続けているからです。

近来UFO問題が一般に広まって研究熱が上昇したのはよいのですが、一方ではUFOに関するデタラメな書物や情報が氾濫するにつれて、この問題がひどく混乱し、何が真実なのかウソなのか、見境のつかないような状態になっています。アダムスキー問題にしても昔からインチキ説、ゴーストライターによるすり替え説、空軍の仕掛けたワナ説等が各種の書物や記事にまことしやかに書かれてきて、ア氏撮影の円盤写真は電気掃除機を写したものだという説がかなり流布しています。別な世界へ行

ってしまったアダムスキーはさぞや微苦笑していることでしょう。

しかしUFO専門誌として世界一流を誇る英国の「フライング・ソーサー・レビュー」誌が今年二月に出した特別号によれば、そのなかに同誌幹部のゴードン・クレイトン氏が「ジョージ・アダムスキーはまだに影を投げかけている」と題して、昨年十月に、ペルーでア氏の撮影した金星円盤とまったく同型の円盤をウーゴ・ルヨ・ベガという技師が目撃撮影したという事実を詳細に述べており、その円盤のスケッチが掲載されています。しかも同誌のディレクターだったウエイヴニー・ガーバー氏（故人）がアダムスキーの写真類を認めていたという秘話まで紹介しています。この記事の全訳は「コズモ」第9号（今年十一月二十日発売予定）に掲載されるはずですから、ご一読をおすすめします。

アダムスキーは円盤研究界でまったく相手にされていない、と得意になつて吹聴する人がありますが、UFO問題をあまりよく知らないその吹聴者よりも、はるかに知的で国際的に知られているUFO研究家のゴードン・クレイトン氏が、ア氏の問題をとり上げて深い示唆を与えていることは何を意味するか？ 大抵おわかりでしょう。まったく相手にされていないどころか、現在も英国のネビル・スピアマン社から「空飛ぶ円盤同乗記」の立派な装幀の英文版が世界中に発売されており、多数の人に読まれているのです。大体に円盤研究に足を入れる人は一種の入門書としてア氏の体験記類に必ず目を通すといわれており、これによって多くのUFO研究者がどれほど啓発されたかしれません。この書に対する信・不信は読後にきまるとしても、UFO研究の古典的名著として一読の価値があるといつて過言ではないのです。

しかしア氏の著書類に述べられている情報は、出版以来かなりの年月が経過しているにもかかわらず一般に広く知られるようにはなりません

でした。この理由は、あまりにも時代を先走りすぎたからである、と私はみています。大体に地球人はテレパシクな洞察力（物事の真相を見抜く力）を持たないために、具体的な証拠物件がなければ容易に信じようとはしません。写真技術が高度に発達した現在、驚異的な写真を見て一般人はもはや写真ぐらいでは驚かなくなっています。トリックを用いてかなりの写真が出来ることをだれもが知っているからです。しかしトリックを用いないで撮影された本物の円盤写真も存在するにちがありません。そうでなければ戦後から三十年間も円盤問題が研究対象となり、世界中で数千点のUFO関係図書が刊行され、数百の研究グループが誕生して調査研究を続けるわけがありません。

ア氏の円盤写真が電気掃除機を写したものでないことは、他の類似の円盤写真が世界各地で撮影されていることから、まず間違いないものと私は確信しています。今後もおそらくこの種のアダムスキー型円盤写真は撮影されることでしょう。しかし本物の円盤写真が撮影され続けるにつれて人々の目も馴れてしまい、新鮮な感動も失われて、いわゆるUFO写真なるものは人々の好奇心の対象として影が薄くなるでしょう。その傾向は私が出している「コズモ」誌の読者の反応で知ることができま

す。結局、単なる好奇心だけでは何をやってもだめなのです。こうみてくると、どんなにすばらしい写真もいつかは人々の関心からはずれてしまい、無視されるようになります。したがって「写真」という単なる物的証拠を超えた高次元の実体を求めなければ、いつか挫折する

ときがきます。円盤には飽きたと言つてやめる人が何と多いことか！ なぜ円盤が来るのか？ これはア氏によれば別な惑星の偉大な人類が地球人を目覚めさせて、みずからの手で地球を平和な楽園にするようにひそかに指導と援助の手を差しているということになっています。

大体にUFOが敵対行動をとらないで出現している状況を見れば、これは間違いないと思われます。たまに地球人をおびやかすようなUFOもあるようですが、この場合はおそらく別な太陽系から来るものと考えられます。

友好的な異星人が救援に来ているとすれば、なぜ公然と姿を現わさないのか？　ここが問題です。これについては私もずいぶん考えましたが、つまるところは地球人の精神の発達度に重要な関係があると思われるのです。一般地球人のマインド（心）の底には長く続いてきた習慣的想念の影響により、恐怖が深く根ざしていることを忘れてはなりません。まったく恐怖心を持たないで、純粹そのもののような宇宙的なマインドを持つほどに高い発達をとげた地球人はこの世界にはほとんどいないでしょう。失職の恐怖、病気の恐怖、死の恐怖等の束縛から脱しきれないのが地球人です。このような精神の状態にある人々が未知の物体を眼前で見ただけで、わき起こるのは好奇心よりも恐怖心なのであって、大挙して円盤が着陸しようものなら、たちまち大混乱が発生し、収拾のつかない状態になるでしょう。カール・サガン博士が言っているように、「円盤人」が賢明で思いやり深い「人間」であるとすれば、理解力の乏しい地球人の前に公然と出現しないのは当然です。着陸した円盤を大歓迎するのはGAP会員ぐらいのものでしょう。

私は多年UFO研究を行なっているうちに、この問題が人間の精神や心理作用に大きな関連があることに気づいて、結局、円盤研究とは人間研究にほかならぬことを悟るに至りました。特に人間の好奇心、意志力、信念といったものをイヤというほど考えさせられたのです。たとえば、「これは内緒ですよ」と言っただけの情報を洩らした場合、九九パーセントまでは確実に外部へ広がります。それほどに地球人のセンスマインド

は信義を保つ力がなく、弱く、変化しやすく、甘っちょろくて、人間のマインドのみに信用はおけないのです。この程度の世界に高度な精神的発達をとげた偉大な人類が公然と足を踏み入れれば、どのような事態が生じるかは明白です。やはり社会の裏面でひそかな援助活動しかできないのでしょう。

円盤飛来の目的として考えられる第二の有力な説に、大変動警告説があります。つまり地球上に遠からず有史以来の物理的大変化が発生すると思われるので、そのことを警告し、ある意味では救援するためにUFOが来ているという考え方です。大変動といっても種々の意味にとれますが、この場合は地球自体が木端微塵こはへみじんになるのではなく（そういうことはあり得ないと私は考えています）、大陸の沈下、隆起などを意味する程度で、いわば地球の「大掃除」です。しかしこれも該当地域の住民にとっては大変なことで、彼らにとっては一種のカタストロフィーと言えるでしょう。こうした天変地異の発生地域によくUFOが出没するといわれており、事前に出現するのは住民に対する警告を意味しているのではないかと、というわけです。

そうだとすると、昨年来、日本各地に急激にUFOが出現し、多数の目撃報告が出始めた現象は一体何を意味するのでしょうか。私が出している「コズモ」誌宛に創刊以来全国から送られてきたUFO目撃報告はすでにぼう大な数に達していますが、このところどうも北海道と静岡県方面での出現が多く、地域によってはほとんど毎夜のように出現するという例もあるようです。私の知る限りでは昨年からは日本が世界屈指の（UFO出現センター）となっており、かつてのブラジルを負かすほどに出現回数が急増しています。これは一体どういうことなのか？　日本という国に何かが起ころうとしているのか？　遠からず大異変が発生すると

いのか？　そういえばノストラダムスの本がよく売れたり、日本沈没の小説や映画が大ヒットしていますし、ケーシーの予言が重視されてきたりする。――南関東大地震の発生説もささやかれる。人々の心にそれとなく世の終末の子感めいたものが起こり始めているのではないか。何か大変な事が発生するのかもしれない。ノストラも言っている。ケーシーも予言している。だいいち二千年昔にイエスがすでに大変動の発生を予言しているではないか――等々、人々のあいだで噂が乱れとび、GAP会員間でも種々の憶測が行なわれているようで、一種不安な空気が生じているようです。そうした予言類は一応別問題として、UFOの出現と大異変とを結びつけてよいかどうか。これは問題です。

私が気になるのは、アダムスキーの「同乗記」の最後の第十四章で、この地球の傾きこそ、私たちが絶えず行なっている観測の目的です……」「激烈な傾きが地球に大変な災わざなをもたらしことは間違いないでしょうね？」「必ず起こります」(高文社版一九七頁)とある部分です。ここに実はUFO飛来の目的がズバリ述べてあるのであって、このことを言いたいためにこの書物が書かれたのではないかと思うのです。それなら、われわれはどういう心構えで生きるべきか、ということになります。そのことは前記の部分の前後でオーソン氏が述べた言葉の中に含まれていますから熟読されるとよいでしょう。

ところが、こうした物理的大異変発生にかこつけて、かねてから一部のグループは宇宙人による救援説をとなえていました。「大変動による人類の終滅に近い。目覚めた者は宇宙人が大母船で救出してくれる。それ待とう」という意味のことを言っているのだそうですが、これはまさにデマ中のデマと言ってよいでしょう。このような説にまどわされると、かえって恐怖を植えつけられることになり、自分の運命をゆがめること

にもなりかねません。モーゼがイスラエルの大部隊をひきいてエジプトを脱出したときも、上空に「火の柱」が出現したというような個所があるところから、ブラザーズの大母船がしばしば空中に出現してモーゼを指導したらしい形跡はありますが、イスラエルの大部隊を母船に乗せて一挙に運んだ記録はありません。その他地上のいかなる大災害においても宇宙船で大多数の人を救出した史実はなく、これからみても、かに近い将来大変動が起こるとしても、「目覚めた」特定の人だけを母船に乗せて他を見殺しにするようなことをブラザーズがするはずはありません。どのような大災害でもその地域の住民はそれ相應の被害を受けています。これはカルマの清算という法則に従わせるためにあえて救出しないのだと考えられます。地球人のほとんどはかなり苛酷なカルマを背負っていて、地球上に住む限り、このカルマを放り出すわけにはゆきません。モーゼ時代のイスラエル人もこの現代人もこの点では同様です。

カルマの法則と清算

人間の運命はすべて自分自身で作ってゆくのであり、自分のカルマの結果は自分で清算しなければならぬ、というのは宇宙の法則です。このことは新約で「自分がまいたタネは自分で刈り取らねばならない」と表現してあります。良き行為に対しては良き報あやいがあり、悪あしき行為に対しては悪しき報いがある、というこの簡単な、しかも絶対的法則を人間はなんとなく心得ていながらも、自省してみると案外に日常では無視していることがわかります。なぜなら私たちは日常の想念のなかで他人

に対する憎悪・軽べつ・怒りなどの分裂感情をよく起こしがちですが、これが実は悪しきカルマを作るためのタネになっているということも少しでも知っていたら、到底そのような感情を起こすわけにはゆかないにもかかわらず、やはり平然と無意識に分裂感情を発生させているからです。このような分裂感情はすべてそのまま内奥のソウルマインドに自動的に吸収され蓄積されます。ソウルマインドは公平ですから、良き想念でも悪しき感情でも吸収しますが、ソウル（宇宙的な魂・真自我）は本人を常に良き方向へ成長するように仕向けて、そのような衝動をセンスマインドに与えます。そこで蓄積されてウミのようにたまっている非宇宙的な分裂感情を押し出してソウルマインドを浄化するために、カルマの清算が始まります。つまり他人を苦しめた人は逆に他人から苦しめられることにより内省の機運が生じるのであって、この内省作用が発生するときにウミが押し出されるのです。したがって内省心のない、他人に対する攻撃で終始している人は、いつか必ず自分がドえらい目に会って、反省させられるときがきます。これは法則上必ずそうなるのであって、他人を傷つけっぱなしで無事にすむことは絶対にありません。今生で報いがなければ、次の生涯中であるでしょう。かつてGAPの熱心なメンバーでA氏の哲学を心から信奉し、想念観察なども真剣に実行して一時は聖者のように見えた人が、つまらぬ事で急激に心を変えて俗世界に帰ってゆき、以後は求道精神のカケラも持たなくなり、次元の低い人物に変化してしまつて、これがかつてのあの人かと、こちらが呆然となるような実例がときおりありますが、これなどは本人のソウルがカルマの清算の方向へ向かわせた例です。すなわち、ある悪しきカルマをかかえている場合、それを清算しないうちに宇宙の法則を探求しても無意味であるということにソウルが気づいた場合は、急速に本人を正道にもどすわ

けです。これをたとえれば、間違つた式をたてて計算を続けていっても正しい解答が出てきませんから、元の式が誤っていることに気づいたら逆もどりしてそれを訂正することが必要となつてきますが、それと同様なのです。

こうなるとカルマの法則ほど重要なものはありませんが、一般人はこの法則にまったく気づくことなく、ただゆきあたりばつたりの想念を起こし、自由気ままな感情のもとに生きながら、無意識に悪しきカルマを形成してゆきます。どうも精神の面においてもニュートンの作用・反作用の法則が働いているらしく、他人を憎悪や軽べつの目で見れば、必ず自分が逆にそのような目で見られるのです。カルマとは何か？ これは原因と結果の法則を意味しているにすぎません。この単純きわまりない法則はだれしもよく心得ているはずのものを、精神面ではまったく無視して、感情の起伏のままに、言い替えれば感情の変化に支配されながら生きていくのが地球人の習慣であり、その自縛状態のためにいつまでもウダツのあがらぬ精神の状態を保ち、悪しき運命を作つては清算するという悪循環をくり返してゆきます。それなら悪しきカルマの清算を絶対に行われることはできないか、というと、そうでもありません、のがれる道がただ一つあります。それは「慈悲」に徹することであつて、これにより未清算のカルマは消滅します。しかしこのためには大決心を要します。まがいものの「慈悲」ではだめなのです。

想念観察は

魂の財産を持つ手段の第一歩

こうなると絶えず自己の想念を観察して、分裂的破壊的な想念を極力排除し、宇宙的な高次な想念を保つように努力することが根本的に重要となってきます。それは良きカルマ、良き運命を形成するための必須条件なのであって、これをやらないうちに自分を宇宙的な人間に仕立て上げ、良き運命の道を歩ませるようにすることは不可能です。想念観察を実行すれば気違いになるという反論を耳にすることがありますが、私はそのような解釈こそ狂気じみているとしか思えません。絶えず自分の内面を見つめて自省することが誤った方法ならば、他にどのようなすぐれた方法があるというのか？ 想念観察は人間を狂人にすると言う人がどれほどのすばらしい境地に達しているというのか、と思つてその人を見ると、ただの普通人と異なりません。

要するに人間には段階があつて、あるレベルに達した人が自分の開発した修養法をとなくても別なレベルの人には無意味にしか思はず、その場合、まことしやかな反論を出してその無価値を説くのにすぎないのであつて、こういう説にまどわされずと、結局どういう方法をとればよいかわからなくなり、迷つてしまつて自分をダメにしますから、想念観察にせよ何にせよ、ある方法が自分の向上に最適であると思つたら、とにかくそれを実行してみることです。

私たちは地球という低周波の振動のもとに機能を果たしている惑星上に住み、分裂想念に満ちた巨大な想念帯の海の中に住んでいる小魚みたいなものですから、よほどしつかりしていないと自分の主体性を確立できません。生き馬の目を抜くような東京で事業をやっていると、特にこのことを痛感します。人々が求めているのは金であり、これ以外の何物でもありません。「金！ 金！」と叫びながら人々はドタ靴を鳴らして右往左往しています。宇宙の創造主の法則に従つて奉仕的に生きようとす

る殊勝な人はほとんどいないでしょう。こうした「低次想念海」のなかについて自分自身を宇宙的な人間にすることはたしかに困難であり、ちょっと油断をすると、たちまち一般のセンスマインドの大波に押し流されてしまい、創造主もへちまもあるものか、という非宇宙の人間になり果ててしまいます。これを防ぐには何といつてもまず自分の想念の傾向を綿密に調べ、低次な習慣想念を排除しつつ、宇宙的な高次な想念を保つように努力する必要があります。具体的には、想念観察手帳を所持して、絶えず宇宙的想念と非宇宙的想念とに分類し、克明に記録して内省の資料にします。そのために日本GAPはかつて「想念観察手帳」を製作して会員に頒布していましたが、今春頃に品切れ絶版になり、資金不足で再版不可能な状態にありますが、これは手頃なノートを買い求めて自作しても充分間に合いますから、実行されることをおすすめします。

この想念観察の段階がある程度進歩しますと、手帳に記録しなくとも絶えず想念をチェックする良き習慣が身につくようになります。更に進歩すると、積極的に宇宙の創造主の生命力を感じしようという意欲や衝動が間断なく内部からわき起こるようになり、他から来る低想念に同調しなくなつてきます。しかし日常生活で宇宙哲学的思想を持たない人々とつき合つていけば、ときにはどうしてもその言動の影響を受けがちで、どうにかすると絶望的になることもあるでしょう。職場にいれば、もつと儲かるようにやれと上役からガミガミ言われるでしょうし、友人たちからはつまらぬ交際を求められて断りきれないこともあるでしょう。その他、どこを見まわしても狡猾、横柄、傲慢、エゴなどの想念が渦巻いており、これらの妖怪を振り払うことは容易ではないでしょう。その場合はただちに大宇宙の創造主の偉大な生命力を心に思い浮かべて、自分や万物がそれに生かされているという想念を強く起こして下さい。これ

は一種の思念法であり、冥想でもあるのですが、このような思念を忍耐強く続ければやがて自身の内奥から清新な感覚が満ち溢れてきて、自分が創造主の御子であるという歓喜に満ちた想念に包まれてくるようになります。時間をかけて思念を続けなければいつか必ずパーツと目が開けたような宇宙的感覺がみなぎってきますから、そのレベルに達するまで続けるとよいのです。そして自分ばかりか万物がすべて創造主の生命力にかざれていることを認識するようになるでしょう。この種の思念は常に行なうとよいでしょう。職場でも家庭でも電車の吊り皮にぶらさがっているときでも道路を歩行中でも、気がついたときに行なうように心がければ、やがてそれが良き習慣となり、いつしか良きカルマ、良き運命を作るためのタネとなります。

ちなみに分裂感情を起こしてやたらと他人にかみつくタイプの人を私の郷里の方言で「ジラ者」と言いますが、このような人によくつきまわられて悩まされる人は、すでにそれを引き寄せる要素を持っているのですけれども、ジラ者は破壊的なカルマを持っているのですから、相手にすると、そのカルマの一部分を吸収することになりますので、高いレベルに達しきれなければ徹底的によけて通る方が賢明です。これは、伝染病患者に接近すると感染するのに似ています。

もう一つ重要なのは、この地球へ、特に日本へ、飛来していると思われるスペース・ブラザーズ（シスターズやマスターズも含むので、私はこの頃スペース・ファミリーと呼んでいます）の存在をはっきりと意識し、「創造主の生命において自分はこの人々と一体である」という想念を強く起こしたり、ファミリーから送られる良き想念を感受したりする習慣を身につけることです。見たことのない人を思い浮かべることとはできないと言う人は、本会頒布のオーソン写真を見つめるとよいでしょう。

この宇宙の創造主の生命力・英知・意識を感覚的に感じ取ることで私たちが被創造物の最大の義務なのであって、これ以外に祭壇や偶像を礼拝する必要はまったくありません。偶像などは地球人のセンスマインドで作り上げた迷いの産物です。礼拝するとすると金属や木で作った偶像よりも野辺に咲く一輪の花を見つめてその中にひそむ創造主の英知と力を洞察し、その妙技に感歎して礼拝する方がはるかに宇宙的なのです。

このような感覚の醸成を土台にしてテレパシーの自己訓練を行なうことが重要な課題となってきます。激動する社会を生き抜くために頭の先だけのマインド判断よりもっと内奥のインスピレーションによって深い「読み」をすることが大切で、そのためにはテレパシクな直感力の開発が急務です。といって一朝一夕には向上しませんから、毎日一定の時間をきめて忍耐強く自己訓練を行なうことです。この練習法はアダムスキー著「テレパシー」に詳述してありますから、熟読玩味して応用してみて下さい。日本GAPの東京月例会では毎回テレパシーの練習を行なっています。もちろん一カ月にわずか一回、数十分間の練習だけで開発できるわけはなく、これはあくまでも個人の意欲を起こさせるための刺激として実施するにすぎません。根本的には各自の日頃の練習にかかっています。

他人は言うかもしれませんが、「そんなことをやったら何にもならないよ。要領よく働いて生活資金と社会的地位を確保すればいいんだ」と。たしかにこの世界は貨幣経済で成り立っていますから、お金というものを入手しないことには生活ができない仕組になっています。その他、いかなる理想主義活動を展開しようにも資金がなければどうにもなりません。しかし人間の魂の目的は物質の財産作りにあるのではなく、永劫の転生権を獲得して限りなく創造主に近づくことにあります。したがって

「金はこの地球上での生活の手段として第二義的なものとどめ、第一義的には魂の財産を作ることを目標とすべきです。そうしないと永続的な転生権を得ることができません。十五、六回の生まれ変わりの期間終了後に消滅してしまうことになるのです。現在の地球にはこの「満期」に達した人が大多数を占めていると考えられますが、更に「更新」できるか否かは各人の自由意志にかかっています。

魂の財産——それは自分や他人、その他万物の中にひそむ創造主の生命力・英知・意識を認識する力であり、創造主のごとく生きようとする意欲と信念です。具体的に言えば「慈悲」の精神に基づいた没我的行動すなわち他の被創造物に対する「奉仕」であり、これ以外の何物でもありません。

向上しようとする人は、まず強固な意志と信念を持つ必要があります。「ぶんなくられても、やめない」と言うある議員の意志の強さは相当なものです。私たちがこれを良き方向に應用すればよいのです。私は多数の人から相談を受けましたが、大別すると次の二種類になります。学生の場合、学校へ行くのがバカらしくなってきた。やめて、もつと生き甲斐のある仕事をしたい。学校の授業は人生に何の関係もない。社会人の場合、職場が面白くない。自分の魂の目的に沿った仕事に変えたい。どのような職に変えたらよいか、どうすれば成功するだろうか。

これに対する私の回答はきまっています。「学校をやめれば、あとで必ず後悔する。勉強できる恵まれた環境にあるのなら、父母の恩恵に感謝して勉強を続けなさい。どんなに無意味に見える授業でもあとになって必ず役に立つ。学力をつけておかないと職場で困ることになる」「どんなに面白くなさそうな職場でも、その仕事はレッスンである。それをマスターしないで他の仕事に移っても、またイヤになってくる。こうして

カルミックな悪循環をくり返して、いつまでも一定の技能が身につかない」

私自身は戦時中、十八歳から十九歳の二年間にわたって山奥で土方をやっていました。発電所の建設工事に従事して三国人の野獣のような人夫たちを相手に身長ほどの長さがある巨大なスコップを手にしてコンクリートの練り方をやったり、山中をはいずりまわったりしたのですが、この当時に私にとってドン底の生活でした。その頃無学歴であった私はこれ以外に仕事がなく、またこの仕事に関する限り、ウダツのあがる見込はまったくなく、毎日が牢獄のような生活でした。しかし疲労しきった体にみずからムチ打って夜間はノミだらけの飯場で数学、英語、土木工学等の独学を続けましたが、ときとして絶望の淵に沈みそうな私を支えて強力な信念を吹き込んでくれたのは、当時私が入信していたある宗教の教義、「人間は神の子である」という思想です。この教義にどれほど勇気づけられたことか！ 憤怒に燃えてスコを振り上げて迫ってくる三国人の人夫たちにも神の実体がひそんでいる、という強烈な確信は、ついに彼らをして親友たらしめたのでした。今でも彼らの顔がなつかしく浮かんできます。回想すれば、この土方生活の体験が実によいレッスンになっています。これをやらなかったら私は次に待ち受けていた軍隊生活という地獄を通過できなかったでしょう。戦争末期に入隊した陸軍航空隊は狂人と鬼の集団といっても過言ではなく、特に私は入隊後まもなく些細なことから「自由主義者」の烙印を押しされ、毎日のようになぐり倒されたり蹴とばされたり、ひどい目にあいましたが、「人間はすべて神の子である」の信念を失うことはなく、みずから筆写した教義の経文と新約聖書の一節を常に肌に着けて忍耐強く軍務に服したためか、長野県の松本航空隊へ転属してからは抜てきされ、部隊本部付きとなって事務関

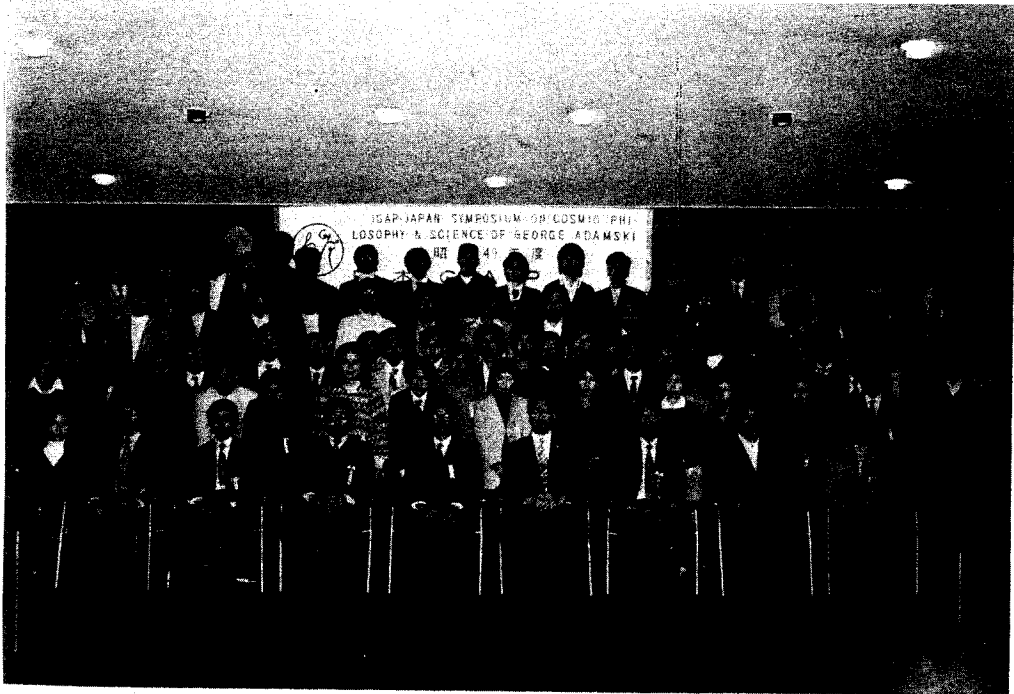
係の仕事を与えられています。原隊にいた同年兵の数千名は戦死しましたが、私は運よく敵襲をまったく受けない安全な場所へ移されたかたちになったのです。短期間ながらこの苛酷な軍隊生活もよなきレックスンとなっています。これを体験しなかつたら戦後の激動期を生き抜く力は出てこなかつたでしょう。後年、大学を卒業するまで私は親から一銭の学資も生活費ももらうことはなく、すべて自力で捻出しました。このささやかな忍耐力はそれまでにつちかかった信念と強固な意志が土台となっています。早くから父を失って貧しい家庭に育つたために学校どころではなかつた私は、加うるに小学校卒業直後に大病をわずらい、危うくアウトになりかけたものの、どういうわけか「自分は死なない！」という強い確信めいたものがあつて、病氣に対して恐怖心が起こらず、そのせいか奇蹟的に助かり、それから数年間の闘病生活中に宇宙的信念を持つようになつて、その信念の力により、土方がやれるほどの健康体になつたのです。

鉄のように強固な信念と不拔の忍耐力！これがいかに重要であるかを私は身をもつて体得しています。過去五十年の生活は苦闘の連続であり、時には脱線した事もありましたが、「他に対する奉仕」という精神を多少とも基盤にしている私は、仕事そのものに倦怠感を起こすことはありません。連日馬車ウマのように働いていますが、「他人のために働いているときに最大の楽しみである」という考え方がこの頃やつと身についた感じがします。しかしまだ未熟な私が真の自分を発見するのはほど遠いことだと思つたのです。比較にもならない偉大な人が他にいるからです。過去に執着するなというのが宇宙的な教えの一つであり、その意味で私は自分の過去についてほとんど話さなかつたのですが、信念がぐらつきそうになつて迷つてゐる若い人が多いこの頃、多少とも参考になれば

と思ひ、少し述べてみました。実際、人間というものは物質的な支えよりも、他人から寄せられる激励の言葉ほど大いなる勇気の源泉となるものはありません。私のGAP活動がここまで続いたのも先輩、盟友からの激励と援助のたまものですから、そのお返しとして若い会員の迷える方々に激励と援助の手を差しのべましよう。真剣に向上を願う人は遠慮なく私宛にお手紙を下さい。多忙のため早急な返事は不可能ですが、いづれ必ず回答を差し上げます。

私は今後も更に活動を続けてゆき、強力な団結と組織化を図るために同志を求めています。これまで私を支持して下さつた方々で、今生に生ある限り協力を続けようとする方はご一報下さい。これは決して経済的援助の要請を意味するものではありません。詮索しようとする単なる好奇心の持主にすぎない人は当方からおことわりしますから、ご了承下さい。私が過去に行なつてきた対社会活動からみて私を信頼される方のみを求めます。人数は少数でもかまいません。真に宇宙の法則を探求し、法則に従つた生き方をしようと真剣に努力される人こそ私にとつて望ましい人であり、信頼にあたいする人です。つまり「努力」という具体的な行為を示す人が価値を持つのであつて、言葉による表現だけでは、ただ「日本語を知つている」という段階にすぎません。

実際、人間は言葉を用いることによつてどのように立派な表現もできますし、主義主張の表明も可能ですが、他人のために何もやらないでいふ言葉の羅列に終始するだけでは三文の価値もありません。ところが大半の人は他人のコトバに陶醉し、自身のコトバに酔っています。対社会的にまったく無価値な人が立派な言葉を吐けば、その人を立派な人と錯覚しがちです。これからみても他人の主義主張だけを聞いて判断することは危険です。価値があるのは人間の行為・活動です。



昭和49年度

日本GAP総会、盛況

「文化の日」の十一月三日、昭和四十九年度日本GAP総会が東京・上野の東京文化会館四階大ホールで開かれた。この日は冷たい風の吹く日だったが、全国から熱心な会員たち八十餘人が寒風を突いて参集、十時の開会時には半数以上が席を占めていた。中には九州、大阪、新潟、福島、北海道の遠距離から駆けつけた会員たちもいた。

開会は十時十五分、まず司会の片京氏が約二十分間にわたって開会の挨拶、「想念観察の必要性」を述べた。

このあと拍手に迎えられて久保田代表が登壇、「UFO問題と宇宙思想」を演題に熱弁をふるった。講演はG・アダムスキー著「空飛ぶ円盤同乗記」のポイントとされる地軸の変動による地球の大変換の部分に力点がおかれ、原文を引き合いに出し、黒板にその原文を示しながら我々の慈悲の行為の必要性を強調、感銘を与えた。正午、代表の講演が終了。

一時間の昼休み中に、次の講演者・内田秀男先生が来場。スライド、オーラメーターのセッティングを役員たちと共に進めた。

午後一時、内田秀男先生による「オーラの謎」と題した講演へ移った。講演はスライドを上映しながら行われたが、スライド上映に当たって役員の菅原氏がその一役をかった。また内田先生の講演の間じゅう、会場の後方では入場時渡したオーラ実測の順番カード順にオーラ計測を進めていった。オーラ実測には内田先生の助手の女性も駆けつけ、なれた手



●受付

●司会者、片氏の挨拶



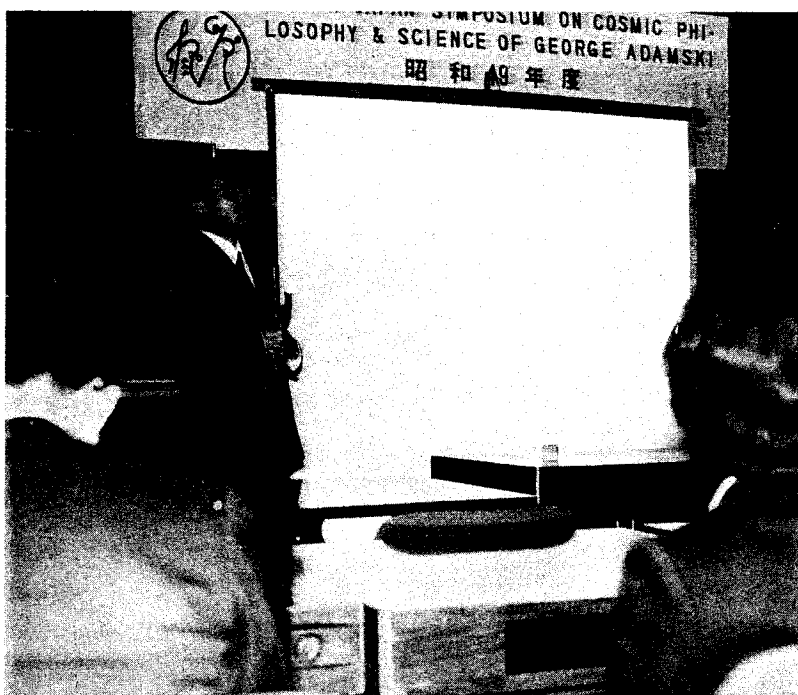
つきで実測していた。
 内田先生の講演は、オーラとは何かからはじまり、オーラを実測するとその人の病氣、性格がわかること、さまざまな物体にオーラがあること、また宇宙電界エネルギーの存在などを述べたが、聴講者は、ことに味の素などの食品添加物などには悪いオーラが発生していることに興味を示したようだ。午後四

時三十分までの長時間におよぶ講演だったが、その間オーラを実測したのは三十人、その後もオーラ実測を願う人たちがつめかけ、五時を回る頃まで約五十人がオーラを実測したり、個々に質問したりで、汗だくの内田先生だった。

一方、四時三十分からは久保田代表への質問時間



●久保田代表の講演



●内田先生の講演

が設けられ、五、六人が質問に立った。質問の中には「今後のGAP活動はどうなるのか」など、今後のGAP活動が活発になることを望み、その拡大を図ってほしいと願う声もあったが、代表は「量より質を高めていく方針だ」との考えを示した。

最後に久保田代表は「来年、皆さんと共に総会で会いたいものだ」とのことばを残して降壇、盛況裏に幕を閉じた。

(長友記)

●オーラメーターによる測定



●真剣な表情の参加会員



連載ノンフィクション

改訳——

空飛ぶ円盤同乗記 (8)

ジョージ・アダムスキー
久保田八郎 訳

地球の太古の状況と
生まれ変わりの法則を語る

●第11章 レストランでの会話

九月の始め頃、また近いうちに大気圏外から来た友人たちに会えるかもしれないという感じがし始めた。夏中しばしば空中を動く彼らの宇宙船を見たが、表面的には個人的な会見の必要は起こってこなかった。

だが日がたつにつれて私はふたたびロサンゼルスへ行つてみたいという衝動が高まってくるのを感じたのである。九月八日（一九五三年）、パロマー・ガーデンズで私たちと幾日かをすごしていた女性の一友人がいつしよにロサンゼルスへ行かないかと誘つてくれた。私は同意して、午後四時頃にその町へ到着した。いつものホテルへはいると、ボーイが私の部屋までついて来たが、少し元気が出たので、またロビーへ引き返した。

私は驚喜した。なんとそこには大きく微笑を浮かべたフアーコンとラミューが待っているではないか！

挨拶がかわされてから、急いでいるのかと尋ねると、まるで私の考えを知っているかのようにラミューが答えた。

「少しも急いではいません。私たちが来たのはあなたが心中にいだいてある疑問に答えるためです——できる限り答えましょう」

小さなレストランへ行こうではないかと私は提案した。そこなら他人から邪魔されずに食べたり話したりできる例の店なのだ。つれだつて歩きながら私は言った。「私が悩んでいる重要な問題をあなたはよく知っていらつしやるのでしょうかね」

フアーコンが笑つて言う。「この夏、あなたが大気圏外へ放射した思念による質問の回答が、電線も張らないのに果たして返ってくるかどうかと考へていたのでしょうか？」

「そのとおりなんです」と、私は安堵のため息とともに叫んだ。時間が早いのでレストランにはほとんどだれもいない。私たちは一番

隅の仕切り席にすわつて、サンドイッチとコーヒーを注文した。食事をするためというよりもむしろ居心地のよい場所であつたとした商談をするために立ち寄つたのだとウェイトレスに説明すると、彼女は「どうぞごゆっくり」といいねいに挨拶して離れて行き、ふたたび会計係と話をし始めた。

「フロリダ州のあの少年団長の事件についてはどうですか？ 円盤から彼に向けて一種の火災が放射されたという報告がありますが——」と私は尋ねてみた。

〔注〕この事件は次のとおりである。一九五二年八月中旬に、太平洋で三年間軍務に服した元海兵のJ・D・デスバークが、夜間フロリダ・エバグレーズの端を三人のボーイスカウトと自動車で疾走中、「閃光」を発見、他の者を車中に残し、十分間たつて自分が帰つてこなかったら警官を呼べと言ひ残して、一人でマチエテ（南米土人の用いる刀）と懐中電灯を持つてヤブの中を前進したところ、六人ないし八人ぐらいの人間が中に立てるほどの広さの（人間がいたわけではない）物体を見た。中央部の高さが約三メートル、直径は約九メートル、ゴム球を半分に切つたような形で、横は厚さ一メートルほどに先細りになつていて、フチの周囲は燐光のように輝いていた。物体は地上約三メートルの空間にいたが、三十歳になるこの金物店の店員は約三分間その下にいた。物体はタイヤの空気が抜けるときのようなシューツという音を出していた。すると物体からゆつくりと炎のようなものが彼の方に伸びて、そのために両腕の毛が焼けこげて、帽子にも小さな焼け穴が三つできたという。彼は意識不明になつたが、三人のボーイスカウトに呼ばれた保安官のモット・パーティンがやつて来たときにはまだ正気に返つていなかった。彼がヤブの中から出て来たときは、まるで野獣のようだったとパーティン

は言っている。パーティンは物体が着陸したと思われる地点を調べたがその形跡はなかったし、ぬれた地面にデスバーガーズの足跡も発見できなかったという。ただしこの事件には多くの説があり、八月二十四日のフロリダ・タイムズ・ユニオンによれば、パーティンが現場へ行ったら草が焦げて火ぶくれになっていたと述べた、と報道している。

「とんでもない！」とファーコンが力をこめて答えた。「私たちはそんなことはしません。実際はこうです。その人は非常におびえたのです。走り去ってこのことを知らせようとしないで、持っていた刀で船体をつつき始めたのです。それがどういふことなのかもわからずに——。とにかく彼は船体を動かしているパワーに接近しすぎたためにヤケドをしたのです」

「もつとくわしく言います」と続けて、「ロープはそれ自体が火を持ちませんが、両手の間を急速にすべらせればヤケドします。これと同じで船体から放射されるパワーがあの人を急速に通過したものですから摩擦作用で体が焦げたのです」

「あなたも似たような体験をお持ちなのですよ」とラミューが私に思い出させて言う。「オーソンと最初に会見たとき、あなたの腕が円盤の下で振動していたパワーに触れたでしょう。実際にはヤケドしませんでした。もしバランスを失ってフランジ（外縁）の下に倒れたら、ヤケドしたかもしれません。オーソンが引きもどして助けたのです」

次にブラッシュ・クリークの報告はどの程度真実なのかと尋ねた。

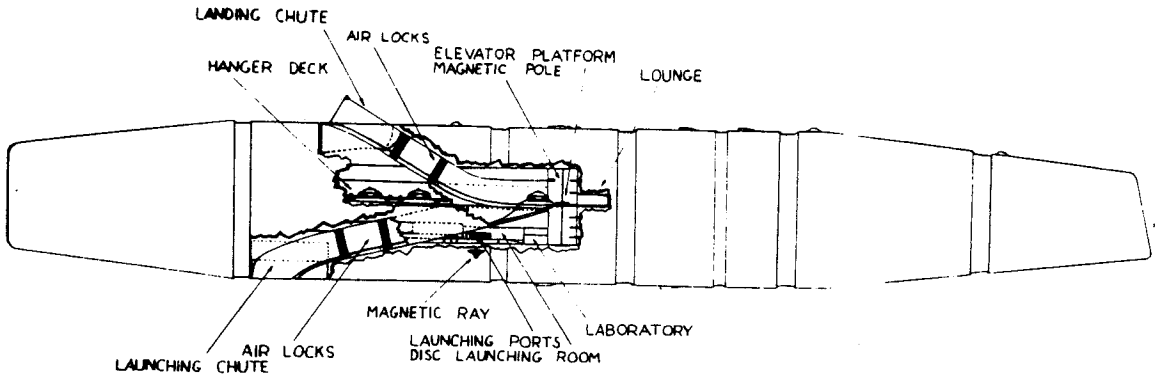
〔注〕一九五三年六月に米国カリフォルニア州ブラッシュ・クリーク地区で、かねてからその金鉱でいたずらし続けていた肩幅の広い小人たちの乗る「円盤」に手を焼いた二人の老鉱夫がワナを仕掛けた。ジョン・ブラックとジョン・ヴァン・アレンの二人が言うには、この次に現わ

れたら仕止めてやろうと待ちかまえていた。まじめだというので評判のよい二人が保安官の隊長フレッド・プレストンに語るころによると、人里離れたマール・クリーク地区で操業している小さな金鉱の近くで、円盤が二度も着陸したという。着陸するたびに一人の小人が出て来て、手おけ一杯の水を汲み出してから、それを円盤の中にいる他の者に渡すのである。そこで二人はプレストンにむかつて、この次発見したらその怪しげな機械を撃つてよいかと尋ねた。最初は五月二十日に着陸し、二度目は六月二十日に着陸した。そこで今度は七月二十日だろうと考えたのである。だがプレストンは自分には許可を与える権限はないと答えた。「この次出てきたら、ひっ捕まるといいだろう。そうすれば君たちの話を裏付ける証拠になる」とすすめた。自分はこれを調査する計画は持たなかったが、空軍には報告した、とプレストンは言っている。

鉱夫たちの説明によると、円盤はマール・クリークとジョーダン・クリークの境目の砂地に着陸するが、そのときは三本脚の着陸装置を用い、離陸するとそれが引込むという。着陸地には象の足跡ぐらいの大きな跡を残した。円盤の直径は約二メートル、高さは一メートル二〇センチ程度である。円盤から出て来る小人は膝まであるパーカ（エスキモ一人が着る毛皮のジャケット）に似たものを着ており、腕と足は厚ぼったいツィードのような生地でおおわれていた。

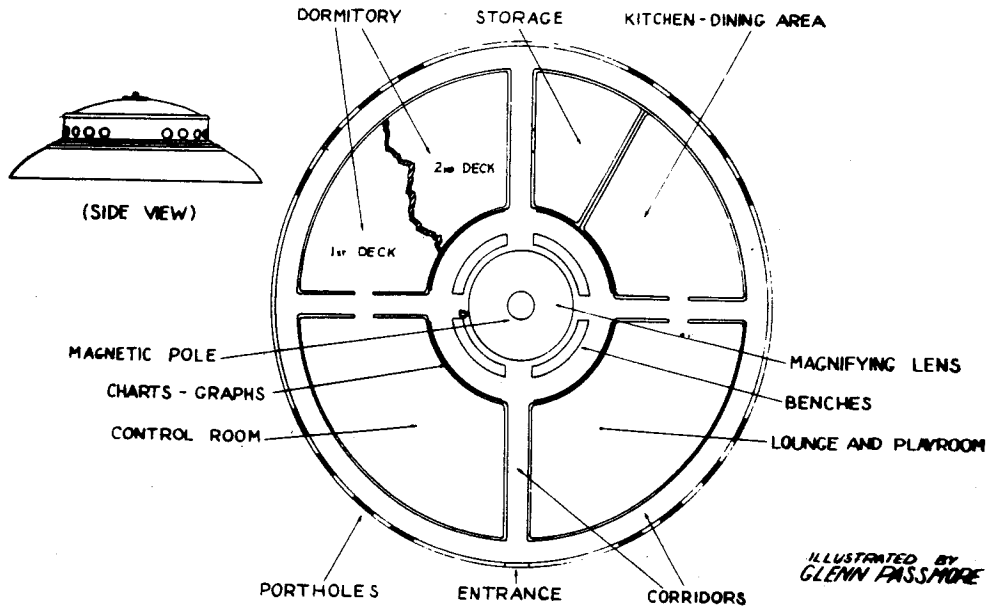
ブラッシュ・クリークで店を経営しているヴァイ・ベルチャー夫人はこの二人の鉱夫は評判がよくて、酒を飲まない人だと言っている。

「あの目撃事件は事実でした」とファーコンが答えて、「ただしあの円盤と乗員は私たちのグループとは関係ありません。同じような目撃事件や、一人またはそれ以上との個人的なコンタクトは多くありましたし、あなたの最初のコンタクト以前にも以後にもありました。こうしたこと



ILLUSTRATED BY
GLENN PASSMORE

土星の科学研究大母船と円盤



ILLUSTRATED BY
GLENN PASSMORE

は世界のほとんどあらゆる国で発生しています。しかしあなたの体験は多数の人々に報告されたものとして最初です。このようなコンタクトは多年起こっていますし、全然発表されていない記録類もあるのですが、同胞が信じてくれないために、あえて語る人はほとんどいません」

彼はあっさりといつげ加えた。「私たちは秘密裏に会見することを喜びません。訪問を歓迎されたいですし、他の惑星の人々とやっているのと同じように地球人と会見したいのです。しかし私たちの訪問が理解されず、私たちが宇宙船が危険にさらされる限り、現在のような警戒を続ける必要があるのです」

私はマンテル大尉が死んだ理由について真相を質問した（注Ⅱ UFO 専門誌「コスモ」第8号掲載、荒井欣一氏の記事「マンテル大尉の悲劇」を参照。事件の詳細が述べてある）。

するとラミューが厳肅な表情をはつきりと示して説明した。

「あれは私たちがたいそう遺憾に思っている事故です。彼が追跡していた宇宙船は巨大なものでした。円盤の乗員たちはマンテル大尉機がやってくるのを認めて、大尉の関心がまじめなもので、挑戦的でないことを知っていました。彼らは円盤の速度を落として、大尉機の装置を通じてコンタクトしようとしたのです。みんなは円盤からパワーが放射されていることをよく知っていますから、大尉機を傷つけることなしに機の接近を阻止するだろうと思っただけですが、更に接近したとき、機の翼がこのパワーの中を通過し、そのため吸引作用が起こり、機体全体がパワーの中に引つ張られて、即座に機体と人体が分解してしまったのです」

ラミューは更に説明した。「この分解は、物質を構成する分子を分離させ、その位置を完全に転換させる磁気放射線のために起こります。もし大尉の機体が円型かそれとも葉巻型だったら事故は起こらなかったで

しょう。大尉機は全体の型が一樣でなかったのです。翼が機体から突き出ていました。事故の原因はあの翼だったわけです。胴体だけなら機体を引つ張り込むほどの吸引力を起さなかったでしょうが、ひとたび翼がパワーに触れると、他の部分までが急速に引き寄せられて、バラバラになって地上へ落下したのです。ある部分は完全に微粒子になってしまったね」

彼は続けた。「一方、私たちの宇宙船はならんで飛ぶことができません、平均に衝撃を受けるような具合に船体を作っているために、あのような事故は起こりません。」

あのとときの宇宙船の目的はスピードを落として大尉機と通信を試みることでだけでした。私たちは、大尉機がこちらのパワーに触れば長もちしないことがわかっていました。地球人はこの種の飛行機を操縦するパイロットをもつともつと失うでしょう。特にジェット機は危険です。なぜなら、地球の飛行機は私たちの宇宙船が放射するパワーのために危険であるばかりでなく、自然の磁気の流れの中にはいけば機体がねじれて破壊される可能性があるからです。飛行機の機体から突き出ている部分が多すぎるので、パワーがそのどれかに触れば機体は助かりません」

夏申しきりに気になっていた有名な接触事件に関する疑惑がこれですべて解決した。「各事件について私がついていた印象を、あなたは確認してくださいましたね」と私は相手に言った。

「これから先になってあなたから尋ねられるかもしれない多くの質問のいくらかを、前もってお答えしてもいいですよ」とファーコンが示唆した。「以前お話ししましたように、惑星（複数）や太陽系（複数）は絶えず形成や崩壊の過程にあります。惑星群から成る一太陽系は万物とまったくよく似ています——一定の期間を経て発達の極に達し、やがてお

とろえて分解し始めます。私たちの太陽系が形成の過程にあるよりもずっと以前に、人間のいた無数の惑星から成る多くの太陽系がありました。當時も今日と同じように、各太陽系内や太陽系間の宇宙旅行が行なわれていましたが、その旅行のおもな目的は現在の私たちのそれと同じでした。宇宙空間のあらゆる面における活動を研究するためです。それで一太陽系内で一個の新しい惑星が形成されているのが発見されますと、多くの惑星からやって来た旅行者によって観測され、綿密に研究されました。

新しい惑星が人間の居住に適した段階にまで発達したことがわかると——あらゆる惑星は早晚その段階に達するのですが——旅行者たちはこの事実を他の惑星（複数）や別な太陽系（複数）の惑星群の住民たちに知らせます。そして新世界へ進出して開拓をしようとする志願者が募られます。それから大母船団にこの志願者と必要な装備一切をつみ込んで、新惑星へ輸送します。そのあとまたたびパイオニアたちの装備や補給品を必要に応じて運びます。そこへ行った人々は故郷の惑星へ訪問のために帰ることもできます。このようにして表現の新しい径路が開かれ、同時に新しい世界が人間によって住まわれるようになるのです。

地球は人間の生命の維持可能な段階に達した惑星として、この太陽系内では最も遅れた世界でした。地球の初期の住民は他の惑星群から送られて来たのですが、まもなく地球の大気中に思いがけない事が起こり、移住民は数世紀もたたぬうちにこの惑星の生活条件が好ましくなくなることに気づいて、その結果、最初の住民は少数の者を除いて所有物をすべて宇宙船に積み込み、別な惑星へむかって離れました。残留を希望した少数の者はこの新世界のみずみずしく繁茂した美と裕福のさなかであって墮落してしまい、それ以上のものを求めなくなりました。

次第に彼らは自然の洞窟の中に住んで満足するようになり、ついに記録から消えてしまったのです。

地球ではこの最初の住民の記録は存在しません。ある種類の神話に残っているだけです。この最初の文明の記憶はトリテリアの原始民族にちなんでトリトン神と呼ばれているものの中に保たれています。

〔注〕トリトンはギリシャ神話に出てくる半人半魚の海神〕

宇宙のパイオニアたちが去ってからもなく、地球の表面には多くの自然の変化が起こりました。海底深く沈下した大陸がありますし、反対に隆起したのもあります。そのあとまたたびこの世界は人間の居住に適するようになりましたが、今度は大気中にまだ残っている諸条件のために、志願者は募られませんでした。

惑星地球の形成と発達を私たちが興味をもって観察したもう一つの状態は、その仲間として一個の月しか形成されなかったことです。自然の諸条件の法則のもとでは、いつかもう一つの月が形成されて、生成する世界の小さな仲間（月）をおぎなうてやらないと、アンバランスな状態を起こすかもしれません。

このときウェイトレスがやって来て熱いコーヒーを私たちのカップにそそいだので、ラミューの話は中断されたが、彼女が離れるとファークンが言った。

「人間は不思議な生物ですね！ しかもあなたが大宇宙のどこで人間を発見しても、このことは真実ですよ。大体に人間というものは万物と調和して平和に暮らすことを好むものなのですが、あちこちで少数の人が個人的なエゴと侵略思想をもつて生長しますし、貪欲になって他人に権力をふるっています。このことは、人間は創造主の法則に従って生きねばならぬという教えがあるにもかかわらず、私たちの惑星でも起こる可

能性があります」

「そうだ」とラミューが言つて「しかもこのような態度が悪に至ることを私たちは知っているので、宇宙の法則に従っている私たちはこの兄弟たちを束縛することができないのです。それで大昔、多くの惑星の賢者たちの会合で、このような利己主義者を生存可能な新しい惑星へ送るようきめました。こんな場合には、多数の太陽系中の最低段階の惑星がこうした罪人の追放場所として選ばれたのです。」

そこで、いま述べたような理由から、この太陽系の内外の多くの惑星から来たこの始末におえぬ者たちの新しい住家として、太陽系内の地球が選ばれました。この罪人たちは、地球のいわゆる「厄介者」でした。

私たちは彼らを殺すことも監禁することもできませんでした。というのは宇宙の法則に反するからです。しかし彼ら追放者はすべて同じ傲慢な性質の者ばかりでしたから、だれも他人に譲歩しないと思われるので、結局は自分自身の調和を完成せざるを得なくなるでしょう。この人々が地球の元の「十二の種族」の真の源泉です。

そこで彼らは多くの惑星から宇宙船に乗せられて地球へ輸送されたのです。今度は最初の志願者たちに与えられたような、いかなる種類の装備品や必要品などはありません。すべての人々は各自の惑星で充分な教育を受けて、土壌、無機物、大気、その他肉体を維持する上に必要な多くの物事について知っていました。この新世界では、彼らは自分の知識を応用して、自然が供給する物だけで生活を始めねばなりません。これは彼らを働かせることによって自分たちの持つ才能を引き出させるためであり、創造主の願いに従っている人々すべての囲いの中に彼らを引きもどそうとしたためです。

これらがあなたがたの聖書に出てくる「墮落天使」です。つまり高度

な生命の状態から落ちて、この世界にいま存在する悪環境のタネをまいた人間たちのことです。

この人たちを地球へつれて来てから長いあいだ、多くの惑星の人々がしばしば彼らを訪れて、許す限りの援助と指導を与えようとしてきました。しかし彼らは高慢で反抗的な連中で、私たちが差し出した援助を受け入れようとしなかつたのです。それでも最初の衝突のあと、長いあいだ彼らは互いになんとかうまく生きることができました。その当時の地球はたしかに「エデンの園」でした。すべてが豊かで、食物や生活の必需品にも恵まれて、自然は豊かであつたからです。

新世界の歎喜よろこびの中にあつて、この新来者たちは互いに平和と幸福の中に住み始めましたが、これは他の惑星群の喜びでもあつたわけです。ところが聖書に述べてあるように、人間は「善悪の知識」の木の実を食べたのです。それまでは存在しなかつた分裂が起つてきて、貪欲と所有欲がふたたび人間のあいだにはびこり、彼らは互いに敵対し合うようになったのです。

年月が流れ、人口が増加するにしたがつて、この原種族の中からうぬぼれた人間たちが立ち上がつて数種族に分裂し始めました。この人間たちのいづれもが他のだれよりもはるかに進歩した惑星から来たのだと称し、その資格により支配権が与えられているのだと言つて、全人類の支配権を要求したのです。

私たちは常に彼らを同胞愛に目覚めさせようと願ひながら、この迷える兄弟たちを訪問し続けました。しかし年ともに自称支配者たちはますます強力になり、私たちの努力はむなしくなつたのです。分裂は続き、増大し、ついに今日いわゆる「国家群」の発生となつたわけです。

国家群の成立は更に同胞を分裂させ、全人類はもはや創造主の法則ど

おりに生きなくなりました。

この分裂の結果、多くの異なる様式の礼拝の仕方が起こりましたが、当時でさえも私たちは地球の兄弟を救うために他の人々を送り続けました。この人々が「救世主」として知られている人々です。彼らの使命は地球の兄弟を助けてその本来の理解に返らせることにありました。どの場合でも少数の信奉者がこの賢者の周囲に集まりましたが、いつも賢者たちは救おうとした相手によって殺されました。

人間の住んでいる宇宙の中のこの太陽系内で、なぜ地球が最低の惑星であるかを、あなたは考えてこられましたか、今お話ししたのがその理由です。

このような奉仕の仕事に志願した男女によって発達させられた惑星群の人々は堅実に進歩しています。彼らは無限の創造主がその子たちを生かさせようと意図したとおりに生きています。彼らは「父」の意志を遂行しながら生長し、発展しています。そして創造主の御手が人類の居住用に一惑星を準備されたあと、志願者のグループが自分の惑星を離れて新世界へ雄飛するたびに、彼らは新たな体験という学校へはいり、それによって全宇宙のより大きな理解を得るのです。このようにして間断なき進歩を求めながら自分自身を表現と奉仕のより高次な状態にあてはめるのです。

地球で言う苦勞というものは彼らの生活にはありません。なぜなら、いかなる惑星の住民といえども、創造主の意志のもとに働くや否や、環境がかわって彼らに奉仕し始めるからです。

地球はその反対です。うぬぼれと、自然の法則を曲解することによって、人間は環境を敵にまわしています。人間同士の戦いはこの最も明白な実例の一つです。人間の創造主によって福祉のために意図された種々

のエネルギーを人間は破壊的に使っているのですから――。

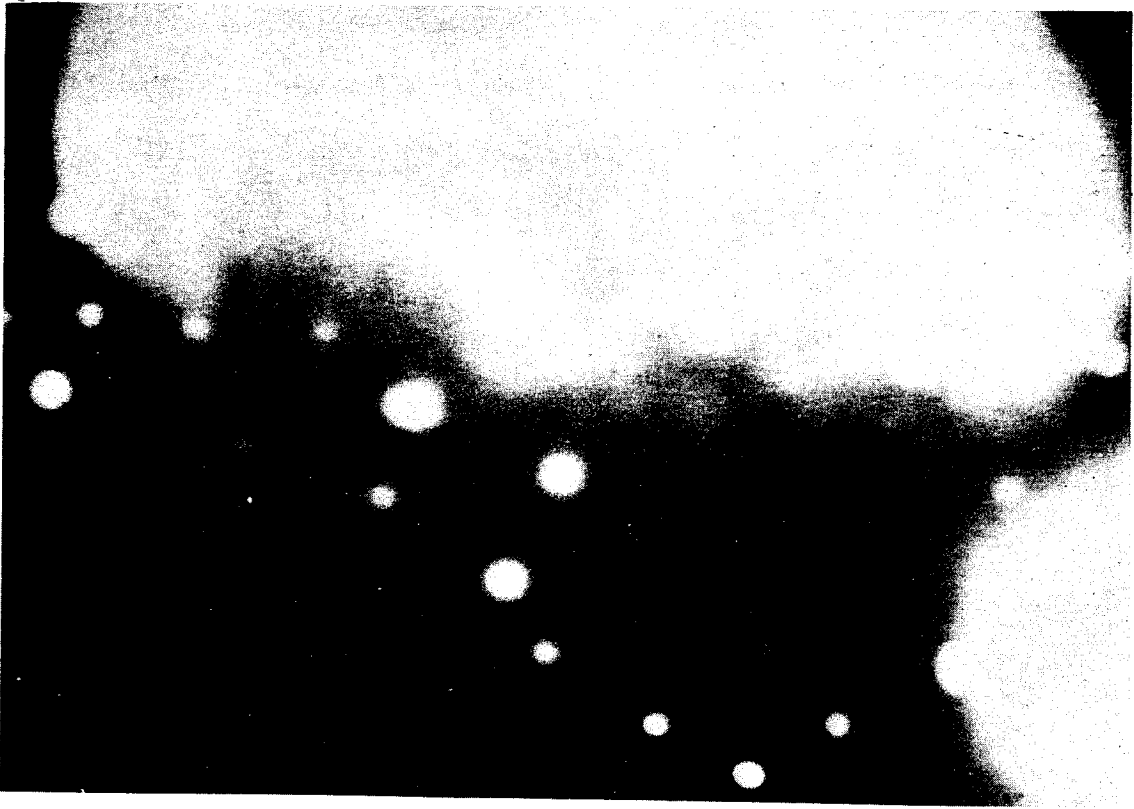
これが地球の住民と他の惑星群の住民との根本的な相違点です。地球人はある頂点に達するとまた破壊の段階におちいるということをくり返しているだけで、諸物質の誤用によって、自分が完成させたものをすべて破壊しています。

自分の進歩を早めるか遅くするかは各人にかかっていますから、地球にはあちこちに個人的にすぐれた人がいる場合もあります。地球人が自己の過失によって、自分の力とみなしていたものを創造主の英知に対決させるとき、それが実際には弱さであることや、自分の「知恵」は「全能」に対して混乱にすぎないことを知るときにのみ、彼らは羊囲いの中へ帰れるようになるでしょう。

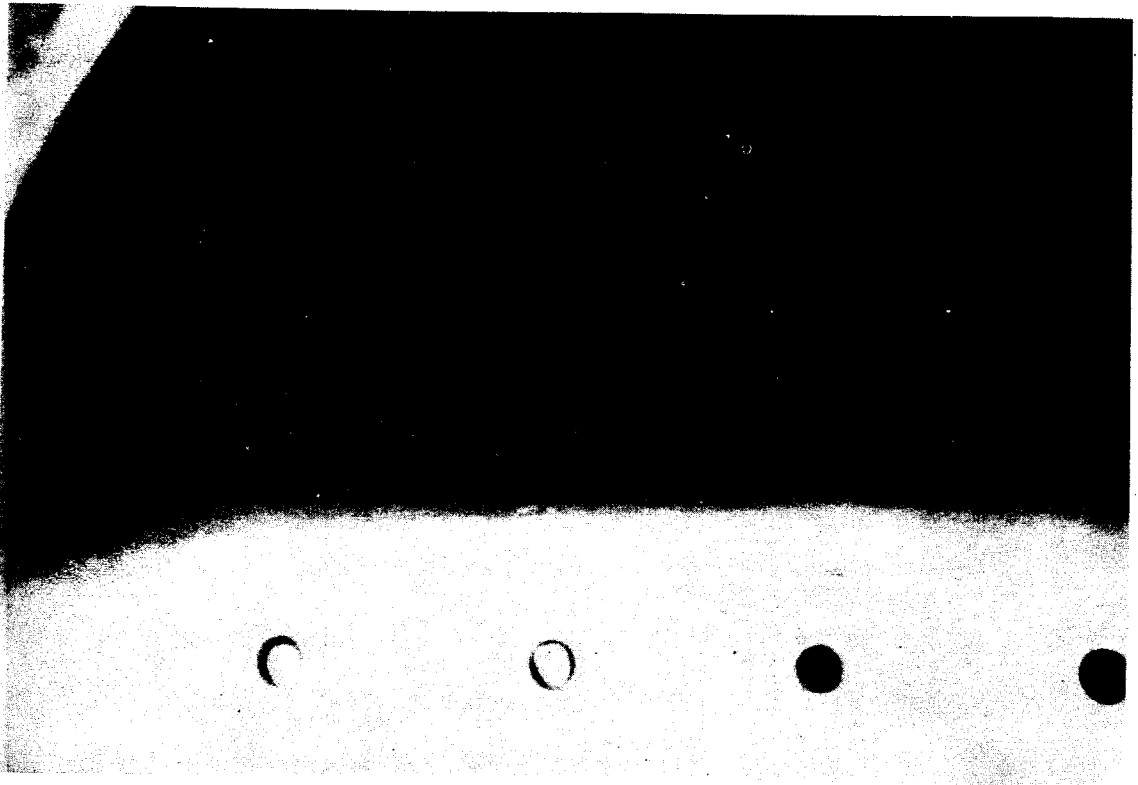
一方、私たちは地球人がどんな援助を望んでも、その叫び声を受け入れるように気をくばっています。なぜなら、彼らはまだ私たちの兄弟であるからです」

「このようなひどい相違を目のあたりにしても、全然失望されないのですか？」と私は尋ねた。答えたのはファーコンである。

「私たちはあなたがたの言う失望なるものを知りません。それは消極的な言葉です。ずっと昔、私たちは信念の力、希望の力、絶対にあきらめない力などを学びました。昨日失われたゴールを明日は勝ちとることができます。これは私たちが極度に発達していると考えているわけではありません。それどころではない。まだ永遠に進まねばなりません。しかし私たちの世界ではもはや病氣とか貧困などは存在しませんし、犯罪もありません。私たちは人間を創造主の最高表現として、また万物の中の完全なものとして認識しています。もし私たちが他のものを邪悪な心で傷つけるならば、そのものを本来の目的から変えてしまい、逆にこちら



●1951年5月16日午後9時、ジョージ・アダムスキーが、6インチ反射望遠鏡を使用して撮影した月面付近の円盤群。この現象は他の人々にも観測された。第14章に説明が出ている。



●1955年4月25日の早朝、母船の丸窓から顔を出した宇宙人とアダムスキーを円盤内にドカメラを使用して撮影したもの。左上方に円盤の丸窓のフチが見える。からパイロットがアダムスキーのポラロイ

が傷つくようになることを知っています。

創造主が私たち自身の問題を自分で達成するように私たちにまかせている理由はおわかりでしょう。創造主の法則が守られない場合は、その法則が私たちに不利な証言をするのです。

あなたがた地球人は、まるで悪魔が別個な実体であるかのように語ります。しかし創造主の原理に反することによってのみ人間は不調和な状態をつくり出すのであり、それを悪魔のせいにしていますが、しかもそれは自分で修正しなければなりません。すると聖書に述べてあるように、その悪魔が光明の天使になるのがわかるでしょう。あらゆる歪みはゆがめた人自身によって直さねばならないのです」

フーコンが話し終えると、ラミューの唇がきわめて特徴のある少し真面目な微笑を浮かべてほころびたとみるや語り始めた。

「太陽は地球を支配しませんし、地球も太陽を支配しません。また星々も互いに支配しません。すべては『父』によって支配されるのです。人間は自然そのものから学び始めるのです」

ある理由のため、この話は私が長く考えていた一つの問題を思い出させた。

「私たちが死とか生まれ変わりとか言っている問題についてですが、一生涯の記憶を次の生涯にまで持ち越すことができるでしょうか？」

ラミューが答えた。

「それは意識の発達に応じて可能です。永遠を生きる人間は何事も忘れません。しかし前生の肉体において学ばれた物事の記憶は、ある親しい物事の本能的な知識、またはそれに向かおうとする傾向以上にはほとんど現われません。地球人の頭在意識にはなぜそのようになるかという理解力がほとんどないのです。このような素質が少しでも現われる

とき、あなたがたはそれを才能とか天性とか言います。それがいちじるしく現われるとき、特に幼少年期に現われる場合は、そのような人々を天才児と呼んでいます。

地球はいわば低い周波数のもとで活動しています。その結果、あらゆるものの生命の生長と発達は——特に人間のそれは——遅く、出生と成熟のあいだに多くの年月を必要とします。人間が地球で生まれると、他の惑星の場合よりもはるかに長期間、無力な幼児の段階にとどまり、彼らが成年の男女になるまでには、いかなる記憶が出生の際に付随して来ようとも、それらは幼年時代中はずっと満たされてきた誤った考え方という混乱状態のもとに埋められてしまうのです。

自然の法則から分離してしまうと人間の理性力はいちじるしく制限されます。新しく生まれ出た人は（その惑星の）過去数百年の伝統と因襲をつめ込まれ、前生の体験の確かな記憶は押し出されてしまいます。このような真の記憶はときとしていわゆる潜在意識から顕在意識の中へひらめき出ることがあります。これは、初めて会った人をなんとなく以前から知っているような感じがするとき、または現世でまだ訪れたことのない場所を見て真の関連や記憶があるような気がするときに、それです。

このような体験のすべては、ほとんどの地球人にとって神秘的です。しかしこうした記憶は通常真の記憶であり、その説明は非常に簡単です。他の惑星では新生児にこのような障害を負わせません。それどころか万事が子供を自由にするように配慮されます。各個人の表現は他の人と多少相違し、個々の体験の背景は各自の運命の遂行の基礎として役立つことを私たちは知っています。

惑星というものはある周波数のもとに機能を果たしていますが、この周波数はそこに住む住民によってのみ確立されます。私たちの各惑星で

は周波数が高いため、生まれた子供は幼年期から成熟するまでに地球のようゆるやかな発達の期間を必要としません。私たちの場合、出生から青年期までの平均期間は、地球の十八年またはそれ以上に比較するとわずかに二年です。

地球人は「生まれ変わり」という言葉を誤った意味で用いています。そのほんとうの意味は、地球の各人が同胞の無知から脱却してより、高次の生命の理解に達したとき、別な惑星での生まれ変わりが許されることなのです。すると本人は地球上の体験の生き生きとした記憶を持つて生まれ変わります。あらゆる生命を支配する基本的法則に関する本人の概念は卓越したものとなるでしょう。本人の日常の習慣、家族や仲間との関係などの記憶はなおも鮮明に残りますが、それは二次的なものになるでしょう。二つの生のあいだに断層はなく、地球での本人を混乱させた雑多な名称や区別にわずらわされぬ進化の継続があることを悟るでしょう。

地球では個人の幼年期から成熟期までの発達に長期間を必要としながら、年をとることと老化は早く来ますが、これは個人の中に表現され続けている古い伝統と因襲のためです。真実の知識は、どんなに大昔にそれが得られたにしても、容易に持ち越されます。しかしたびたびくり返された人類の重荷と苦悩は数千年間記憶され、克服できないほどに人間の魂ののしかかっているのです。

ごらんのように私たちは外見や気分などで老化しません。これは十分に学んだ教訓の賜物を日々新たに持ち込むからであり、無益とわかったものはすべて捨てるからです。常に新鮮さを肉体に表現するので、このように若くなるのです。

彫刻家が両手に粘土をとり上げるときに描くイメージは、完成された



ときにその粘土が表現する形をすでに決定していますが、人間の肉体もこれと同じです。人間は自分自身を作る彫刻家であり、創造主から供給される材料で仕事をしているのです。自分の肉体を鑄造し、容貌に美醜を吹き込むのは、宇宙の中にある人間の自分自身に関する考え方です。

地球では老齢で、しかも永遠なる神を想像しますが、これは大きな矛盾です。なぜなら永遠なるものに年齢はないのですから——。海の底深いところや水面では絶えまない活動が行なわれているために、海はいつまでも生き続けますが、内部の活動が停止している池は、かつての清純な水をゆつくりとこらせる多量の外来物によって、古くなってゆきます。いわゆる「よどみ」が起こったのです。

肉体の病氣と崩壊はこれとほぼ同じ過程から生じます。地球人は自然の法則によって生きることを知らないために、個人的「よどみ」を起こすのです。時折、地球でも平均年齢よりもはるかに長寿を保ちながら若々しい印象を与える人がありますが、これは並外れた精神活動、関心、熱心さなどの特質を保つ能力によるものです。

私はこれまで知っているこのような少数の人を思い出して、うなずいた。「あなたがたは地球人よりもはるかに高い進化をとげているのではありませんか?」と私は言った。

これはファーコンを微笑させた。

「とんでもない! しかし私たちが過失をおかした場合は、それを隠そうとしたり正当化させようとするよりも、むしろ未来の行動のためのレッスンとして役立ちます。その上、何かの新しい分野が探求されているときは、肉体的にせよ精神的にせよ避けられない過失をおかすものです。あなたがた地球人にとっては、いわゆる失敗は恥であり、しば

しば個人または団体が他人の嘲笑や非難をあびます。これが地球人を古い慣習にしぼりつける根本的な要素ですが、その場合、彼らが勇気を持つか、同胞が寛容の精神を持つならば、彼らは新しい方法を試みるでしょう。

私たちの惑星では、はじめに努力する人が、その結果はどうあろうと失敗者とみなされることはありません。その人は何かを学んだのです。失敗そのものによって本人は同胞に大きな貢献をなし得るのです。勇気と進取の気象が本人に新しい道を試みさせます。その結果が悪くても、ふたたび他人によって踏襲される必要はありません。当人のみがこころよく苦しんだのであり、兄弟としての私たちは彼を称賛します」

ファーコンは話をやめてラミューをちらりと見たので、私はこのすばらしい話が終わったことに気づいた。一同が席から立ち上がった後も言う必要はなかった。私たちは勘定を支払ってふたたび街路へ出た。

今度はファーコンもラミューもホテルまで同行しない。「心から感謝します」と私は別れの挨拶とともに言ったが、その言葉は自分の耳に充分なものとして響かなかった。

歩き去る二人を見送りながら、私はちよつと立っていたが、そのあと反対の方向のホテルの方へ足を向けた。(以下次号)

タイトル頁の写真は、本年十一月七日夜十時すぎ、鹿児島県喜入町の崩中幸一氏が目撃・撮影されたUFOの編隊。このときNHK記者の川口氏と写真業の南氏も同時に目撃された。場所は同町前之浜と崩中間の砂浜。なお詳細なレポートは「コスモ改題」UFOと宇宙」誌第10号(来年一月二十日発売)に掲載される。

声



私はニューズレター各号を読み、ジョージ・アダムスキー氏やGAPがとてもすばらしいものであると感激致しました。私は日本GAPに入会して宇宙哲学やUF0を研究してみたいのです。久保田先生どうかよろしく願います。

私は数年前にジョージ・アダムスキーという人を知り、昭和47年の12月に「空飛ぶ円盤同乗記」を読みました。その後「空飛ぶ円盤の真相」「空飛ぶ円盤実見記」等のアダムスキー関係の書物を読み、アダムスキー氏が第二のイエスであること、GAPというすばらしい会があること、久保田先生が地球を天国にするために御活動なさっておられることなどを知りました。それで私も何かさやかな方法でアダムスキー氏を支持する人々を支持したいものだと意思を持っておりました。その結果、私は高い理想を持ちつつ現実的な方法でアダムスキー氏を支持する人々を支持しようと決意しました。私は英語も物理学も知りませんが、それに私は貧乏なのでアダムスキー氏を支持する人々を支持する実力がありません。いかに高尚な宇宙哲学を知つていようと現実の地球上の学問や実力がなくてはGAPに協力することができません。私は自動車がとても好きで、自動車産業の栄華も野のユリの美しき一輪におよばず、自動車産業の栄華も自動車にひき殺された小犬一匹、小猫一匹に遠くにおよばずと信じ、公害の元凶である自動車を地球上からなくして、金星や土星の交通機関のようになすべし

のにかえるのがよいと考えておりました。しかしどんなに自動車がお客の元凶であろうとも、自動車を利用しなければGAPの人々に協力することはできません。私が自動車を好むならば事は早いでしょう。いつでもその気になりさえすれば運転免許を取ってきたはずで、にもかかわらず、つねに免許取得を避けてきたのは自動車がきらいだからです。しかし私は免許を取らんと決意しました。自動車免許取得などよい事とは思いませんが、しかし取得しないことにくらべればはるかによい事なのでしよう。私は将来の為に運転免許を取得しよう。と島根自動車学校に入校し、49年1月に普通車免許を取得しました。私は松江市にて静かに着実に実力を養ひ、将来にそなえるつもりです。自動車免許を取得し、英語を勉強し、数学や物理学を勉強して実力を養成し、仕事の余暇にひろく日本全国を旅行して見聞をひろめ、望遠鏡を買って天体観測および双眼鏡によるUF0観測をやり、実力を養成するつもりです。松江市の大地町で数年の間、着実に実力をたくわえるつもりです。そうすれば数年後にはアダムスキー氏を支持する人々にさやかな方法で協力させてもらえるかもしれません。

一流の哲学者であり、それと同時に最高の科学者であると思うのです。ですから、イエス・キリスト、ジョージ・アダムスキー氏、フレッド・ステッカーのグ氏、久保田先生などは、そこらへんのいわゆる「最高の哲学者」、「科学界の最高権威」などよりはるかにすぐれた哲学者であり、科学者であると思います。地球人の最大の弱点の一つは科学者達に弱いということではないでしょうか。人々は政治家や実業界の大立物などは盲信しないようです。政治家のニクソン大統領が「私はウォーターゲート事件には関係していない」といっても、あるいは石油会社の社長が「わが社は石油危機による不当利益などとは無関係である。」などいっても人々は盲信しないようです。ところが科学者が「アインシュタインの相対性理論は正しく、光速をこえる乗物はつくれない。」などいって人々は盲信するようです。科学者達はアインシュタインの相対性理論を売り物として、「光こそ一番速く、光速度をこえることはできないのだ」と天文学者達に吹きこみました。すると天文学者達はそれにとびつき盲信して「天文学や物理学で考えればUF0は存在しない。金星や火星に人類は存在しない。」と世界中に宣伝してしまつたようです。政治家や教育者、それに宗教家やその他もろもろは天文学者達や科学者達のいうことを盲信してしまつたようです。地球上に天国を出現させるためには科学者達の考えをあらためてもらわなければだめだと思います。

アダムスキー氏の「空飛ぶ円盤の真相」によれば大財閥が世界中の人々を駒として使用しているそうです。各国の政治家、王室、宗教家など大財閥の飾り物にすぎず、大財閥はそれらをチェスの駒として使用して楽しんでるそうですが、しかしながら科学者は大財閥や政治家に支配されながら実は彼らの考え方を支配しているのでは無いでしょうか。つまり政治家、王室などがチェスの駒で、チェスをする人が大財閥で、科学者はチェスのルールではないでしょうか。チェスをする人はチェスのルールを利用して駒を動かす。チェスをする人はチェスのルールに従つて作戦をねり駒を動かす。チェスをする人はチェスのルールを利用して駒を動かす。チェスをする人はチェスのルールに縛られ、支配され、従わされてルールを一步もでることができず、ルールをあらためぬかぎり新しい独創的な手を考えることはできません。しかも新しいルールをつくらうとする人はあまりいないようです。大財閥が科学の知識を生かしてつくられた製品をどう利用するために、各国の元首、政治家などを動かしても所詮ただそれだけのことでないでしょうか。真にもうけるためには科学者達を動かしてアダムスキー氏に体験を認めてもらい、新しい科学をつくり、それを生かした製品で地球を楽土にする、とだと思つたのです。結局、大財閥などより科学者の方が格が上のような気がします。政治家や大財閥は世界中の人々を支配しているようですが、科学者は人々の心を支配してはいるような気がします。地上に天国を出現させるためには、まず科学者、天文学者、数学者、化学者達の考えをあらためさせなければならぬと思うのです。どんな時代に変わらうと、いつの世にも、歴史をしたらべ、教訓を学びとりつつ、おだやかな方法で世の中を改革すべく黙黙として活動しておられる人々が存在するものです。久保田先生をはじめとして日本GAPの方

々が御活動なさっておられることは、日本と、そして世界中の国々にとってまことに喜ばしいことであり、ありがたいこととあります。日本GAPとコズモ出版社の御発展をお祈りするとともに久保田八郎先生の御多幸をお祈りするものです。



(松江市 金山 宏)

久保田先生、元野木書店での二回目のUFO資料展示会無事終了致しまして喜んでおります。今回の展示会の目的について記しておきます。今回は二回目でもありテレビ等で放映された事であり、懐疑が根強いと云う事を知っておりましたので、どの程度の関心を高める事が出来るか？ 見に来る人が最後までおられるかどうかという点にありました。前宣伝も貴方にお送りしました。ピラ十五枚程度使用したにすぎず、書店內に四枚と書店で用意された小さな展示揭示書きを二階への上り口に一枚のみです。前回で使用した表看板は使用していません。最小の宣伝で人々のUFOに対する関心の度合と口コミの大きさを知れたかったのです。そして私自身その会場にはおりませんでした。無責任なと思われるかも知れませんが、完全に個人の自由意志を尊重する立場から私はそこにいない方がよいと思つたのです。前回の様に机の上には二十冊程の書物とイスを三つ、書物はきれいに並べ、イスは机の中に押し込め、これで安心して

仕事が出来るとは。そして閉店前にイスと書物を整理に毎夕出かけました。これでイスと書物の動きで人の入りと関心の深さを知る事が出来ます。私の感じた事ですが毎日(不思議と日曜日以外)書物がかかり移動している事を見る事が出来ます。イスも出され、それに座って誰かが書物を手にしたという事です。そして日増に書物の移動が激しくなるといふ事をうれしく思いました。最後の日に店員さんが言うには「随分関心ある人が多いですね」という事でした。

私はここにおいて実に素晴らしい事を思いついたのです。私の二回の資料展示会に展示した書物は単にUFO関係書という事でしたが、これをアダムスキーの著書のみ限定してイスと机をもつとふやしたらどうかと思つております。元野木書店の会場の場合机とイスが三つづつでしたが、少なくとも図の様に二十五組は配置出来ます。一机にア氏著書「同乗記」「真相」「空飛ぶ円盤とアダムスキー」「テレバシー」「生命の科学」等を置きます。そしてこの展示会を長期にわたって行なうのです。出来る事なら一ヶ月間程やりたい。もしこれが実行出来ますなら、この展示会は深遠な生命の科学講座の教室となるでしょう。ここに至って人々は真の自由・平等を学ぶ事でしょうし、この世界の改善に役立つ人々が現われる事でしょう。そして毎日イスと書物の整理に出かけ、書物とイスの動きで人々の入りと関心の深さを知る事が出来ると思えます。もつとも書物が行方不明になる事も考えられますが、そんな事はかまいません。行方不明になれば追加すれば良いのです。これを行なうには少なからず費用がいります。

会場費や書物代で計十万〜十五万円はかかる事でしょう。私もそれくらいのお金だつた事持っています。私もそれくらいのお金だつた事から、それ程苦しくはないと思えます。これくらいのお金を奉仕で世界を改善すべき事だと思えます。初めての人々には今まで通りの書物類を別に設けても良いと思つております。

現在嘲笑と懐疑が横行しているからこそ人々が感じる様な馬鹿な事も出来、何の妨害も受けずに平然と行動出来るのです。人々は私に言うかも知れませんが「円盤は来ないじゃないか?」「お前は少しも騒がれないではないか?」これはこの問題とプラザーズに関するはなはだしい認識不足だと思えます。そしてこれは本当に喜ぶべき事なのです。これが保たれているからこそ今後の行動が出来ます。私自身自由が保たれているのです。私達は陰に隠れて行動する必要があります。この計画を実行する場合、私はまた元野木書店会場で行なうでしょう。二度の展示会が三度目に力を発揮出来ると思うからです。もつともこれは書店の協力を必要とします。しかし現在私は彼らを説得させるだけの力があるでしょうか。望みえない事ですが、一番良いのがこの計画に支障がない程度に彼らに確信を持たせる様円盤チャンが出現してくれる事です。

私達は今の内に確かな基礎を築いておかないと、単なる円盤資料だけでは世界の改善をこころよく思つていない人々のために妨害を受ける事だつて出てくると思えます。そして少しずつその輪を広げて行くのです。この計画を日本各地で実行出来れば素晴らしい事と確信しています。私達の世界では右を向いても左を向いても個人の利害関係

に結びつきます。水を飲むにも道を歩くにしても、食物を食うにしても、この地上に住むにしても、良い事を行なうにしても、この地球上の至る所が個人的利害というエゴ概念で汚染されている事が目につきます。これらの個人的利害関係を考えるならば私達の活動は不可能となるでしょうし、この地上に住む事も困難となる事でしょう。最近の気象異常は「空飛ぶ円盤とアダムスキー」の44ページのA氏の予言通りになっております。インド、フランス、ソ連の核実験は恐るべき脅威となる事でしょう。

(福岡県 内田 格男)

久保田先生、質問の回答、ありがとうございます。たいへんよく理解できました。この回答で生活の大部分の悩み等が解決できました。ありがとうございます。

蚊についてさつそくやってみました。ちよつと知らないままに蚊がはいっていたのですが、その蚊がまたさつそく攻撃的な蚊でしたので、はじめは思念するひまもなく部屋の中を逃げまわっていました。蚊が休んでくれている時に思念してみました。自分は、蚊と同じように原子でできていて、それを生みだした意識は分離してはいないのだと思念しました。そしてどうしたものか、この攻撃的だった蚊が方向転換して窓に向かって飛んできました。これはしめたとおつて窓をあけてやりました。これははめたと思つて窓をあけてやりました。これは偶然なかもしれませんが、一瞬、一体化したのかもしれない。

殺さないということが、たいへん大事だと感じてくるようになりました。よくケイ光灯の所へいろんな虫が飛んでくるのですが、まったく殺す気持ちにはなれません。

創造主がこれだけのものを造るのは、たいへんな英知と力と日時とを要したことでしよう。これを殺せるわけがありませんね。これまでよくこれらの虫がまわりを飛んでくると心を乱して殺していた自分が、まったくの精神的幼児だったのだなあと思っています。

自分の内を見つめ、行動を正しくし、謙虚になるように、あるいは、目をいつも宇宙に向けるように、いつも楽しく、など、これらの事を一日中考えることができるようになりました。(たぶん習慣になったのかもしれない)そしてそのようにしようと考えています。しかし時々挫折しそうになることがあります。いつも楽しく自分の内を見つめて、利己的想念を消しているのですが、あまりに利己的想念が多いので打ち消すのがひじょうにつらくなることもありま

す。ただどぼくはもう自分が昔の自分にもどれないということがわかっています。だから「アダムスキーの思い出」なんかを読んで彼の意志の強さを見習います。そして齒をくいしばります。いつか自分もアダムスキーのように何にもまけない意志を持ち、心は寛容に、超能力などを持てるように、そういう希望を持っています。そしてそう考えて心を新たにします。

ぼくは想念観察がこれほど重要なのかということを知って、それを実行してからわずか一ヶ月しかたっていないのです。だから、これからいろいろ挫折しそうになることもあるでしょうが、また、これから長い道があるのだと思って自分の可能性を考えているのです。ぼくは意志が弱いのです。いろいろな物に興味を持って、それを成就できずに終わっています。しかしそれは、

自分の心をうわべだけ満たしていたものにすぎなかったからだと思います。しかしついに自分が求めようとしていたものが見つかつたように思います。

高校三年の時、学校の帰りに本屋によって偶然円盤の本を見つけてきました。そして「同乗記」を読んで、その時「まったく信じられないことだが、すばらしいことだ」と日記に書いています。(いまは日記をつけていません。過去にとりつかれたくないので)それからアダムスキーの本を全部読んでいくうちに、これは真実だと思うようになりました。そしてGAPを知つたのです。だからアダムスキー哲学を知つてから三ヶ月ほどしかたっていないのですが。

ま、とにかくこれからのいへんだろうと思います。来たるべき時代にそなえて、それまでに、いくぶんなりとも成就しているように自分もつていきたいものです。久保田先生、これからもがんばってください。ぼくもがんばります。

(神奈川県平塚市 橋本和宏)

多忙の中でのニュースレターの作成は本当に大変な事と思います。それにもかかわらず、毎回充実していくので感謝に絶えません。

一面を見ると世はまさに混乱の相を呈しています。それだけに、何物にもゆるがな強い信念は重要です。ともすれば四官一限は、美形を求め、耳は甘い酔うような音を求め、鼻もうっとりするにおいを求め、口は体の要求以上に美味を要求します。我々は感官の満足する世界を作り上げてきました。そして感官の世界を認め人々が、今大きな力をもって世を動しています。多くの人々の内部では、これが真実の姿では

ないという衝動があり、大きな混乱の歯止めとなつていきます。しかし彼らもその衝動が何であるか知らないのです。

また一面を見ると世は静かなる変革が起ころうとしています。「真実」を求めてきた人々の静かなる動きです。頻出するUFOも何かを暗示しているようです。地球人は今まで「従」たるものに自らをゆだねてきました。もはや、主」に帰らねばなりません。考えてみれば、意識・心・肉体で始めて宇宙のポイントたる人間なのです。主」である意識に眼を向けなければ、虚無という霧の中ののしり合っているのと同じなのだと思います。

片眼をつぶった同胞を愛えるならば、自分自身がまず両眼を開いた者とならねば、多少なりとも奉仕すべしとはできません。常に他に対して奉仕しようとする精神は重要だと思います。それに伴って眼界を知ると思っています。最終的にはやはり各人の意志に依存するからです。しかし、忍耐強い、知らずの活動は虚実の中にある同胞の心に、わずかも衝動を呼び起こすにちがいないと確信します。衝動が衝動を招き、次第に大きな波となり、来たるべき新時代に結集することを願つてやみません。

偶像の横行する中で、本物を見つめる人は少ないです。全体から離れた真実などあり得ないからです。個人など、捨て去らねばなりません。個人の満足など捨てても全く惜しいものではないのです。いや、捨てるべきものにちがいません。全ては一つの手で生かされているのですから。

新しい生活を前に、こんな事を考えながら決意を新たにしていること数日です。健康で活動されることを祈っています。

(仙台市 笠原弘可)

久保田先生お元気でですか。ニュースレターとコスモと両方の編集でいそがしいのに、いつも忘れずニュースレターを送つて下さつてありがとうございます。

私は今年やっと愛媛大学の医学部に落ち着きました。浪人時代には、やはり受験のことが気になって「生命の科学」の実践が思うようにできなかったのですが、これで落ち着いてできるのではないかと思っています。大学内でグループを作つてやりたいとも思っています。もしグループができましたら報告しますから、そのときにはアドバイスして下さい。

先生も知つておられると思いますが、宇和島で円盤の推進力を研究されている清家先生の重力研究所に友達といつしよに訪問するつもりです。こういう方面に興味を持つている人はたくさんいると思いますから、ニュースレターあるいはコスモに載せてはいかがですか。

最近、ユリ・ゲラーという超能力者が注目されていますが、あの力はいったいどういう力なのでしょう。か。「生命の科学」や「テレパシー」を読んでも、アダムスキー氏は無機物とも意識を通じさせることができると言っていますし、別に不思議だとは思いませんが、はつきり、どういう力だということがわかりません。よかつたらお答え下さい。

ご多忙だと思えますので健康には十分注意して下さい。

(ユリ・ゲラーについてはコスモ第10号へ来年一月二十日発売)に興味深い記事が載ります。編者)

(松山市 国重和彦)

先日(4月29日)の0時39分に下宿の窓

から空をながめていましたところ、偶然に UFOらしい物体を目撃いたしましたのでお知らせいたします。色は赤みがかつた金色でした。

一見したところでは星の様でしたが、星よりもはるかに大きく輝いておりましたし、山を背景にしておりましたので星でないことは明らかです。

かなり低いところに滞空しており、僕が発見いたしましたのは0時39分ですが、それ以前からいたようです。10分程経過した0時49分頃に、急にその輝きが増して、数倍も明るくなったかと思うと、すぐに光が弱くなっていて完全に消えてしまい、再び大きく輝いたかと思うとまた光が弱々しくなって完全に消えてしまいました。結局、二度点滅をくり返してその場で消えて(？)しまいました。おそらく UFO に近いのではないかと思います。僕が郡山に来て以来 UFO を目撃したのは2度めか3度めであります。

というのは、一度めは昨年(2月1日)の午後10時半頃に、赤い星の様な物体がかなり低いところを飛んでいるのを目撃いたしましたので、しばらく走って追いかけてました。結局見失ってしまいました。相当地に風の強い夜でしたが、そのせいかも知れませんが、エンジン音等は全く聞こえませんでしたのでヘリコプターなどではないと思いたです。2月14日から春休みに入りましたので津の家に帰省しましたが、確かその日の夜にも全く同じ物体を庭で目撃しあわててカメラを取って再び表にとび出したところ、もう飛び去った後でした。郡山で目撃した二度めは、学校の昼休みに(昨年の11月15日)友人達と3人で下宿の僕の自宅で UFO の話をしていたので、僕は寝ころがって窓から外をながめながら話して

いましたところ、銀白色の物体(相当高い所を飛んでいた)が正に「フラフラ」と飛んでゆくのが見え、ちょうど真珠の様に見えました。しかしこれは一瞬の出来事で、はっきりはしません。その時いっしょにいた友人の幌村啓君は、後に阿武隈川の堤防の近くを自転車で行っていたところ、近くにいた女子高生達が空を指さして変なものが飛んでくると騒いでいたので、見ると、ちょうど僕が以前目撃したのと同じ様な赤い光がまっすぐ向かってきて頭の上を飛び越えて行ったそうです。彼はもちろん自転車で行ったかと思うと急に加速して飛び去ってしまったそうです。

僕がはじめて UFO を目撃いたしましたのは小学校4年生の時、朝登校の途中、空中に銀灰色の変なものが止まっているのに気がつき、しばらくながめておりました。最初は旅客機かとも思いましたが、全く空中に停止しておりまして、よく見ると垂直尾翼、主翼等がまったくついておらず、エンジン音などまったくないので非常に不思議でした(あの当時は UFO に関する知識はほとんどゼロに等しかった)。どうやら葉巻型の母船だったらしいと気付いたのはその後です。

(福島県郡山市 奥野正人)

こんにちは、日本 G A P のみなさん。このあいだ一九七四年(四九年)二月十八日の夜の六時半ごろ近所の友人からあやしい物体が飛んでいると、報告にきたので、あわてて外に出ると、ほんとに変なものが飛んでいるではないか。方向は南西から北東へ、明るさは一等星よりやや明るいぐらい、大きさは米つぶよりひとまわりぐらい大き

い。速さはジェット機と同じくらいかな。音は別になかった。色は白っぽく、形は円形です。こぼけていました。高度はあまりよくわかりませんでした。これは円盤だと思えますか。それとも人工衛星だと思えますか? 目撃者は、ぼく、近所(同住所)の作内一裕くん、兄弟の厚智くんとそのおばさん、どこかの兄さん二名くらい。たださんねんと思うのは写真がとれなかったことだ。カメラはあつたんだが、あわてて写せなかった。前にも一度夏にも円盤らしきものを見たが星だと思つた。

ぼくたちは円盤に興味があり、ほとんどの日に夜、空を見ている。こんど人数を集めて、U F O の会を作ろうと思つています。そのときは協力をお願いします。よろしく。

(旭川市 清水秀彦)

久保田先生お元気ですか。先日は電話までかけてくださってどうもありがとうございます。随分ご迷惑をおかけしてしまつたのではないかと思います。

スライドは3月23日(土)午前11時ころからおおよそ30分間にわたり、視聴覚教室に於いて上映されました。今回は前宣伝が効を奏したらしく30数名とますますの盛況でした。スライドのなかに前回のもものと重複したもの何コマが含まれていたということと、またスライドを見に来る人たちのほとんどがすでに TV など多くの UFO フィルムを見たことがあるだろうということ、今回の上映内容には工夫をこらさざるを得ませんでした。そこで同封されていた解説文や UFO 関係の書籍、G A P ニューズレターその他を参考にして解説文を全面的に書き直しました。その内容は U F

O 全般にわたるもので、同じスライドを幾度か繰り返し使用したため、延べ枚数は70度コマとなりました。ところがそのためスライドの上映手順が非常に煩雑なものとなつてしまいました。そこで前日に学校からカセットテープレコーダーを借りて来て解説をバックミュージックとともに録音し、当日はそれに合わせてスライドを上映しました。そういう訳でコマの回転が速くなり、さほど退屈させることもなく無事終えることができました。あとからの話を聞いたところでは、思つたより好評だったようで、ぼくとしても嬉しいですね。ともかく来場者が比較的多かったのはホッとしました。一週間程前から張り出し始めた数枚のポスターが役に立ったのだらうと思つています。こういった催しには前宣伝がいかに大切であるかということをつくづく思い知らされました。30数名というのはけっこう多い数ではありませんが、この学校としては充分成功の域にはいるものだと聞きます。ハミリ上映会などを開いても、いつもほとんど集まらないのが現状なのです。ところでポスター作成や解説文書きとその録音などに多くの時間をとられてしまい、とうとうアンケートまで手がまわりませんでした。これは大変残念なことですが、とにかく終わって良かったです。久保田先生の好意はいつでも忘れません。

当分はスライド上映会を開く見通しはありません。でも何か月先かわかりませんが、またその時はよろしくお願ひいたします。いつもほんとうにありがとうございます。久保田先生も健康には充分ご留意下さいませうに。それではお元気で。

(札幌市 松村裕二)

久保田八郎氏の御協力もあって、我々の催し物「知られざる世界」は、みごと全校中二番目の人気を得て大成功を収めることができました。六月一日・二日の両日合わせて約三六〇〇人程はいり、スライドも好評でした。スライドは両日合わせて合計十回上映し、上映時間は約二十分位、一回三〇〇—三〇〇人の人がはいり、合計して二五〇人程度の人がはいりました。期日の関係で説明の準備もなく、初めは解説文の棒読みでしたし、また人物の紹介や重力場エンジンの説明など科学的なことが多分に含まれているので、見ている人はあきはしないかと心配しましたが、大部分の人々が興味をもってスライドに見入っていました。中にはかなりくわしい人もいて、アダムスキイの名前くらい知っている人も多かったようです。しかし多くの人々にUFOについて関心をもっていただき、また新たな認識をもっていただきことは疑いありません。約三六〇〇人の人々が、UFOについて自分なりに何か考えてくれた事は我々にとってこの上ない幸せであります。

なお、スライドを受け取った時にNo.14・49・50のなかったことをここで付け加えておきます。

コスモ誌からの転載、スライドの拝借など、今回は久保田八郎氏をはじめとするコスモ誌の編集の方々への厚い御協力によって催し物を成功させることができました。今回我々は御迷惑をおかけしたばかりで、こちらとしてもただただ感謝のことばもございません。最後に一同、コスモ社の方々に深く御礼申しあげます。数ヶ月の間どうもいろいろとお世話になりました。

(神奈川県東光学園高校 石川英嗣)

このたびスライドを使用させていただきありがとうございました。文化祭のうわつた気分もようやくおさまってきました。スライド上映だけの展示でしたが、予想外の見学者がありました。このことはUFOに関しての本当の情報を知らなかった人々が多くなったのだと思います。人数不足で貧弱な展示となり、上映時以外は展示室をしめるようなありさまでしたが、のべ二百数十名の見学者は熱心に説明を聞いてくれました。また、他の学年から二名の仲間が入会したいといってきました。これからはつきりとした研究会をつくっていかうと考えています。

(東京・麻布高校 渡辺康美)

鳥のさえずりも一段と高くなり、黒い土から青いふきのとうが顔をだし始めました。先生はいかがお過ごしでしょうか。先日GAPスライドを借用させていただきました。先日GAP54号をお送りいただき有難うございました。斎藤氏撮影の編隊飛行している円盤、久保田先生の剣崎灯台で撮影された円盤等興味深く拝見させていただきました。ところが連日、青年団で多忙な日を過ごし、思うように準備できなかったため、UPOに興味を持って人へ直接行き、スライドを映し、説明をしました。そして大変喜んでいただき、感謝されました。ある友達は円盤の飛行する原理に興味を持ち、長い時間話し合いました。このスライドを一般の人へ見せるにはデータ不足のように感じられました。

さて私事、今年は私の住んでいる東地区の青年団団長に推薦され、この機会により良い奉仕ができるよう頑張りたいと思いま

す。スライドの返送が遅れまして申し訳ありません。20番目のスライドが入っておりませんでしたので、お調べください。それは先生の御健闘を祈ります。

(山形県上山市 漆山晃治)

6月15、16日の2日間、県立横浜翠嵐高校に於いて文化祭が開かれ、私たちの「テレビシュー研究会」では「少しでも多くの人に、超能力、空飛ぶ円盤そして無限の宇宙に関心を持ってもらう」という趣旨で各研究団体の御協力を得、展示、映写会を行いました。

教室を2つに割り、片方は展示専用、もう一方は映写室としました。展示室では、まず入って右側の黒板にテレビシューの解説を模造紙に11枚、窓側は念写の解説1枚と念写のパネルを模造紙2枚分、隣と分けている側には円盤の解説3枚と円盤のパネルを模造紙5枚分の広さに、廊下側は宇宙哲学の解説3枚をそれぞれ角材等を使って展示しました。又、部屋中央には雑誌新聞の切り抜きを貼ったペニヤ板2枚をつるし、その下に机を並べ超能力、円盤の本を置きました。映写室では、念写の科学的実在を証明した8mmフィルム、誰もが興味を持って見られる空飛ぶ円盤とオーラのスライドをそれぞれ上映しました。2日間で数百名訪れたと思いましたが、多くの人はテレビシュー、念写、宇宙哲学の解説より、円盤と念写のパネルに強い興味を示していました。

(神奈川県翠嵐高校 成田久鑑)

緑に花やかさを添えた桜も散りやがて薄紅色の石楠花のそして春の日野祭りの季節となつてまいりました。長期に渡りましてスライドを手元に留めまして大変申し分け

なく思っております。

今回のスライドは今までより比較的年令の低い小・中学生の方々にもお見せ致しました。成年用の解説テープを使用しましたため、どうかな、理解して頂けるかなと思いましたが、結構子供様達は私の申す事を理解し、率直に且熱心に見られていました。彼らもやはり私達と同様知りたい、強い欲求があらう様子でした。又その日の子供会の会場には有線で宣伝されたせいか、中年の方も一人御覧になつておられました。

話は変わりますが私は今秋の各市町村で行なわれる文化祭でのUFO・宇宙人関係の展示を考えております。その時に際しましては何分の先生の御理解と御協力、又写真等の転載許可をお願い申しあげます。お借りしました「スライド72」誠にお有りありがとうございました。何度も使用させて頂きましたが、変色がすすんではいないかと心配ですが、全くありがとうございます。

(滋賀県 関谷正明)

九月六日消印の速達大変ありがとうございました。実を言うと、先生との連絡が待ち遠しかった時でした。文化祭での「UFOとGAP」のスライド公開予定が七日、八日に計画しておりましたが、不可能となったことは誠に残念でした。七日に先生のマンションの電話番号を尋ねましたところ、まだ設置されていないとのこと、今度はコスモ出版社にかけてみました。それが朝だったためか誰もいらしやらない様子でした。そうしたわけで連絡が絶えてしまったため、多少なりとも先生の安否なども気づかうようになりまして。とにかく先生も元気でがんばっていらつしやるようで何

よりと存じます。ほんとうに毎日毎日、山ほどのお仕事を背負っている先生が私に託っては大変に思います。

七日、八日と、スライド公開を断念いたしました私たちは、今までアダムスキー著書の中から得た知識を私たちのできる範囲内で説明することにしました。また、円盤写真の大判が欲しかったのですが、私たちにはどうにもなりません。そこで木炭による複写というかデッサンしたものを会場にすることにしました。やはり実際問題として、迫力というか実の点で欠ける面が多いように思われました。また説明の方も全く準備なしに、当日になって、なんとかやろうということになってやっただけで、まったく盲目的な説明に終わってしまいました。会場には初日(七日)は男性で本校の人だけだったようで、およそ最初二〇名ほど集まってくれました。本校では初めての試みとあって、日ごろUFO関係に興味のあった人とか、何気なくはいった方もあったようです。まず池田君のUFOに関する一般の概念、そしてその機能、そして金星の円盤の内部構造、そしてその他諸々の知識をわかりやすく、しかもいいいに論じてくれました。その後、私がG・アダムスキーとその哲学、そしてGAPに関する説明を断片的に述べましたが、私の話し方のまずさと、おそろくむすかしきのため、途中から抜け出る人もありました。それでも最後まで熱心に聞いてくれて、質疑応答が長々と続いたくらいです。その話が最後のほうになると、生まれ変わりの目的とか、なぜその必要があるのか、そしてその方法はどんなものであるのかなどと私たちが答えきれなくなるほどでした。また、円盤関係の本は全部読みあさったとか、それぞれ高度

な質問も出され、それについて池田君は巧みな論法でもって次々と応答してくれました。

二日目は、昨日の話のむすかしきを反省して、円盤についての説明と、アダムスキー、そしてGAPに関することを軽く述べるだけにしました。それでも午後になって池田君の二時間近い詳しい生々しい説明にみんなもひかれておりました。その中で、GAP哲学のめざす根本的な目標からテレパシー、そして想念観察、そして催眠術などにわたる池田君自身の解釈による説明はたいへんすばらしく、効果的でした。私もこの会を催すことによって多くを学び取ることができました。また、少数ではありましたが熱心に聞いてくださいました。それでスライド公開はできませんでしたが、私たちは満足しています。二日目は他校生も多く、女性の方も首を縦に振って聞いてくれる方もありました。

いろいろと準備もできず資料不足で、その点に關しましてはしかたがないと思いますが、私たちは少数の方にですけれどもGAPやUFOに関する紹介ができたと思います。ほんとうにスライド公開を期待してくれた人も多く、上映できなかったことは非常に残念でしたが、先生の移転などの御多忙極まる中に無理なお願いを私たちが悪いと思えます。今考えると、私たちはスライドにたより過ぎていたようです。スライドが届かなければ半分あきらめていたからです。

今年の文化祭(山東祭)はあいにくの雨でしたけれども八日の日曜日には多くのお客様が来てくれました。私といたしましては大変うれしく思いました。文化祭恒例のラリークダンスも開かれまして、私は出席

できませんでしたが、その中に、何か、一人一人の心が一つに合体しているような印象を受けました。

後のスライド公開についてですが、まだ池田君とも相談しておりませんが、これからは受験勉強に本格的に取り組まねばならぬ時期に来ておりますので、どうするかはわかりません。しかし私といたしましては是非実施したく思います。なお先生にスライドを送ってもらう際はあらためて書きたいと思います。

今回の説明会で私が一番痛切に感じましたことは、私がいかに無知なことでありました。まだまだ勉強すべきだと思います。また私がいかにまだそれが進歩できる証拠であると思うと、それに対してありがたくなつてまいります。まだまだ書きたいことは山ほどありますが、この辺で失敬したいと思います。

だんだん寒さも増してまいります。その上、毎日の御苦労でおからだなどこわすことのないようがんばってください。私も生活をひきしめて、地球の学問同様、宇宙の学問、アダムスキー哲学をたゆまず学習したく思います。では御活躍を期待いたします。

(山形県上市市 山口 緑)

九月に入りました。先生もニューズレターの編集でおいそがしいことと存じます。私たちが無事に山東祭を終えたところで、GAPスライドを頼みしておりましたので間に合わないとはわかったときは大変失望しました。そこで私は、あまりにスライド

のみに執着していたことに気づき、私は私なりにできるだけアタックしてみようと思いい、山口君に協力したいです。幸い先にお送りしたパンフレットが準備してあつ

たため、短日時で用意が整いました。今考えてみますと、たとえスライドが到着しても私たちの熱意が逆にそなわれたかもしれません。

さて、山東祭の状況について説明しますと、正直いってあまり関心を呼ばなかったようです。せつかく訪れる人がいても、スライド中止と知るやそそくさと帰る人も出る始末でした。しかし私たちが最も感激させたのは、少数ですが、真剣に話を聞いてくれた人々がいたことです。私たちがまだよくわからない事までつづこんで質問する人もおりましたし、質問はしなくても、私たちにも理解力のある人だと思わせる人もおりました。全体的にみますと、やはり発表してよかったと感じます。

私たちは今年で高校を卒業する身です、一度でいいから山東祭で発表したいと考えたことが今実現して、大変うれしいです。山口君も同様だと思います。展示物といえば、アダムスキー書にのっている写真をコピーで絵にし、たったそれだけではありますが、私たちににとっては思い出深いものがあります。会場にいらつしやつた人たちも、いつしか知り合ひのように思われてなりません。その方々と、どこかで合ったときに声をかけてもらいたいと思っております。とにかく、先生、ありがとうございました。それから、いろいろ御迷惑をおかけしてすみません。さようなら。

(山形県村上市市 池田史明)

◎ゆずつて下さい

GAPニューズレター一号から四十八号までと五十号をどなたか安く売って下さいませんか。

(佐賀市北川副町枝吉七二六 松尾武美)

●わが国唯一のUFO
 <空飛ぶ円盤研究> 専門誌

UFOと宇宙 コズモ

特大号 No.9

11月27日 書店発売!

特価400円 円115

〒110 東京都台東区秋葉原3-3 コズモ出版社 振替・東京119478 電話(255)8784代

<口絵写真>

- カラー また千葉県に円盤が出現! / 横浜市上空のUFO?
 東京狛江市の弾丸型UFO / 岡崎市の3機編隊UFO
 UFO-清水で撮影 / 小野川湖上空の細長く黒い物体 / 和田湖上に円盤が出現(?)

イラスト 市川淑一
 池田雅行
 中沢修一

不思議な光体の出現と3000メガサイクルの受信!

UFOによる米空軍機追尾事件 翼 淳 8

水晶のようなドームをつけた“奇妙な物体”と男 J.マシアス / アンヘル・バリゴン

スペインに出現した円盤と乗員 20

ジョージ・アダムスキーはまだ影を投げかけている! 26

世界中に出現するアダムスキー型円盤の意味するもの

ゴードン・クレイトン

UFOは人類を宇宙へ導いている!? 中山真理 34

仏典の中にもあった天空人の地球来訪 志田行賢 41

大気圏内のUFOの速度 アイリーン・グランチ 46

狛江市で撮影されたUFO 48

UFO情報 54

東京で「宇宙人特別講演会」開催 57

●<天空と大地>科学シリーズ—7

地震の鍵をにぎるマントル対流! 58

日本列島はどうなるのか? 地球物理学の權威が警告する

東京大学教授 理学博士 竹内 均

久保田社長、熱海でUFO講演 / <口絵写真説明> 東京中野区上空のUFO 68

科学トピックス 69

連載科学記事—

宇宙・引力・空飛ぶ円盤(4) 75

慣性と遠心力 / 空中浮揚現象の謎

レナード・クランプ

富山湾上空に謎の白線が出現! 85

国内UFO目撃報告 86

読者の声
 OPINIONS

93

Supplement—追記 98

編集部より

99

日本GAP月例研究会

大阪支部例会

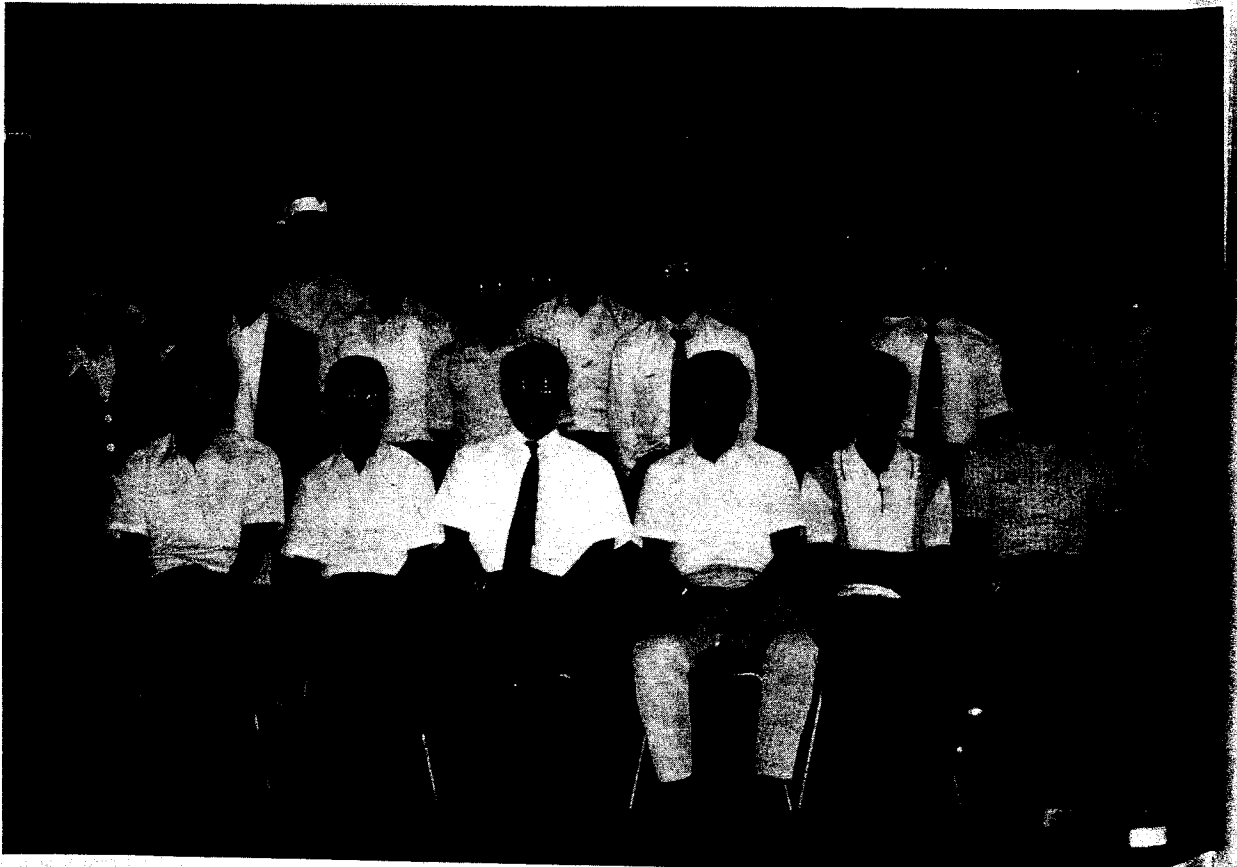
1. 日 時
毎月第三日曜日。午後一時より五時まで。
大阪府吹田市出口町四丁目
2. 会 場
吹田市民会館 電話(三三八)七三五一
国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。
3. 会 費
百円。
4. 携行品
テキストとして「宇宙哲学」、「生命の科学」を持参。

東京例会

1. 日 時
毎月第一日曜日、午後一時より五時まで。
ただし来年の一月だけは第三日曜日
2. 会 場
上野公園内「東京文化会館」
電話(八二八)二二一一 国電上野駅の「公園口」下車。改札口を出たすぐ前。
会館正面に向かって左側の入口から入る。
奥のエレベーターから四階へ行くこと。
3. 会 費
二百円。茶菓が出る。
4. 携行品
テキストとして「テレビシー(文久書林刊)」を持参。一月からは「生命の科学」

日本GAPは左記のとおり東京と大阪支部の二個所で月例研究会を開催して会員の精神的向上と宇宙哲学の探求及びUFOに関する知識の吸収の場を提供しております。都府内及び近郊の方はぜひご参加下さい。テレビシーの練習も行なっています。

写真は今年9月の東京例会



〔声〕の続き)

「同乗記」を読んで初めて筆を取らせて頂きます。この本の内容について感銘を受けた部分を若干引用させてもらいます。

「彼らは互いに顔を見合わせて笑った。誰でもこの質問に答え得るのであるが、その機会を相互に譲り合う礼儀を楽しんでいるのだなと思った。私たちの世界で数人の人々が集合したときに生じる雰囲気とは全然違うことを私は痛感したのである。真の愛ならば尊敬や相互の信頼と理解とを深めるはずだ。他の世界で知られている愛という言葉は、地球で曲解しているような偽りの所有欲を全然含んでいません」

「感動したのは、高声、哄笑、熱狂的雰囲気などが全くないことである。確かに誰もが楽しそうであり、地球人と違って喧嘩でもなく、顔つきも深刻でない」

私がずっと以前から頭の中で考えていた世界が具体化されており、またその時の喜びは大きかった。ただ残念なのは、私の知っている人々にこのようなフィーリングに共鳴を起こす人がほとんどいなかった。けれどもこのような高いフィーリングの人々が私の身近に現われる事を確信し、宇宙的な線に浴った新鮮な想念を常に持ち続けようと努力している次第です。

アダムスキーの体験は歴史が初まって以来、貴重な体験の中の一つであり、私たち地球人に対しても「生きた生活の知恵」として役立つものばかりです。このような貴重な体験を一人でも多くの人と分かち合いたいと思っております。どなたでもおたよりを下さい。

(東京都豊島区池袋四一四三五 峰木方
大学院生 秋山 清)
電話 九八五一〇三五九 峰木方(呼)

編集集後記

■九月末発行の予定が延びに延びて、やっとここに刊行実現。ご迷惑をかけて申し訳ありません。本年度はわずか二回発行というなさけない結果に終わりましたが、先般十一月十八日に全国に臨時号(チラシ)を発送して日本GAP健闘中の様子をお知らせしましたので活動続行中であることはご理解いただけたものと存じます。本号はオフセット版下をすべて写真植字で作成し、この写植代が約十三万円、印刷代が約二十万円、計三十三万円を要し、五百名の会費のみによるプール資金だけでは発刊不可能ですが、幸いご寄付で補填できました。厚く御礼を申し上げます。ただし写植貼り込み・レイアウトはすべて編者みずから行ない、レイアウト料約十二万円を浮かせました。そして総頁六十頁という本誌創刊以来最も充実した内容になり、国内のUFO研究グループの機関誌として他にひけをとらないものになったと自負しますが、これはすべて会員諸兄弟の奉仕的なご協力のたまものです。次号からは頁数を少し減らして密度を高くし、刊行回数をふやすよう考慮中です。

■本号から米國GAP本部(ジョージ・アダムスキー財団)発行の機関誌「コスミック・プレティン」より記事を転載することにし、手始めに理事長アリス・ウェルズ女士の「真我を知るために」を掲載しました。アリスは「空飛ぶ円盤実見記」に出てくる一九五二年十一月二十日の砂漠における最初のコンタクトの際、同行した六人の目撃者の一人で、双眼鏡で望見しながら金星人をスケッチした人として有名です(このスケッチは同書に掲載)。本誌23頁の写真は数年前にアリスが編者に贈ってくれたカ

ラー写真の白黒版です。

■編者が米國GAP本部より除名されたという噂がありますが、これはひどいデマです。その他種々のデマが流れていて、日本GAP解散説もあるようですが、これも事実無根です。疑惑が生じたら何はおいてもまず編者宛ご照会下さい。

■在ニューヨークの宮内温夫氏によるアダムスキー墓参報告と写真はすばらしいものです。故人も喜んでいましょう。

■宇宙的な音楽に関してよく質問を受けますが、編者がこの頃ブルックナー以外にもマラーの交響曲を愛聴し、特に第三番の第三楽章(森の動物たちが私に語ること)から終楽章まで(愛が私に語ること)は宇宙の彼方から響く感じでした。レコードはパインスタイン・ニュー・ヨーク・フィル演奏(二枚組)を推奨します。第三楽章のホルン独奏部ではホリニウムをあげて下さい。

■編者経営のコズモ出版社では次の条件により社員を募集しています。

- 1. (a) 編集部員、(b) 営業部員、(c) 経理部員 (各一名)
- 2. (a) は短大卒以上の男子、雑誌編集の経験者。三十五歳位まで。英文和訳がある程度可能な人。(b) は高卒以上の男子で自動車の運転免許ある方。(c) は高卒以上の男子または女子。三十歳位まで。(b)(c)は未経験にても可。
- 3. 以上の希望者は日本GAP会員またはその家族・親せきに限りません。
- 4. 志望者は履歴書(写真添付)と願書を左記宛にご送付下さい。

〒110 東京都台東区秋葉原三の三
株式会社 コズモ出版社
アキバビル
社長 久保田八郎

電話 (二五五) 七〇一九 (社長専用)

■御寄付の御礼。(本年二月一日より十一月十日まで。敬称略)井口才司(東京)六万六千六百円、匿名氏(千葉県)二万円、匿名氏二万円、安田正人(川崎市)十七万円、丹野廣(松戸市)三万五千円、漆山晃治(山形県)一千元、菅原一浩(岩手県)二万円、塩谷信男(東京)一万円、丸谷芳正(東京)一千一百三十円、内田格男(福岡県)一万円、三谷秀一(東京)一百七十五円、匿名氏二千元、鈴木清隆(仙台市)五千元、下村哲夫(富山県)五千元、片京寢屋川市)五千元、佐藤テル(福島県)一千元、笠原弘可(仙台市)切手二千円分、志田真人・恵美子(市川市)二万円、伊藤達夫(今治市)一千元、浅井総一(京都)一千元、勝又俊明(東京)切手二千八百円分、無名氏二千元、菅原史崇(川口市)五千元、黒田保夫(静岡県)切手三百七十五円分、中岡桂園(滋賀県)五千元、関谷正明(滋賀県)五千元、清水畑博(吹田市)今年度総会費用として十万円。

■スライドについては返却遅延・損傷等によりトラブルが発生しますので、申訳ないことですが貸し出しは中止しました。ご了承下さい。

■皆様のご健闘をお祈りします。(K)

1974. 11
GAP ニューズレター 55号
編集発行人 久保田 八郎
発行所 日本GAP
〒113 東京都江川区本一色町三六五
新小岩マンション818
振替東京359112 (久保田名義)
頒価3000円・送料70円

世紀の謎 空飛ぶ円盤を究明した最新刊!

空飛ぶ円盤騒ぎの発端

高梨純一著

定価 九五〇円

アールノルドの事件以来、全世界にわたって頻発している魅力ある謎、円盤の本体に迫るため、その基礎知識として、円盤研究の発端前後の事情とその後の展開を関係資料を徹底的に調査・総合し、興味深い事件の紹介を中心にまとめた円盤研究史として注目される新著。

空飛ぶ円盤とアダムスキ 空飛ぶ円盤の跳梁
久保田八郎編 五五〇円 高梨純一著 八五〇円

空飛ぶ円盤のすべて 空飛ぶ円盤実在の証拠
平野威馬雄編者 八〇〇円 高梨純一著 八〇〇円

アポロと空飛ぶ円盤 空飛ぶ円盤の真相
平野威馬雄・荒井欣一著 八〇〇円 G・アダムスキ久保田八郎 八〇〇円

空飛ぶ円盤は実在する これが空飛ぶ円盤だ
A・ミンデル・田辺貞之助訳 八〇〇円 平野威馬雄編 八〇〇円

空飛ぶ円盤実見記 それでも円盤は飛ぶ
G・アダムスキ・D・レスリー 八〇〇円 平野威馬雄編 八〇〇円

空飛ぶ円盤同乗記 火星からの空飛ぶ円盤
G・アダムスキ久保田八郎八〇〇円 C・アランガム・岩下 肇 七〇〇円

空飛ぶ円盤の秘密 空飛ぶ円盤ミステリ
T・ヘサラム久保田八郎 七〇〇円 G・パーク平野威馬雄訳 八〇〇円

空飛ぶ円盤と宇宙人

黒沼 健著 謎と神秘に包まれた円盤の存在とその出発地までも実証する数多の驚異の事実を紹介し、ついでで古代科学と円盤のかかわりあいを遺跡、文献等から興味深く論証する。現代の科学的合理主義のみでは解明できない神秘領域にまで及んだ異色の好著。

九五〇円

●東京 文京 本郷5-30 振東141750●

高 文 社

●京都 左京 百万編 振京23523●

アダムスキー哲学三大名著 絶賛発売中！
スペースブラザーズから伝えられた宇宙的思惟法と宇宙的な生き方とを三部に分けて詳述。GAP会員必携の書。注文は各出版元へ直接どうぞ。

G・アダムスキー 久保田八郎訳

宇宙哲学 ¥480 770

東京都新宿区納戸町33たま出版 振替東京94804

G・アダムスキー 久保田八郎訳

テレパシー ¥350 770

G・アダムスキー 久保田八郎訳

生命の科学 ¥480 770

絶賛！アダムスキーの弟子でありコンタクトイ一でもあったフレッド・ステックリングのすばらしい体験記と哲学！特に幼児教育について重要な示唆を与える。宇宙問題探求者必読の書！

F・ステックリング 久保田八郎訳

なぜ空飛ぶ円盤は来るのか ¥550 785

東京都文京区白山1-29-12 文久書林 振替東京 2521

●本誌旧号 ●想念観察手帖

すべて品切れとなりました。
在庫ありません！

オーソン肖像写真

ジョージ・アダムスキーが砂漠で最初にコンタクトした金星人は後に「同乗記」でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記憶にもついで画家に描かせた肖像画をカラー写真にしたものを日本GAPでは月例研究会で頒布してきた。残部が少々あるので希望者は直接本部宛注文されたい。スペース・ブラザーズとの一体化を図る上で重要な資料となるものである。

◎キャビネ判(11.5×16.5c) ¥500 740

◎名刺判は製作中止)

上記写真のみは直接日本GAPへご注文を。